全体講評（国語）

本学では、現代文・古文を通じて、傍線を付けて設問の箇所を明示することなく、内容に関する問いを出している。これは、いたずらに問いを難しくするためのものではない。問いを順に解くことによって、現代文は、文章の主題を正しくとらえることができるようにしたものであり、古文は、文章の展開が正しく理解できるようにしたものであって、いずれも、ふだんからこのような問題意識を持って読んでほしいという出題者からのメッセージが込められたものである。だから、正答の選択肢を連ねると、現代文の場合には、文章全体を要約したものと近くなり、古文の場合には梗概のようになっている。つまり、本学の出題形式は、文章を正しく理解しているかどうかを見るのに不可欠なのである。このような本学の考え方は、受験生や関係各位にも次第に浸透しているようである。

出題者は、現代文と古文をあわせて平均6割台の得点率になることを目安に問題をつくっているが、近年得点率が上昇傾向にあるので、本学の出題形式への対応が進んでいるものと思われる。ただし、今回は古典で得点率が6割を下回る問題がいくつか見られ、古典の基礎力の充実が求められるように思われた。

現代文は例年やや長い文章を出題している。内容はさまざまな分野にわたっているので、日ごろから多くの文章に接するようにするとともに、文章を精読することにより、読解力を養っておくことが必要である。また、現代の私たちに身近な問題や世界的に重要なテーマについて、常に問題意識を持っていることが大切だと思う。

現代文においては、基本的には評論を取り上げ、マークセンス方式の問いでは内容把握の問題を中心に出題した。受験生の読解力を見ることを重視したためである。一部の試験では、記述式の内容把握の問題を1題出題した。ここでは、問題文の内容を正しく理解するとともに、設問に対して指定された字数の中で自分の考えを的確に表現することが必要である。

なお、本学の現代文の問題では、問題文をほぼ原文のままの形で示すようにしている。問題文の表題、小見出しや出典名も明示するようにしている（設問の都合により小見出しを削除する場合もある）。それらは文章の内容を端的に表したものであって、論旨を正確につかむための重要な手がかりとなるものだからである。問題文を読む場合には、これを単なる小見出しや出典名だと考えずに、本論の内容とくらべあわせることによって問題文を正しく理解するようにしてほしい。

本学では、他大学の問題によく見られる、いわゆる空欄補充の問題を出していない。これは、空欄補充の問題では受験生の実力をはかることはできないと考えているためではない。それどころか、最も短い形式で、受験生の実力をはかるのに適した設問であると考えている。では、なぜそれを出題しないのか。それは、問題文や注などから知りうるすべてを参考にしながら、設問を手がかりとして問題文を理解してもらいたいと思うからである。本学で最も重視し、また工夫しているのは、文章をどのようにして正しく読み解くかということなのである。

その他、現代文の問題文中にある漢字を用いて、大学入学共通テストで行われているものと同じ形式の語彙の問題を出題している。本学では、一部の試験に記述式の漢字の書き取り問題があるが、それとは別に、マークセンス方式で語彙力を見るために出題しているものである。そのために、通常の書き取りの問題とは違って、個々の漢字としてはやさしい漢字も出題されているが、それらを熟語の形で問うことによって、語彙力を試すものとなっている。出題した漢字は、問いの漢字も、選択肢の漢字もほぼ常用漢字の範囲である。それらの問題の中には、よくできている問題も多かったが、正答率が極端に低いものもあり、受験生の語彙力の差が表れている。こうした語彙力は一朝一夕に身につくものではない。日ごろの読書の蓄積によって語彙力を身につけるようにしたいものである。

古文においては、例年どおり、平安時代の物語を中心として出題した。本学の問題では、リード

文や注を可能な限り詳細に付すようにしており、特別な知識がなくても、日常の学習の積み重ねによって身についた読解力で十分解くことができるようにしている。

人間関係や場面などストーリーの把握力を求める問いが多かったが、物語作品のおおまかなストーリー程度は、学習しておいてほしい。ストーリーがわかっているかどうかで、解きやすさも変わってくるだろう。また、和歌を問う問題が組み合わされている場合があるのも近年の傾向である。和歌の内容のみならず技巧まで出題されることがあり、技巧の理解によって和歌の理解も深まるので、この点においても日頃から学習しておいてほしい。いずれにせよ、基本的な古文単語の確実な理解や古文の読解知識があれば、正答に至れるはずであり、やはり、基本的な読解力を身につけておいてほしい。

古文を読み解くには、古文の基本語彙、文法的知識、文脈把握の力、歴史的な知識などが必要であることはいうまでもないが、本学のマークセンス式の問題では、むしろそれらを直接問う形をとらずに、それらに基づいて内容が正しく理解されているかどうかを見る設問の形で出題し、受験生の読解力を見るようにしている。基本語彙の表面的な意味だけを暗記しているような場合、受験生の実力の有無がはっきり表れ、概して正答率は低くなっている。古文の重要語句や文法の基礎知識の習得はいうまでもないが、それだけにとどまらず、それらに基づいて文章を精読する習慣をつけるようにしてほしい。一方、多くの古典に接することによって、古文特有の表現に慣れ、作品を理解する力を高めることも必要である。

2026 年 度 入 学 試 験 問 題

国　　語

注　意　事　項

Ⅰ　試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。

Ⅱ　解答用紙はすべて黒鉛筆（ＨＢ）〈シャープペンシルは，ＨＢ 0.5 mm 以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）

Ⅲ　解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し，切取線から切り離してください。

Ⅳ　試験時間は 75 分です。

Ⅴ　問題は 22 ページで大問 2 問です。

マーク記入上の注意

1．解答欄にマークするときは，ＨＢの黒鉛筆で次の正しい例のように，濃く正確にぬりつぶしてください。

2．マークのしかた

(ア)　正しい例

a　解答が1つの場合，例えばイと解答するときは

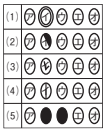
のように，マークしてください。

b　解答が2つの場合，例えばイとウと解答するときは

または

のように各1つずつマークしてください。

(イ)　悪い例



○印でかこむ。
全部をぬりつぶしていない。
レ印をつける。
｜印をつける。
1欄に2つ以上マークする。

このような記入をしてはいけません。

3．一度記入したマークを訂正する場合は，消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。

のように×印をしても消したことにはなりません。

4．解答用紙を折り曲げたり，破ったり，また汚したりしないでください。

一　次の文章は、一九三年刊行の『思考の整理学』の一節である。以下の文章を読んで、後の問いに答えよ。

現実に二つある、と言ったら笑われるであろうが、知恵という〝禁断の木の実〟を食った人間には、現実は決してひとつではない。

われわれがじかに接している外界、物理的世界が現実であるが、知的活動によって、頭の中にもうひとつの現実世界をつくり上げている。はじめの物理的現実を第一次的現実と呼ぶならば、後者の頭の中の現実は第二次的現実と言ってよいであろう。

第二次的現実は、第一次的現実についての情報、さらには、第二次的現実についての情報によってつくり上げられる観念上の世界であるが、知的活動のために、いつしか、しっかりした現実感をおびるようになる。ときとしては、第一次的現実以上にリアルであるかもしれない。知識とか学問に深くかかわった人間が、しばしば第一次的現実を否定して、第二次的現実の中にのみ生きようとするのは、このことを裏付ける。

かつては、主として、読書によって、第二次的現実をつくり上げた。読書人が一般に観念的であるのは、外界にじかに接するかわりに、知識によって間接に触れているからである。

思索も外界を遮断するところにおいて深化させられることがあり、やはり、第二次的世界を築き上げる。

しかし、大部分の人間は、ほとんど第一次的現実によってのみ生きていた。それでは本当に現実に生きることにならないのも早くから気付かれていて、哲学への志向が生れた。人間のエイイはすべて、第二次的現実の形成に向けられていたと考えてよいほどである。第一次的現実をはっきり認識するためには、それを超越した第二次的現実の立場が必要である。

従来の第二次的現実は、ほとんど文字と読書によって組み立てられた世界であった。ところが、ここ三十年の間に新しい第二次的現実が大量にあらわれている。そのことがなお、充分はっきりとは気付かれていない。テレビである。テレビは真に迫っている。本当よりもいっそう本当らしく見える。茶の間にいながらにして、世界のはてまで行くことができる。旅行したような気持になれる。そして、そのうちにそれが、第二次的現実であることを忘れてしまう。

本を読んで頭に描く世界が観念の産物であることはゴカイの余地がすくない。ところが、*1ブラウン管から見えてくるものはいかにもナマナマしい。第一次的現実であるかのようなサッカクを与えがちだ。現代人はおそらく人類の歴史はじまって以来はじめて、第二次的現実中心に生きるようになっている。これは精神史上ひとつの革命であると言ってよかろう。

従来の活字による第二次的現実のほかに、強力な映像による第二次的現実が出現したことが、現代の知的生活を複雑にしている。

思考の問題を考えるに当っても、この二種の現実の違いを無視することは許されないであろう。従来、ものを考えるといえば、まず、第二次的現実の次元であった。これまでに読んだ先人の業績との対話から新しい思考が生れる。そのかわり第一次的現実とのかかわりはあいまいであった。むしろ、低次の現実から絶縁することで、いっそう高い思考への飛翔ができると考えた。*2前章で考えたように、ことわざが軽んじられてきたのもそのためと思われる。

しかし、思考は、第一次的現実、素朴な意味で生きる汗の中からも生れておかしくはないのである。近代人がこの思考に関心を示さないのは、知の階級制度が確立してしまっているように思われていたからにほかならない。働くものにも思考、思索、知識の創造がなくてはならない。

これまでは、〝見るもの〟〝読むもの〟の思想が尊重されたから、〝働くもの〟〝感じるもの〟の思想は価値がないときめつけられてきたのである。しかし、知識と思考は、見るものと読むものとの独占物ではない。額に汗して働くものもまた独自の思考を生み出すことを見のがしてはならない。いかに観念的な思考といえども、人間の考えることである以上、まったく、第一次の現実がかかわりをもっていないということはあり得ない。いかに間接的ではあっても、ナマの生活が影を落しているはずである。

現代のように、第二次的現実が第一次的現実をアットウしているような時代においては、あえて第一次的現実に着目する必要がそれだけ大きいように思われる。人々の考えることに汗のにおいがない。したがって活力に欠ける。意識しないうちに、抽象的になって、ことばの指示する実体があいまいになる傾向がつよくなる。抽象は第二次的現実から生れる思考の性格である。現代の思想がいかにもなまなましいような装いを見せ、映像によって具体的であるかのような外見をしてはいるけれども、現実性

はいちじるしく稀薄である。

もっと第一次的現実にもとづく思考、知的活動に注目する必要がある。割り切って言うならば、サラリーマンの思考は、第一次的現実に根をおろしていることが多い。それに比べて、学生の考えることは、本に根がある。第二次的現実を土壌として咲く花である。生活に根ざしたことを考えようにも、まだ生活がはっきりしていないのだから致しかたもない。

そういう学生が社会へ出て、本から離れると、そのとたんに、知的でなくなり俗物と化す。知的活動の根を第二次的現実、本の中にしかおろしていないからである。第一次的現実に根ざした知的活動には、飛行機を要する。[*3]グライダーではできない。学生の思考と社会人の思考との間には、グライダーと飛行機の違いがある。

社会人も、ものを考えようとすると、たちまち、行動の世界からトウヒ(2)して本の中へもぐり込む。読書をしないと、ものを考えるのが困難なのは事実だが、忙しい仕事をしている人間が、読書三昧になれる学生などのまねをしてみても本当の思索は生れにくい。行動と知的世界とをなじませることができなければ、大人の思考にはなりにくいであろう。

思考の整理ということから言っても、第二次的現実、本から出発した知識の方が、始末がいい。都合よくまとまりをもってくれる。第一次的現実から生れる知恵は、(3)キソンの枠の中におとなしくおさまっていない。新しいシステムを考えないといけないことが多い。社会人の思考が散発的アイディアに終りがちなのはそのためであろう。

歩きながら考える、というのは、第一次的現実の中における思考である。生活を中断し、書物の世界に没入して、ものを考えるのとは質的に違う。われわれの知的活動が、とかく、模倣的であり、真に創造的でないのは、このナマの生活との断絶に原因があるのではあるまいか。

仕事をしながら、普通の行動をしながら考えたことを、整理して、新しい世界をつくる。これが飛行機型人間である。日本人の知的訓練が、すでにのべてきたように、多く他者に引かれてはじめて動き出すグライダータイプであったことが、第二次的現実の中での知的活動のみを認める傾向となっている。

汗のにおいのする思考がどんどん生れてこなくてはいけない。それをたんなる着想、思いつきに終らせないために、システム化を考える。それからさきは、第二次的現実にもとづく思考と異なるところはない。真に創造的な思考が第一次的現実に根ざしたところから生れうることを現代の人間はとくと肝に(4)メイじる必要があるだろう。

第一次的現実の思考の結晶したもっとも通俗なものが、さきにものべたことわざである。これは本の中から生れたものでない点、前近代的であって、同時に現代的でもある。

さらに、われわれの日常使っているひとつひとつのことばは、その源流をさかのぼってみれば、第一次的現実から創り上げられた思考の産物、つまり第二次的現実であることに思い至る。そのことば自体がいつのまにか、第一次的現実のようになっているのも問題である。

（外山滋比古『思考の整理学』による　※一部本文を改めた箇所がある）

注　＊1　ブラウン管＝現在、主流である液晶型テレビが開発される以前の、テレビの映像を結ぶシステム。ここではテレビの画面のこと。

＊2　前章で考えたように、ことわざが軽んじられてきた＝筆者は前章でことわざを、個々の体験をパターン化し、一般化、記号化したものと説明し、それが学校教育やインテリ社会では低く見られていると述べている。

＊3　グライダー＝動力をもたずに滑空する航空機。

問1　太線部(ア)「サッカク」、(イ)「メイ(じる)」を漢字に改めよ。

問2　筆者のいう、第一次的現実と第二次的現実についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　第一次的現実は、われわれがじかに接している外界、物理的世界であるのに対して、第二次的現実は、知的活動によって、頭の中につくり上げているもうひとつの現実であり、外界に接するかわりに、知識によって間接にしか触れることはできないが、第一次的現実以上にリアルな現実である。

b　第一次的現実は、われわれがじかに接している外界、物理的世界であるのに対して、第二次的現実は、第一次的現実についての情報、さらには、第二次的現実についての情報によってつくり上げられる観念上の世界であるが、知的活動のために、いつしか、しっかりした現実感をおびるようになる。

c　第一次的現実は、われわれがじかに接している外界、物理的世界であるのに対して、第二次的現実は、主として、読書によってつくり上げた観念上の世界であり、そのため、一般に読書人は、第一次的現実を否定して、第二次的現実の中にのみ生きようとする。

d　第一次的現実は、われわれがじかに接している外界、物理的世界であるのに対して、第二次的現実は、第一次的現実を否定して、知識とか学問に深くかかわった人間によってつくられた世界であり、これによって、外界にじかに接するかわりに、知識によって間接に外界に触れることになる。

e　第一次的現実は、われわれがじかに接している外界、物理的世界であるのに対して、第二次的現実は、知的活動によって、頭の中につくり上げているもうひとつの現実であり、第一次的現実をはっきり認識するために、仮説としての第二次的現実が必要である。

問3　テレビについて述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　従来の第二次的現実はほとんど文字と読書によって組み立てられた世界であったが、テレビの出現によって、大量の第二次的現実があらわれた。これによって、現代人は人類の歴史はじまって以来はじめて、第二次的現実中心に生きるようになった。

b　テレビから見えてくる映像は、真に迫っており、ほとんど第一次的現実といってよく、これによって、茶の間にいながらにして、世界のはてまで行くことができるようになった。そこで、現代人はそれまでとは異なるあらたな第一次的現実を獲得することになった。

c　従来の第二次的現実はほとんど文字と読書によって組み立てられた世界であったが、テレビの出現によって、大量の第二次的現実があらわれた。その結果、テレビの映像がそれまでの第一次的現実にとって代わるようになり、第二次的現実であることを忘れてしまうことになった。

d　テレビから見えてくる映像は、真に迫っており、ほとんど第一次的現実といってよく、これによって、茶の間にいながらにして、世界のはてまで行くことができるようになった。そこで、現代人はそれが第二次的現実であることを忘れてしまい、大量の第一次的現実の中に生きるようになった。

e　従来の第二次的現実はほとんど文字と読書によって組み立てられた世界であったが、テレビの出現によって、大量の第一次的現実が、お茶の間にいながらにして体験できることになった。これは精神史上ひとつの革命的なできごとだったと言ってよい。

問4　知識と思考について、筆者はどのような問題があると考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　従来、知識と思考は第二次的現実の次元であり、低次の現実から絶縁することで、いっそう高い思考への飛翔ができると考えてきたが、思考は第一次的現実から生れてもおかしくはない。しかしながら、近代人がこの思考に関心を示さないのは、知の階級制度が確立していて、低次の現実との絶縁があいまいなままであったからである。

b　これまでは〝見るもの〟〝読むもの〟の思想が尊重されたから、〝働くもの〟〝感じるもの〟の思想は価値がないときめつけられてきたが、知識と思考は、見るものと読むものとの独占物ではない。額に汗して働くものもまた独自の思考、思索、知識の創造がなくてはならないが、それは第一次的現実にもとづく、低次のものにすぎない。

c　いかに観念的な思考といえども、人間の考えることである以上、まったく、第一次の現実がかかわりをもっていないということはあり得ない。いかに間接的ではあっても、ナマの生活が影を落しているはずである。したがって、額に汗して働くものもまた独自の思考を生み出すことを見のがしてはならない。

d　従来、ものを考えると言えば、まず、第二次的現実の次元であり、先人の業績との対話から新しい思考が生れると考えられてきた。しかし実際にはむしろ、低次の現実からこそ新しい知識と思考が生れてきたのであるが、近代人がこの思考に関心を示さないのは、知の階級制度によって、低次のものとして価値がないものと排除されてきたからである。

e　知識と思考は、見るものと読むものとの独占物ではない。額に汗して働くものもまた独自の思考を生み出すことを見のがしてはならない。働くものにも思考、思索、知識の創造がなくてはならないからである。しかし、近代人がこの思考に関心を示さないのは、知の階級制度が確立してしまっていて、働くものの思考とは絶縁する必要があったからである。

問5　第一次的現実にもとづく思考、知的活動に注目する必要について説明したものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　現代の思想がいかにもなまなましいような装いを見せ、映像によって具体的であるかのような外見をしてはいるけれども、映像は第二次的現実であり、現実性はいちじるしく稀薄であるので、第一次的現実にもとづく思考、知的活動に注目する必要がある。

b　抽象は第二次的現実から生れる思考の性格であるが、サラリーマンの考えることには、汗のにおいがせず、意識しないうちに、抽象的になって、ことばの指示する実体があいまいになる傾向がつよいので、第一次的現実にもとづく思考、知的活動に注目する必要がある。

c　いかに観念的な思考といえども、人間の考えることである以上、まったく、第一次の現実がかかわりをもっていないということはあり得ない。いかに間接的な第二次的現実であっても、ナマの生活が影を落しているはずであるので、第一次的現実にもとづく思考、知的活動に注目する必要がある。

d　サラリーマンの思考は、第一次的現実に根をおろしていることが多い。それに比べて、学生の考えることは、本に根がある。第二次的現実を土壌として咲く花であり、生活に根ざしたものではなく、社会に出たとたん、知的でなくなるので、第一次的現実にもとづく思考、知的活動に注目する必要がある。

e　第一次的現実に生きているはずの社会人も、ものを考えようとすると、たちまち、行動の世界からトウヒして本の中へもぐり込むが、学生のまねをしてみても、本当の思索は生れにくいので、第一次的現実にもとづく思考、知的活動に注目する必要がある。

問6　グライダーと飛行機を用いて、筆者はどのようなことを述べようとしているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　学生の思考と社会人の思考との間には、グライダーと飛行機の違いがある。学生の考えることは、本に根があり、第二次的現実を土壌として咲く花のようなもので生活に根ざしたものではない。社会人も、ものを考えようとすると、たちまちグライダーになってしまうが、学生が飛行機になることはない。

b　学生の思考と社会人の思考との間には、グライダーと飛行機の違いがある。日本人の知的訓練が、多く他者に引かれてはじめて動き出すグライダータイプであったことが、第二次的現実の中での知的活動のみを認める傾向となっているが、行動と知的世界をなじませて新しい世界をつくるのが、大人（飛行機型人間）の思考である。

c　学生の思考と社会人の思考との間には、グライダーと飛行機の違いがある。そういう学生が社会へ出て、本から離れると、そのとたんに、知的でなくなり俗物と化す。知的活動の根を第二次的現実、本の中にしかおろしていないからである。社会人も、その点では、ものを考えようとすると、たちまちグライダーになってしまう。

d　学生の思考と社会人の思考との間には、グライダーと飛行機の違いがある。第一次的現実に根ざした知的活動には、飛行機を要する。グライダーではできない。しかし、第二次的現実から生れる知恵は、第二次的現実を反映せず、社会人の飛行機的な思考は散発的なアイディアに終りがちである。

e　学生の思考と社会人の思考との間には、グライダーと飛行機の違いがある。思考の整理ということから言っても、第二次的現実、本から出発した知識の方が、始末がいい。都合よくまとまりをもってくれる。われわれの知的活動が、とかく、模倣的であり、真に創造的でないのは、それが社会人の思考ではないからである。

問7　二重傍線部あいうえおのカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

ア　エイイ
a　彼は長編の詩を静かにロウエイした。
b　キャンプをするためにテントをセッエイした。
c　屋外イベントの中止を早々に告知したのはエイダンだった。
d　彼はエイビンで繊細な人物だ。
e　私は学校でシュエイ業務にたずさわっている。

イ　ゴカイ
a　熱中症ケイカイアラートが発表された。
b　捜査一課がユウカイハンを捕まえた。
c　大学でカイボウガクを学びたい。
d　彼は入社以来十年もカイキンを続けている。
e　彼は父の形見のカイチュウ時計を使用している。

ウ　アットウ
a　彼はシュウトウに準備してプレゼンテーションを行った。
b　昨年トウサンした会社のリストが公表された。
c　彼女はトウメイ感のある素肌に憧れている。
d　私は手続きに必要な戸籍トウホンを取り寄せた。
e　私は明日のイベントにトウダンすることになった。

a　彼にはヒ‖ガイ妄想の症状がみられる。
b　戦乱でヒ‖ヘイした国家を再建する。
c　海外進出のゼヒ‖を問う声が社内であがっている。
d　学校でヒナン訓練を実施した。
e　私は結婚ヒ‖ロウエンに招待された。

㋔　トウヒ‖

a　彼は試験で自分の能力を十分にハッキ‖できる合格した。
b　校内のフウキ‖が乱れていることは遺憾だ。
c　会社のますますの発展をキネン‖して乾杯した。
d　彼はタキ‖にわたる研究分野で着実な成果をあげている。
e　医者に現在までのキオウレキ‖を聞かれた。

㋕　キ‖ソン

問8　真に創造的であるとはどのようなことか。五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

二　次の文章は、『源氏物語』の一節である。光源氏は朧月夜との密会が原因で謀反の罪を着せられて、自ら須磨に退去することを決意した。光源氏は、紫の上（本文では「女君」）の居所である二条院の西の対に行き、別れを惜しむ。これを読んで、後の問いに答えよ。

西の対に渡りたまへれば、御格子も参らでながめ明かしたまひければ、*1簀子などに若き童べ所どころに臥して、今ぞ起き騒ぐ。宿直姿どもをかしうてゐを見たまふにも心細う、年月経ば、かかる人々もえしもありはてでや行き散らむなど、さしもあるまじきことさへ御目のみとまりけり。「昨夜はしかじかして夜更けにしかばなん。例の思はずなるさまにや思しなしつる。かくてはべるほどだに御目離れずと思ふを、かく世を離るる際には、心苦しきことのおのづから多かりけるを、ひたや籠りにてやは。常なき世に、人にも情けなきものと心おかれはてんと、いとほしうてなむ」と聞こえたまへば、「かかる世を見るより外に、思はずなることは、何ごとにか」とばかりのたまひて、Ⓐいみじと思し入れたるさま、人よりことなるを、ことわりぞかし。*2父親王はいとおろかに、もとより思しつきにけるに、まして世の聞こえをわづらはしがりて、おとづれきこえたまはず、御とぶらひにだに渡りたまはぬを、人の見るらむことも恥づかしく、なかなか知られたてまつらでやみなましを、*3継母の北の方などの、「にはかなりし幸ひのあわたたしさ。あなゆゆしや。思ふ人、かたがたにつけて別れたまふ人かな」とのたまひけるを、さるたよりありて漏り聞きたまふにも、いみじう心憂ければ、これよりも絶えておとづれきこえたまはず。また頼もしき人もなく、げにぞあはれなる御ありさまなる。

「なほ世に赦されがたうて年月を経ば、*4巌の中にも迎へたてまつらむ。ただ今は、人聞きのいとつきなかるべきなり。朝廷にかしこまりきこゆる人は、明らかなる月日の影をだに見ず、安らかに身をふるまふことも、いと罪重かなり。過ちなければ、さるべきにこそかかることもあらめと思ふに、まして思ふ人具するは、例なきことなるを、ひたおもむきにもの狂ほしき世にて、立ちまさることもありなん」など聞こえ知らせたまふ。日たくるまで大殿籠れり。

*5帥宮、*6三位中将などおはしたり。対面したまはむとて、御直衣など奉る。「位なき人は」とて、*7無紋の直衣、なかなかいとなつかしきを着たまひてうちやつれたまへる、いとめでたし。*8御鬢かきたまふとて、鏡台に寄りたまへるに、面痩せたまへる影の、我ながらいとあてにきよらなれば、「こよなうこそおとろへにけれ。この影のやうにや痩せてはべる。あはれなるわざかな」とのたまへば、女君、涙を一目浮けて見おこせたまへる、いと忍びがたし。

身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡のかけは離れじ

と聞こえたまへば、

別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなぐさめてまし

柱隠れにゐ隠れて、涙を紛らはしたまへるさま、なほここら見る中にたぐひなかりけりと、思し知らるる人の御ありさまなり。

（『源氏物語』須磨巻による）

注　＊1　簀子‖建物のひさしの外に、細い板や竹を少しずつ間をあけて打ちつけて作った縁。　＊2　父親王‖兵部卿の宮。紫の上の父。
＊3　継母の北の方‖紫の上の継母。　＊4　巌の中にも‖「いかならむ巌のなかに住まばかは世の憂きことの聞こえこざらむ」による表現。
＊5　帥宮‖蛍の宮。光源氏の弟。　＊6　三位中将‖頭の中将。光源氏の友人。　＊7　無紋の直衣‖文様のない絹で仕立てた直衣。
＊8　御鬢かきたまふとて‖頭の両側面の髪をお整えになって。

問1　光源氏が西の対を訪れたときの様子はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　光源氏が西の対にいらっしゃると、紫の上は格子もお下ろしにならないで物思いにふけって夜を明かしてしまわれたので、簀子などに女童がところどころに横になっていたが、ちょうど今起きてざめいている。その宿直姿がかわいらしいのをご覧になるにつけても心細く、光源氏は「年月が経てば、これらの人々も紫の上に最後まで仕えることができずに散り散りになっていくのだろう」と、いつもなら気にかからないことばかりが目にとまった。

b　光源氏が西の対にいらっしゃると、紫の上は格子にもお近づきにならないで物思いにふけって夜を明かしてしまわれたので、簀子などに女童がところどころに横になっていたが、ちょうど今起きてざめいている。その宿直姿がかわいらしいのをご覧になるにつけても心細く、光源氏は「年月が経てば、これらの人々も紫の上が最後まで面倒を見ることができずに散り散りになっていくのだろう」と、いつもなら気にかからないことばかりが目にとまった。

c　光源氏が西の対にいらっしゃると、紫の上は格子にもお近づきにならないで物思いにふけって夜を明かしてしまわれたので、簀子などに女童がところどころに横になっていたが、ちょうど今起きてざめいている。その宿直姿がかわいらしいのをご覧になるにつけても心細く、光源氏は「年月が経てば、これらの人々も紫の上に最後まで仕えることができずに散り散りになっていくのだろう」と、いつもなら気にかかりそうもないことまでも目にとまった。

d　光源氏が西の対にいらっしゃると、紫の上は格子もお下ろしにならないで物思いにふけって夜を明かしてしまわれたので、簀子などに女童がところどころに横になっていたが、ちょうど今起きてざめいている。その宿直姿がかわいらしいのをご覧になるにつけても心細く、光源氏は「年月が経てば、これらの人々も紫の上が最後まで面倒を見ることができずに散り散りになっていくのだろう」と、いつもなら気にかからないことばかりが目にとまった。

e　光源氏が西の対にいらっしゃると、紫の上は格子もお下ろしにならないで物思いにふけって夜を明かしてしまわれたので、簀子などに女童がところどころに横になっていたが、ちょうど今起きてざめいている。その宿直姿がかわいらしいのをご覧になるにつけても心細く、光源氏は「年月が経てば、これらの人々も紫の上に最後まで仕えることができずに散り散りになっていくのだろう」と、いつもなら気にかかりそうもないことまでも目にとまった。

問2　光源氏は、前夜に紫の上のところを訪れなかった理由をどのように言ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　光源氏は「こうしております時間があるとさらにあなたのそばにいたいと思うのですが、このように世間を離れる際には、気がかりなことが普段より多いものですから、家に閉じこもってばかりもいられません。この世の中に、情け知らずと見限られてしまうだろうかと、それも私には情けないことで、あちこち挨拶には回っているのです」と言った。

b　光源氏は「こうしております時間があるとさらにあなたのそばにいたいと思うのですが、このように世間を離れる際には、気がかりなことが自然と多いものですから、家に閉じこもってばかりもいられません。この世の中に、情け知らずと見限られてしまうだろうかと、それも相手には不都合なことで、あちこち挨拶に回っているのです」と言った。

c　光源氏は「せめてこうしております間だけでもあなたのそばにいたいと思うのですが、このように世間を離れる際には、気がかりなことが自然と多いものですから、家に閉じこもってばかりもいられません。この世の中に、情け知らずと見限られてしまうだろうかと、それも相手には気の毒なことで、あちこち挨拶に回っているのです」と言った。

d　光源氏は「せめてこうしております間だけでもあなたのそばにいたいと思うのですが、このように世間を離れる際には、気がかりなことが普段より多いものですから、家に閉じこもってばかりもいられません。この世の中に、情け知らずと見限られてしまうだろうかと、それも私には苦痛なことで、あちこち挨拶に回っているのです」と言った。

e　光源氏は「せめてこうしております間だけでもあなたのそばにいたいと思うのですが、このように世間を離れる際には、気がかりなことが自然と多いものですから、家に閉じこもってばかりもいられません。この世の中に、情け知らずと見限られてしまうだろうかと、それも私には心外なことで、あちこち挨拶には回っているのです」と言った。

問3　紫の上は、父・兵部卿の宮のふるまいについて、どのように思っていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　父である兵部卿の宮は、たいそう気が小さく、近頃は世間の噂を迷惑がって、お見舞いにさえもお越しになれない有様であって、紫の上は、人の手前恥ずかしくて「かえって光源氏との間柄を知られてよかったかもしれない」とお思いになっている。

b　父である兵部卿の宮は、たいそう気が小さく、近頃は世間の噂を迷惑がって、お見舞いにさえもお越しにならない有様であって、紫の上は、人の手前恥ずかしくて「かえって光源氏との間柄を知られないままのほうがよかったのに」とお思いになっている。

c　父である兵部卿の宮は、たいそういいかげんで、近頃は帝の評価を気にして、お見舞いにさえもお越しにならない有様であって、紫の上は、人の手前恥ずかしくて「かえって光源氏との間柄を知られてよかったかもしれない」とお思いになっている。

d　父である兵部卿の宮は、たいそういいかげんで、近頃は世間の噂を迷惑がって、お見舞いにさえもお越しにならない有様であって、紫の上は、人の手前恥ずかしくて「かえって光源氏との間柄を知られないままのほうがよかったのに」とお思いになっている。

e　父である兵部卿の宮は、たいそういいかげんで、近頃は帝の評価を気にして、お見舞いにさえもお越しになれない有様であって、紫の上は、人の手前恥ずかしくて「かえって光源氏との間柄を知られないままのほうがよかったのに」とお思いになっている。

問4　継母の北の方などは、紫の上の境遇をどのように評していたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　北の方などは「突然手に入れた幸運があわただしく逃げていくことだ。ああ忌まわしい。あの方は、ご自身を思ってくれる人と、次から次へとお別れになる人ですね」とおっしゃっていた。

b　北の方などは「突然手に入れた幸運があわただしく逃げていくことだ。ああ気味が悪い。あの方は、ご自身が思う人と、次から次へとお別れになる人ですね」とおっしゃっていた。

c　北の方などは「突然手に入れた幸運があわただしく逃げていくことだ。ああ甲斐のないことだ。あの方は、ご自身を思ってくれる人と、次から次へとお別れになる人ですね」とおっしゃっていた。

d　北の方などは「偶然手に入れた幸運があわただしく逃げていくことだ。ああ不吉だ。あの方は、ご自身を思ってくれる人と、次から次へとお別れになる人ですね」とおっしゃっていた。

e　北の方などは「偶然手に入れた幸運があわただしく逃げていくことだ。ああ見苦しい。あの方は、ご自身が思う人と、次から次へとお別れになる人ですね」とおっしゃっていた。

問5　光源氏は寝る前に、紫の上に何を伝えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　光源氏は「もしいつまでもお許しがなくて年月が過ぎたら、どんな巌の中へでも私をお迎えください。今すぐというのでは世間の噂がたいそう広まってしまうでしょう。私には過失はないけれど、前世からの因縁でこういうことにもなるのだろうと思うと、ましていとしい人のところを訪問するのは前例のないことですし、またこれ以上の災難がふりかかってくるかもしれません」とお伝えになった。

b　光源氏は「もしいつまでもお許しがなくて年月が過ぎたら、どんな巌の中へでも私をお迎えください。今すぐというのでは世間の評判があまりよくないでしょう。私には過失はないけれど、都を去ろうとしているからこそお許しが得られることにもなるのだろうと思うと、ましていとしい人のところを訪問するのは前例のないことですし、またこれ以上の災難がふりかかってくるかもしれません」とお伝えになった。

c　光源氏は「もしいつまでもお許しがなくて年月が過ぎたら、どんな巌の中へでもあなたをお迎えします。今すぐというのでは世間の噂がたいそう広まってしまうでしょう。私には過失はないけれど、都を去ろうとしているからこそお許しが得られることにもなるのだろうと思うと、ましていとしい人を連れて行くのは前例のないことですし、またこれ以上の災難がふりかかってくるかもしれません」とお伝えになった。

d　光源氏は「もしいつまでもお許しがなくて年月が過ぎたら、どんな巌の中へでもあなたをお迎えします。今すぐというのでは世間の評判があまりよくないでしょう。私には過失はないけれど、前世からの因縁でこういうことにもなるのだろうと思うと、ましていとしい人を連れて行くのは前例のないことですし、またこれ以上の災難がふりかかってくるかもしれません」とお伝えになった。

e　光源氏は「もしいつまでもお許しがなくて年月が過ぎたら、どんな巌の中へでもあなたをお迎えします。今すぐというのでは世間の噂がたいそう広まってしまうでしょう。私には過失はないけれど、前世からの因縁でこういうことにもなるのだろうと思うと、ましていとしい人を連れて行くのは前例のないことですし、またこれ以上の災難がふりかかってくるかもしれません」とお伝えになった。

問6　帥宮や三位中将が訪れたときの、光源氏の様子はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　光源氏は「無位の者は」と遠慮なさって、無地の直衣で、かえって古風に感じられるのをお召しになり、気分が優れない様子でいらっしゃるが、その姿はまことにも悲しい。

b　光源氏は「無位の者は」と遠慮なさって、無地の直衣で、かえって古風に感じられるのをお召しになり、地味な身なりでいらっしゃるが、その姿はまことに心ひかれる。

c　光源氏は「無位の者は」と遠慮なさって、無地の直衣で、かえって心がひかれるのをお召しになり、地味な身なりでいらっしゃるが、その姿はまことに立場にふさわしい。

d　光源氏は「無位の者は」と遠慮なさって、無地の直衣で、かえって心がひかれるのをお召しになり、気分が優れない様子でいらっしゃるが、その姿はまことに感じがよい。

e　光源氏は「無位の者は」と遠慮なさって、無地の直衣で、かえって心がひかれるのをお召しになり、地味な身なりでいらっしゃるが、その姿はまことに見事である。

問7　光源氏が紫の上に歌を詠んだときの状況として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　光源氏が「よりいっそう衰えてしまったなあ。この鏡の姿くらいにやつれたのだろうか。なんとも情けないものだ」と言うと、紫の上は、涙を目にいっぱいに浮かべてこちらをご覧になっている。光源氏はそれがたいそういじらしく思われて、「私の身は放浪していくわけではないのだから、心もあなたのそばを離れない鏡のかげのように、あなたから離れはしないでしょう」と歌を詠んだ。

b　光源氏が「この上なく衰えてしまったなあ。この鏡の姿くらいにやつれたのだろうか。なんとも情けないものだ」と言うと、紫の上は、涙を目にいっぱいに浮かべてこちらをご覧になっている。光源氏はそれがたいそういじらしく思われて、「私の身は放浪していくけれども、心はあなたのそばを離れない鏡のかげのように、あなたから離れはしないでしょう」と歌を詠んだ。

c　光源氏が「よりいっそう衰えてしまったなあ。この鏡の姿くらいにやつれたのだろうか。なんとも情けないものだ」と言うと、紫の上は、涙を目にいっぱいに浮かべて遠くをご覧になっている。光源氏はそれがたいそういじらしく思われて、「私の身は放浪していくけれども、心はあなたのそばを離れない鏡のかげのように、あなたから離れはしないでしょう」と歌を詠んだ。

d　光源氏が「この上なく衰えてしまったなあ。この鏡の姿くらいにやつれるはずもないのに。なんとも情けないものだ」と言うと、紫の上は、涙を目にいっぱいに浮かべてこちらをご覧になっている。光源氏はそれがたいそういじらしく思われて、「私の身は放浪していくわけではないのだから、心もあなたのそばを離れない鏡のかげのように、あなたから離れはしないでしょう」と歌を詠んだ。

e　光源氏が「この上なく衰えてしまったなあ。この鏡の姿くらいにやつれるはずもないのに。なんとも情けないものだ」と言うと、紫の上は、涙を目にいっぱいに浮かべて遠くをご覧になっている。光源氏はそれがたいそういじらしく思われて、「私の身は放浪していくけれども、心はあなたのそばを離れない鏡のかげのように、あなたから離れはしないでしょう」と歌を詠んだ。

問8　光源氏の歌に対して、紫の上はどのように応じたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　紫の上は「お別れしましても、あなたのかげだけは鏡に留まるものではありますが、それを見ても心を慰められることはありません」と詠み、柱の陰に隠れて座って、涙を見せまいとしていらっしゃる。その姿は「やはりこれまで会った多くの女性の中でも並ぶ者がない方だったのだ」と納得せずにはいられないご様子である。

b　紫の上は「お別れしましても、あなたのかげだけは鏡に留まるものではありますが、それを見ても心を慰められることはありません」と詠み、柱の陰に隠れ入って、涙を見せまいとしていらっしゃる。その姿は「やはりこれまで過ごした時間の中でも最も美しい」と納得せずにはいられないご様子である。

c　紫の上は「お別れしましても、せめてあなたのかげだけでも鏡に留まるのであれば、それを見て心を慰めることができましょうけれども」と詠み、柱の陰に隠れ入って、涙を見せまいとしていらっしゃる。その姿は「やはりこれまで過ごした時間の中でも最も美しい」と納得せずにはいられないご様子である。

d　紫の上は「お別れしましても、せめてあなたのかげだけでも鏡に留まるのであれば、それを見て心を慰めることができましょうけれども」と詠み、柱の陰に隠れて座って、涙を見せまいとしていらっしゃる。その姿は「やはりこれまで会った多くの女性の中でも並ぶ者がない方だったのだ」と納得せずにはいられないご様子である。

e　紫の上は「お別れしましても、せめてあなたのかげだけでも鏡に留まるのであれば、それを見て心を慰めることができましょうけれども」と詠み、柱の陰に隠れて座って、涙を見せまいとしていらっしゃる。その姿は「やはりこれまで過ごした時間の中でも最も美しい」と納得せずにはいられないご様子である。

問9　傍線部Ⓐについて、誰のどのような様子かをあきらかにして、現代語訳せよ。

（以上）

2026年度入学試験問題

国　語

注　意　事　項

Ⅰ　試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。

Ⅱ　解答用紙はすべて黒鉛筆（HB）〈シャープペンシルは，HB 0.5mm以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）

Ⅲ　解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し，切取線から切り離してください。

Ⅳ　試験時間は75分です。

Ⅴ　問題は24ページで大問2問です。

マーク記入上の注意

1．解答欄にマークするときは，HBの黒鉛筆で次の正しい例のように，濃く正確にぬりつぶしてください。

2．マークのしかた

(ア)　正しい例

a　解答が1つの場合，例えばイと解答するときは

(1) ㋐ ● ㋒ ㋓ ㋔

のように，マークしてください。

b　解答が2つの場合，例えばイとウと解答するときは

(1) ㋐ ● ㋒ ㋓ ㋔
(1) ㋐ ㋑ ● ㋓ ㋔

または

(1) ㋐ ㋑ ● ㋓ ㋔
(1) ㋐ ● ㋒ ㋓ ㋔

のように各1つずつマークしてください。

(イ)　悪い例

(1) ㋐ ㋑ ㋒ ㋓ ㋔　○印でかこむ。
(2) ㋐ ◑ ㋒ ㋓ ㋔　全部をぬりつぶしていない。
(3) ㋐ ✓ ㋒ ㋓ ㋔　レ印をつける。
(4) ㋐ | ㋒ ㋓ ㋔　｜印をつける。
(5) ㋐ ● ● ㋓ ㋔　1欄に2つ以上マークする。

} このような記入をしてはいけません。

3．一度記入したマークを訂正する場合は，消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。

(1) ㋐ ● ■ ㋓ ㋔

のように×印をしても消したことにはなりません。

4．解答用紙を折り曲げたり，破ったり，また汚したりしないでください。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一　英米系のフランス革命史

二〇世紀の後半に、フランス革命研究のありかたは、おおきくヘンボウをとげた。典型的なブルジョワ革命というひところの位置づけは、もう通用しなくなっている。以前はさかんだった革命諸勢力の階級分析も、すっかり下火になってきた。こういう史学史の推移を説明してくれる本や論文は、たくさんある。ここでは、その詳細にたちいらない。ただ、この趨勢に英語圏の研究が影をおとしていることは、強調しておきたく思う。

フランス革命研究の本場は、フランスである。なかでも、*1ソルボンヌ大学の革命史講座が、その船頭役をつとめてきた。どこかに、自国の革命史をかがやかしく語りたいという想いも、あったせいだろうか。ながらく、ソルボンヌの研究者たちは、*2ジャコバン独裁期の達成を、力説しつづけた。民衆とプルジョワジーのテイケイなどを、偉大な革命像とともに語ってきたのである。いわゆるジャコバン史学の総本山という立場から。

しかし、英米圏の学者たちは、そのこだわりからまぬがれやすかった。革命期とその前後をひややかにながめる仕事を、彼らははやくから世に問うている。ソルボンヌの熱気に、アングロサクソンが冷や水をあびせる。二〇世紀後半の革命史研究をめぐっては、そんな見取図も、部分的にはえがけよう。

事情通は、*3フランソワ・フュレの業績こそが、革命史観をかえたのだと言うだろうか。たしかに、フュレは一九六〇年代から、ジャコバン独裁を革命の(ア)イツダツとしてとらえている。そのため、革命史学の主流からは「修正主義者」として、あなどられた。しかし、近年の研究は、フュレの見すえた方向へむかいだしている。

アングロサクソンではないフランス人のフュレが、革命史研究に画期をもたらした。フランスの国内だけをながめていると、そのようにも見えてくる。

だが、フュレの研究には英米圏の成果も、とりいれられている。たとえば、C・ジョンソンやR・ストーンらの社会科学が、導入されていた。アメリカのフランス史研究、D・ビーンやS・ヴァイトマンの仕事も、もちこまれている。

フュレに独創性はなかったなどということを、言いたいわけではない。ソルボンヌ主流とのはげしいオウシュウをふりかえれば、誰しもそのケッシュツぶりはみとめよう。ただ、アングロサクソンの学風も、フュレをとおして、フランスにはとどいていた。そのことは、いなめないと考え、あえて書きとめたしだいである。

フランス革命史研究に英米圏の研究が新機軸をつたえ、フランス本国でも検討される。二〇世紀も終わりごろをむかえてからは、その度合いが強くなっている。今は、本場フランスの学界も、L・ハントやR・ダーントンらの研究を、見すごせまい。どちらも、アメリカの学者だが。

ソルボンヌの歴史家が、おそらくフランスの栄光という想いにもかられ、すすめてきた。そんな革命史研究を、外国語の研究が左右することもありうる時代に、今はなっている。あるいは、研究の本場がおちいった困難を、外国人がときほぐしうる時代にと言うべきか。

もちろん、そうした力をおよぼしうる外国語は、英語にかぎられるのかもしれない。今日的な情勢の裏面に、英語という言語じたいが普及力を強めたことは、あげられよう。日本語で書かれたフランス革命史に、その力はとうていのぞめまい。

あとひとつ、フランス革命というテーマの魅力も、研究の国際化をおしひろげただろう。この革命は、近代民主主義の基礎をこしらえたと、世界各国でみなされた。だから、その歴史的分析には、さまざまな国々の歴史研究者がいどんできたのである。

フランス以外の研究者が、研究成果をつみかさねてきた。その一端を、フランス人にも読んでもらえるようフランス語で紹介した者は、いただろう。あるいは、国際的なひろがりを考え、英語にした者も。そして、フランス本国の革命史家たちも、いやおうなくそれらとむきあったのである。

世界中が、フランス革命をおいかけてきた。国際的な関心が、この革命にはむけられている。以上のような情勢も、フランス側に英語の革命史を、うけいれさせたろう。この下地がなければ、二〇世紀後半以後の門戸解放も、ありえまい。

ただ、同じころから、革命像は以前の輝きをうしないだしている。典型的なブルジョワ革命というかつての評価は、成立しがたいようになってきた。そのせいもあり、このテーマへ情熱をもやす研究者の数は、国際的にもへっている。すくなくとも、今の日本では、よほど下火になっていると、そう言わざるをえない。

世界がフランス革命史に、興味をもっている。その熱気が、フランス側の目も、世界へむけさせた。その力学じたいが、今は衰弱を余儀なくされている。外国の革命史が、今後もフランスの学界に感化をおよぼしつづけるかどうかは、わからない。

二　フランス革命と明治維新

フランス革命を、ブルジョワ革命として最初にえがいたのは[*4]ジャン・ジョレスである。

あの革命を、ただの政変としてとらえるべきではない。フランス史の社会経済史的な勢いが、政治の変動をもたらした。その必然的な展開により、ブルジョワジーという階級が権力をつかむにいたっている。ジョレスは、『フランス革命社会主義史』でそうのべた。

なお、この著作は二〇世紀初頭に書かれた『社会主義史』の、その一部をなしている。のちには、フランス革命を論じたところがきりはなされた。そこだけで、独立した作品となったのは、一九二四年からである。統一社会党の指導者であったジョレスが暗殺された、その一〇年後であった。

一九二六年にソルボンヌの革命史をひきついだ[*5]アルベール・マチエはこれを高く評価する。こうして、ジョレスのブルジョワ革命論は、革命史講座の公認学説になっていく。マルクス主義の歴史観が大学にうけいれられた、その典型例だとみなしうる。じっさいには、フランス革命の前から貴族層は、いちじるしくブルジョワ化していた。革命をつうじて、諸産業が飛躍的に発達したわけではないことも、今はわかっている。だから、この革命が社会のありかたをおおきくかえたとは、言いづらくなってきた。前にものべたとおり、現在はブルジョワ革命説を否定するのが、通り相場となっている。

さて、日本では明治維新とフランス革命が、しばしば対比的に語られてきた。論じ手の多くは、たがいの進歩性をくらべ、フランス革命に軍配をあげたものである。

フランス革命はブルジョワ革命をなしとげたが、維新はそこまで時代をうごかしていない。ブルジョワの台頭も見られたが、彼らは封建的な反動勢力との(イ)ダキョウを余儀なくされた。けっきょくは、両者がバランスをたもつ絶対王政＝明治政権を、出現させている。これが、維新を論じるさいの一般通念に、ひところまではなっていたのである。

維新に進歩性をみとめた少数の研究者も、いなかったわけではない。しかし、そんな人びとも、維新を「不徹底」なブルジョワ革命として、位置づけた。フランス革命にくらべれば、革命性の貫徹する度合いは弱いと、みなしてきたのである。

今ふりかえれば、みなフランス革命に幻想をいだいていたのだと言うしかない。しかし、そのことは、またあとで問題にしよう。ここでは、維新を[*6]退要的に位置づける史観の成立と展開へ、目をむけたい。あるいは、その衰退にも。

維新を社会革命とみなす考えは、明治期の史論家たちもいだいていた。[*7]竹越与三郎や[*8]徳富蘇峰が、そういう維新観をあらわしている。

これらをしりぞけたのは、昭和のマルクス主義者たちであった。彼らは、『日本資本主義発達史講座』の諸論文で、維新のおくれた面を強調したのである（一九三二年）。いわく、維新で日本はようやく、ブルジョワ革命の前段階にたどりついた。ブルジョワと封建勢力のならびたつ絶対王政が、やっとのことで成立した、と。

フランス革命は、はるかに先をゆくすすんだ革命として、提示されている。いっぽう、維新は八〇年ほど前のフランス革命よりおくれたところへ、位置づけられた。そして、日本ではその後、この考えが大学をはじめとする知的世界の平均的な理解となる。二〇世紀の後半までは、明治維新＝絶対王政成立説が、たもたれたのである。

くりかえすが、フランスのマルクス主義者は、フランス革命を進歩的にえがきだした。一九二〇年代の左翼学説は、これをかがやかしいブルジョワ革命として評価する。そして、二〇世紀のおわりごろには、それがくずされていった。

いっぽう、日本のマルクス主義史家は、維新を進歩性にかける政変としてとらえている。一九三〇年代の左翼学説は、反動的な面もある絶対王政の政権だと、維新政府を位置づけた。そして、やはり二〇世紀も終盤をむかえたころから、この学説は見はなされるようになる。

学説のうつりかわりは、おおむね並行的である。どちらも、左翼的な観念の盛衰にともない、うかびあがりしずんでいった。ユーラシアの両端で、ほぼ同じように学説史が推移したのである。

だが、フランスの左翼は、自国の革命を前むきにうけとめた。いっぽう、日本の左翼は、自国の維新を後ろむきに理解しようとする。両左翼のあいだに横たわるこの溝は、やはり気になる。どうして、こういうくいちがいができたのかは、説明されるべきだろう。

日本は、一九世紀の後半から、西洋化をめざしてきた。フランスをはじめとする西洋は、まなぶべき手本となっている。だから、革命性はないとする維新像の浮上も、やむをえなかったのだとみなされようか。

しかし、明治の史論家は、しばしば維新を社会革命として提示した。のちの左翼ほどには、停滞的な出来事として見ていない。彼ら史論家の延長上に、維新の革命性を強調する左翼は、どうしてあらわれなかったのか。この点については、理にかなった読み解きが、ぜひともほしいところである。

さきほどもふれたが、フランスの革命史研究には英米の学説も、感化をおよぼした。しかも、大なり小なりソルボンヌのジャコバン史学へ、修正をせまる方向で。そして、これらは、じゅうらいの左翼図式をくずすことに、一定の効果をもっていた。

日本の学界も、一九六〇年代には、アメリカのいわゆる近代化論と、であっている。江戸時代に、近代へとむかう勢いのめえを読みとく諸学説が、つたえられた。[*9]J・W・ホールや[*10]M・B・ジャンセンらの研究である。

日本の歴史学は、日本の近代化を停滞的にえがきたがってきた。江戸時代のことは、明治の絶対王政が成立する前の封建時代として、位置づけている。アメリカの近代化論とはおりあいのつけづらい構えを、とっていた。

けっきょく、日本の歴史学はこれらをはねつけている。日本の近代化を前むきに、しかも江戸時代からみとめる学説は、うけいれがたかった。それらは[*11]ライシャワー路線のイデオロギーで、アメリカの外交を政治的にささえている。そうきめつけることで、まともにはとりあわないこととした。

ただ、歴史学の主流からはなれたところへは、これらも影響をおよぼしている。江戸時代を近代的にとらえる史観は、歴史学の周辺にまで、ひろがっていった。その普及は、やがて明治＝絶対王政説を、がんこなこだわりとして印象づけるようになる。

一九三二年以来のこの学説を、もう今の歴史家は支持しない。二〇世紀の後半から終盤にかけて、しだいにおとろえ、今はほぼきえさった。それを積極的に否定する学問的な検討が、歴史学の場でなされたわけではない。しかし、時代が下がるとともに見はなされ、いつのまにかウンサンムショウ(お)した。

その衰微へ、アメリカ渡来の近代化論が決定的な役割をはたしたとは、言わない。それは、さまざまな要因のひとつでしかないだろう。

ジャコバン史学をおとろえさせたのも、英米圏のフランス革命史研究だけではない。ただ、アングロサクソンの研究は、その[*12]趨勢をなにほどかあとおしていたろう。アメリカの近代化論も、明治＝絶対王政説の衰退に、すこしは効果をおよぼしたと考える。しかし、それを原因のすべてだと、みなすつもりはない。

両者をくらべれば、日本における近代化論の影響を、より限定的にとらえるべきだろう。フランス革命史が、英語の研究でうごかされる度合いには、たぶんおよばないと思う。

維新や近代日本をめぐる研究は、フランス革命史ほど国際化されていなかった。日本の歴史研究は、ほとんど日本の学者だけによって、すすめられてきたのである。

維新については、律令制や室町幕府の研究より、外国人の成果がたくさんあるだろう。日本史のなかでは、比較的世界にひらかれたテーマだと思う。にもかかわらず、その学説史をふりかえる読み物に、外国人の研究は、見いだしづらい。たいていの[*13]レビューは、日本人の研究ばかりをつらねて、書いている。

フランス革命史の学説史整理には、しばしば英語の成果も散見する。くらべれば、維新史研究のそれは、鎖国的である。

もちろん、最大の理由は、維新史がフランス革命史ほど、人気の高くないことにある。世界の歴史学は、フランス革命に興味

をそそいできた。しかし、維新には一部の物好きしか、この言いかたはまずいが、目をむけない。そのちがいも、日仏両国の学説史整理には反映されているだろう。

じっさい、＊14ルイ一六世や＊15ロベスピエールの名は、世界中の読書人に知られている。しかし、徳川慶喜や西郷隆盛の名になじんだ外国人は、日本研究者以外に、まずいない。この圧倒的な差に目をつむり、維新研究史の閉鎖性をあげつらうのは、不公平である。

いずれにせよ、日本とフランスの学説史は、よく似た形で推移した。二〇世紀前半の左翼的な革命史と維新史は、ともに二〇世紀の後半から下火となる。そして、英語の仕事は、影響の差はあっても、それらをおとろえさせる方向で作用した。以上のような点では、つうじあっていたのである。

（井上章一『学問を、国という枠からときはなつ』による　※一部本文を改めた箇所がある）

注　＊1　ソルボンヌ大学＝フランスのパリに創立された公立大学。　＊2　ジャコバン独裁期＝フランス革命期の急進派の結社であるジャコバン派が政権を取った一七九三～一七九四年の期間。　＊3　フランソワ・フュレ＝フランスの歴史学者。（一九二七～一九九七）

＊4　ジャン・ジョレス＝フランスの社会主義者、政治家。（一八五九～一九一四）　＊5　アルベール・マチエ＝フランスの歴史学者。（一八七四～一九三二）　＊6　退嬰（たいえい）＝積極的に新しい物事を取り入れようとする意欲に欠けること。　＊7　竹越与三郎＝日本の歴史学者、政治家。（一八六五～一九五〇）　＊8　徳富蘇峰＝日本のジャーナリスト、歴史家。（一八六三～一九五七）　＊9　J・W・ホール＝アメリカの日本研究者。（一九一六～一九九七）　＊10　M・B・ジャンセン＝アメリカの日本研究者。（一九二二～二〇〇〇）

＊11　ライシャワー路線＝ライシャワー（一九一〇～一九九〇）はアメリカの外交官、東洋史研究者。駐日大使をつとめた。その路線は、日本をアメリカに丸抱えし、文化帝国主義ともいえる路線であった。　＊12　頽勢（たいせい）＝いきおいが衰えること。　＊13　レビュー＝批評、評論。　＊14　ルイ一六世＝フランス王。フランス革命で処刑された。（一七五四～一七九三）　＊15　ロベスピエール＝フランス革命をおしすすめた代表的政治家。（一七五八～一七九四）

問1　太線部㋐「イツダツ」、㋑「ダキョウ」を漢字に改めよ。

問2　二〇世紀の後半のフランス革命研究の展開を説明したものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　二〇世紀の後半に、フランス革命研究のありかたは、おおきくヘンボウをとげた。典型的なブルジョワ革命というひところの位置づけは、もう通用しなくなっており、以前はさかんだった革命諸勢力の階級分析も、すっかり下火になってきたが、その船頭役となったのはソルボンヌ大学の革命史講座であった。

b　二〇世紀の後半に、フランス革命研究のありかたは、おおきくヘンボウをとげた。典型的なブルジョワ革命というひところの位置づけに対し、ソルボンヌ大学の革命史講座は、ジャコバン史学の総本山という立場から、英米圏の学者たちによる研究成果もとりいれて、革命史研究に画期をもたらした。

c　二〇世紀の後半に、フランス革命研究のありかたは、おおきくヘンボウをとげた。民衆とブルジョワジーのテイケイなどを、偉大な革命像とともに語る従来の革命史観に対し、英米圏の学者たちは、革命期とその前後をひややかにながめる仕事をはやくから世に問い、革命史学の主流からは「修正主義者」として、あなどられた。

d　二〇世紀の後半に、フランス革命研究のありかたは、おおきくヘンボウをとげた。民衆とブルジョワジーのテイケイなどを、偉大な革命像とともに語る従来の革命史観に対し、フランソワ・フュレは、革命史学の主流からは「修正主義者」として、あなどられながらも、英米圏の学者たちによる研究成果もとりいれて、革命史研究に画期をもたらした。

e　二〇世紀の後半に、フランス革命研究のありかたは、おおきくヘンボウをとげた。ジャコバン独裁期の達成を、力説しつづけるソルボンヌの研究者に対し、ジャコバン独裁を革命のイツダツとしてとらえるフランソワ・フュレは、英米圏の学者たちとともに、ソルボンヌ主流との間ではげしいオウシュウを繰り広げた。

問3　二〇世紀の後半以後のフランス革命像について説明したものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　フランス革命史研究に英米圏の研究が新機軸をつたえ、フランス本国でも検討されるという研究の国際化が進んだことにより、フランス革命の革命像は、近代民主主義の基礎をこしらえたと、世界各国でみなされるものになっている。

b　英米圏の研究者によるフランス革命史研究は、英語という言語じたいが普及力を強めたことにより、研究の国際化をおしひろげることになり、フランス革命の革命像は、さまざまな国々の歴史研究者にとって魅力的なものとなっている。

c　フランス革命は、近代民主主義の基礎をこしらえたというテーマの魅力により、研究の国際化がおしひろげられ、典型的なブルジョワ革命という革命像と国際的な関心が、この革命にはむけられている。

d　フランス革命は、研究の国際化が進んだ結果、典型的なブルジョワ革命というかつての革命像が成立しがたくなってきており、このテーマへ情熱をもやす研究者の数は、国際的にもへっている。

e　かつては世界がフランス革命史に興味をもっており、その熱気が、フランス側の目も、世界へむけさせたが、研究の国際化が進んだ一方、典型的なブルジョワ革命という革命像への国際的な関心は衰弱を余儀なくされている。

問4　日本では、フランス革命と明治維新を比較して、従来どのように論じられていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　フランス革命はブルジョワ化していた貴族層による革命であるが、明治維新はフランス革命ほど時代をうごかしてはおらず、台頭してきたブルジョワが封建的な反動勢力に取り込まれることとなった点で、進歩性にかけるものであった。

b　フランス革命はブルジョワ化していた貴族層による革命であるが、明治維新は封建的な体制の中から生まれたブルジョワの台頭も見られたものの、フランス革命にくらべればその勢力は弱く、「不徹底」なブルジョワ革命であった。

c　フランス革命はブルジョワ革命をなしとげたが、明治維新は台頭してきたブルジョワと封建的な反動勢力とがバランスをたもつ絶対王政＝明治政権を出現させることとなった点で、進歩性にかけるものであった。

d　フランス革命はブルジョワ革命をなしとげたが、明治維新を社会革命と見なす明治期の史論家たちによると、フランス革命にくらべれば、革命性の貫徹する度合いは弱く、「不徹底」なブルジョワ革命であった。

e　フランス革命は革命をつうじて諸産業を飛躍的に発達させたが、明治維新はフランス革命ほどの飛躍的な産業の発達は起こせず、進歩性に欠ける「不徹底」なブルジョワ革命であった。

問5　フランスのマルクス主義者のフランス革命のとらえ方と、日本のマルクス主義者の明治維新のとらえ方の違いについて述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　フランスのマルクス主義者はフランス革命を進歩的なものとしてとらえたが、日本のマルクス主義者は明治維新の進歩性をいっさいみとめなかった。

b　フランスのマルクス主義者はフランス革命をブルジョワ革命としてとらえたが、日本のマルクス主義者は明治維新をブルジョワ革命の前段階にたどりついたものとしてとらえた。

c　フランスのマルクス主義者はフランス革命をブルジョワ革命の前段階にたどりついたものとしてとらえたが、日本のマルクス主義者は明治維新をブルジョワと封建勢力のならびたつ絶対王政の成立としてとらえた。

d　フランスのマルクス主義者はフランス革命を諸産業を飛躍的に発達させたとして前向きにうけとめたが、日本のマルクス主義者は明治維新を諸産業の発達をさまたげたとして後ろむきにうけとめた。

e　フランスのマルクス主義者はフランス革命をブルジョワ革命とはみなさなかったが、日本のマルクス主義者は明治維新をブルジョワ革命とみなした。

問6　筆者は、アメリカの日本研究における近代化論は、日本の歴史学ではどのようにとらえられたと述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　日本の近代化を江戸時代以前からはじまっていたとするアメリカの近代化論は、江戸時代に近代へとむかう勢力のめばえを読みとく日本の歴史学では、おりあいのつけづらいものととらえられたと述べている。

b　日本の近代化を停滞的にえがくアメリカの近代化論は、同様に日本の近代化を停滞的にえがきたがってきた日本の歴史学では、好意的にとらえられたと述べている。

c　日本の近代化を前むきにとらえるアメリカの近代化論は、日本の近代化を停滞的にえがきたがってきた日本の歴史学では、うけいれがたいものととらえられたと述べている。

d　日本の近代化を江戸時代からみとめるアメリカの近代化論は、江戸時代を明治の絶対王政が成立する前の封建時代と位置づける日本の歴史学では、学説の修正をせまるものととらえられたと述べている。

e　日本の近代化を明治維新にはじまるとするアメリカの近代化論は、明治時代を絶対王政が成立した前近代社会とみなす日本の歴史学では、まともにはとりあうべきものではないととらえられたと述べている。

問7　二重傍線部あいうえおのカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

あ　ヘンボウ

a　その政治家は常にサクボウを巡らしている。
b　事件のゼンボウはまだ明らかでない。
c　彼は知識をカッボウしている。
d　検視の済んだ遺体をカイボウする。
e　内閣カンボウ長官が記者会見を行う。

い　テイケイ

a　危険物の無断ケイコウは禁止されている。
b　伝統工芸のコウケイ者不足が深刻な問題となっている。
c　新しい事業のために取引先とケイヤクを結ぶ。
d　西洋哲学のケイフをたどる。
e　式典で国旗をケイヨウする。

う　オウシュウ

a　県民は知事のキョシュウに注目している。
b　彼が人格者であることはシュウモクの一致するところだ。
c　古いビルのカイシュウを行う。
d　新しい知識をキュウシュウして成長する。
e　高額なホウシュウを支払う。

え　ケッシュツ

a　彼はケッソウを変えて部屋に飛び込んできた。
b　データのケッソンが原因で正確な分析ができなかった。
c　社員全員がプロジェクト成功のためにケッキした。
d　身のケッバクが明らかになった。
e　この小説は日本文学のケッサクの一つだ。

お　ウンサンムショウ

a　ノウムの中での車の運転は十分に注意が必要だ。
b　世界一周の旅をムソウする。
c　彼の説明には説得力がカイムだった。
d　人手不足の解消がキュウムとなっている。
e　戦国時代の大名は自分のカゲムシャを用意していた。

問8　明治維新史に英米圏の研究が与えた影響について、筆者はどのように述べているか。五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

良岑の宗貞の少将、ものへゆく道に、五条わたりにて、雨いたう降りければ、荒れたる門に立ちかくれて見入るれば、五間ばかりなる檜皮屋のしもに、土屋倉などあれど、ことに人など見えず。歩み入りて見れば、階の間に梅いとをかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうちより、薄色の衣、濃き衣、うへに着て、たけだちいとよきほどなる人の、髪、たけばかりならむと見ゆるが、

よもぎ生ひて荒れたる宿をうぐひすの人来と鳴くやたれとか待たむ

とひとりごつ。少将、

来たれどもいひしなれねばうぐひすの君に告げよと教へてぞ鳴く

と、声をかしうていへば、女おどろきて、人もなしと思ひつるに、物しきさまを見えぬることと思ひて、ものもいはずなりぬ。男、縁にのぼりてゐぬ。「などかものものたまはぬ。雨のわりなくはべりつれば、やむまではかくてなむ」といへば、「大路よりはもりまさりてなむ、ここはなかなか」といらへけり。時は正月十日のほどなりけり。簾のうちよりしとねさしいでたり。ひき寄せてゐぬ。簾も、へりはかほりに食はれて、ところどころなし。うちのしつらひ見入るれば、むかしおぼえて畳などよかりけれど、口惜しくなりにけり。日もやうやう暮れぬれば、やをらすべり入りて、この人を奥にも入れず、女、くやしと思へど、制すべきやうもなくていふかひなし。雨は夜ひと夜降りあかして、またのつとめてぞすこし空晴れたる。男は女の入らむとするを、「ただかくて」とて入れず。日も高うなれば、この女の親、少将にあるじすべき方のなかりければ、小舎人童ばかりとどめたりけるに、かたい塩、肴にして、酒をのませて、少将には広き庭に生ひたる菜をつみて、蒸し物といふ物にして、ちやうわんにもりて、はしには梅の花のさかりなるを折りて、その花びらに、いとをかしげなる女の手にて、かく書けり。

君がため衣のすそをぬらしつつ春の野にいでてつめる若菜ぞ

男、これを見るに、いとあはれにおぼえてひき寄せて食ふ。女、わりなうはづかしと思ひてふしたり。少将起きて、小舎人童を走らせて、すなはち、車にてまめなる物、さまざまにもて来たり。Ⓐ迎へに人あれば、今またもまゐり来む」とていでぬ。それよりのち、たえずみづからも来とぶらひけり。よろづの物食へども、なほ五条にてありし物は、めづらしうめでたかりきと思ひでける。年月を経て、仕うまつりし君に、少将おくれたてまつりて、かはらむ世を見じと思ひて、法師になりにけり。もとの人のもとに、袈裟あらひにやると、

霜雪のふる屋のもとにひとり寝のうつぶしぞめのあさのけさなり

となむありける。

（『大和物語』による）

注　＊1　良岑の宗貞の少将＝のちの僧正遍昭。　＊2　五間＝間は建物の柱と柱のあいだのこと。ここでは建物の大きさをいう。　＊3　檜皮屋＝檜の皮で屋根をふいた家。　＊4　土屋倉＝土蔵。　＊5　かはほり＝こうもり。　＊6　小舎人童＝少将が召し連れる少年。　＊7　かたい塩＝堅塩。堅くて粗い塩。　＊8　蒸し物＝生野菜などを蒸したもの。　＊9　ちやうわん＝長椀。大きな器。　＊10　うつぶしぞめ＝染色の一つ。ヌルデの木から取った五倍子によって薄墨色に染めること。

問1　少将はあるところへ行く途中、どのようなものを見たか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　少将は、あるところへ行く途中、五条を過ぎたところで、雨がひどく降ってきたので、荒れ果てた門の所に身を寄せてそっと中の様子を見ると、五間くらいの檜皮屋の裏に、土蔵などがあるが、働いている人なども見えなかった。入ってみると、階段のあたりに梅がたいそうきれいに咲いていて、鶯も鳴いていた。

b　少将は、あるところへ行く途中、五条あたりで、雨がひどく降ってきたので、荒れ果てた門の所に身を寄せてそっと中の様子を見ると、五間くらいの檜皮屋の裏に、土蔵などがあるが、べつに人なども見えなかった。入ってみると、階段のあたりに梅がたいそうきれいに咲いていて、鶯も鳴いていた。

c　少将は、あるところへ行く途中、五条あたりで、雨がいっそう強く降ってきたので、荒れ果てた門の所に身を寄せてそっと中の様子を見ると、五間くらいの檜皮屋の裏に、土蔵などがあるが、働いている人なども見えなかった。入ってみると、階段のあたりに梅がたいそうきれいに咲いていて、鶯も鳴いていた。

d　少将は、あるところへ行く途中、五条を過ぎたところで、雨がいっそう強く降ってきたので、荒れ果てた門から姿が見えないようにそっと中の様子を見ると、五間くらいの檜皮屋の裏に、土蔵などがあるが、べつに人なども見えなかった。入ってみると、階段のあたりに梅がたいそうきれいに咲いていて、鶯も鳴いていた。

e　少将は、あるところへ行く途中、五条を過ぎたところで、雨がひどく降ってきたので、荒れ果てた門から姿が見えないようにそっと中の様子を見ると、五間くらいの檜皮屋の裏に、土蔵などがあるが、べつに人なども見えなかった。入ってみると、階段のあたりに梅がたいそうきれいに咲いていて、鶯も鳴いていた。

問2　少将は、家の中からどのような声を聞いたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　人がいるとも思われない御簾の中から、薄紫色の衣を濃い紅色の衣の上に着て、背丈がたいそう好ましく、髪の長さが着物の丈ほどであろうと思われる女が、「よもぎが生えて荒れている宿であるのに、鶯が「誰か来る」と鳴いていますよ。誰と待ったらよいのでしょうか」と一人でつぶやいている。

b　人がいるとも思われない御簾の中から、薄紫色の衣を濃い紅色の衣の上に着て、背丈がたいそう好ましく、髪の長さが着物の丈ほどであろうと思われる女が、「よもぎが生えて荒れている宿であるのに、鶯が「誰か来い」と鳴いていますよ。誰が来ると思って待ったらよいのでしょうか」と一人でつぶやいている。

c　人がいるとも思われない御簾の中から、薄紫色の衣を濃い紅色の衣の上に着て、背丈がたいそう好ましく、髪の長さが背丈ほどであろうと思われる女が、「よもぎが生えて荒れている宿であるのに、鶯が「誰か来る」と鳴いていますよ。誰が来ると思って待ったらよいのでしょうか」と一人でつぶやいている。

d　人がいるとも思われない御簾の中から、薄紫色の衣を濃い紅色の衣の上に着て、背丈が少し高く、髪の長さが背丈ほどであろうと思われる女が、「よもぎが生えて荒れている宿であるのに、鶯が「誰かが来る」と鳴いていますよ。誰が来ると思って待ったらよいのでしょうか」と一人でつぶやいている。

e　人がいるとも思われない御簾の中から、薄紫色の衣を濃い紅色の衣の上に着て、背丈が少し高く、髪の長さが背丈ほどであろうと思われる女が、「よもぎが生えて荒れている宿であるのに、鶯が「誰か来い」と鳴いていますよ。誰が来るのか待ちましょう」と一人でつぶやいている。

問3　女の歌に対して少将はどのように反応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　少将は「私はここに来ていますけれども、女の人に思いを伝えることに慣れていませんので、鶯が、「姫君にあなたが来ていることを告げなさい」と、私に教えて鳴いているのです」と歌を贈った。

b　少将は「私はここに来ていますけれども、女の人に思いを伝えることに慣れていませんので、私が、「鶯のように美しいあなたに、私が来ていることを告げなさい」と、鶯に教えて鳴かせているのです」と歌を贈った。

c　少将は「もし私がここに来ていなくても、他の人があなたに思いを伝えるようになるでしょうから、鶯が、「姫君にあなたが来ていることを告げなさい」と、私に教えて鳴いているのです」と歌を贈った。

d　少将は「私はここに来ていますけれども、女の人に思いを伝えることに慣れてしまったので、私が、「鶯のように美しいあなたに、私が来ていることを告げなさい」と、鶯に教えて鳴かせているのです」と歌を贈った。

e　少将は「私はここに来ていますけれども、女の人に思いを伝えることに慣れてしまったので、私が、「私が来ていることをあなたに告げなさい」と、鶯に教えて鳴かせているのです」と歌を贈った。

問4　少将が歌を贈った後の二人の様子はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　女は少将に気づいて、「誰もいないと思っていたのに、仰々しい様子のお方がお見えになったことだ」と思って、何も言わなくなってしまった。少将は縁側にあがって座り、「どうして何もおっしゃらないのですか。雨が降って困っておりますので、やむまではこうしていましょう」と言った。

b　女は少将に気づいて、「誰もいないと思っていたのに、仰々しい様子のお方がお見えになったことだ」と思って、何も言わなくなってしまった。少将は縁側にあがって座り、「どうして何もおっしゃらないのですか。雨がどうしようもなく降っておりますので、やむまでに手紙を書いていただきたいものです」と言った。

c　女は少将に気づいて、「誰もいないと思ってしまったために、見苦しい様子を見られてしまったことだ」と思って、何も言わなくなってしまった。少将は縁側にあがって座り、「どうして何もおっしゃらないのですか。雨が降って困っておりますし、やむまでに手紙を書いていただきたいものです」と言った。

d　女はびっくりして、「誰もいないと思ってしまったために、見苦しい様子を見られてしまったことだ」と思って、何も言わなくなってしまった。少将は縁側にあがって座り、「どうして何もおっしゃらないのですか。雨がどうしようもなく降っておりますので、やむまでに手紙を書いていただきたいものです」と言った。

e　女はびっくりして、「誰もいないと思っていたのに、見苦しい様子を見られてしまったことだ」と思って、何も言わなくなってしまった。少将は縁側にあがって座り、「どうして何もおっしゃらないのですか。雨がどうしようもなく降っておりますので、やむまではこうしていましょう」と言った。

問5　女の家の中をのぞいた少将の様子はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　少将が家の中をのぞいてみると、昔の様子そのままで、畳などは立派だったのが、今は残念な様子になっている。日もあっという間に暮れたので、少将は音も立てずそっと御簾の中に入って、女を奥の間にも入れない。

b　少将が家の中をのぞいてみると、昔の様子そのままで、畳などは立派だったのが、今は残念な様子になっている。日もだんだん暮れてきたので、少将は素早く御簾の中に入って、女を奥の間にも入れない。

c　少将が家の中をのぞいてみると、昔の様子がしのばれて、畳などが立派でなくなったことを、女は残念に思っているようである。日もだんだん暮れてきたので、少将は音も立てずそっと御簾の中に入って、女を奥の間にも入れない。

d　少将が家の中をのぞいてみると、昔の様子がしのばれて、畳などが立派でなくなったことを、女は残念に思っているようである。日もあっという間に暮れたので、少将は素早く御簾の中に入って、女を奥の間にも入れない。

e　少将が家の中をのぞいてみると、昔の様子がしのばれて、畳などは立派だったのが、今は残念な様子になっている。日もだんだん暮れてきたので、少将は音も立てずそっと御簾の中に入って、女を奥の間にも入れない。

問6　女の家では、少将一行をどのようにもてなしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　女の親は少将にごちそうをすることができなかったので、女の家のほうでは小舎人童を呼んで、その子に堅塩を肴にして酒を飲ませ、少将には広い庭に生えている菜を摘んで蒸し物にして、長椀に盛り、箸には梅の花盛りになっている枝を折った。その花びらにはたいそう美しい女の筆跡で、歌が書いてあった。

b　女の親は少将にごちそうをすることができなかったので、少将は小舎人童だけ残していたが、女の家のほうではその子に堅塩を肴にして酒を飲ませ、少将には広い庭に生えている菜を摘んで蒸し物にして、長椀に盛り、箸には梅の花盛りになっている枝を折った。その花びらにはたいそう奇妙な女の趣向で、歌が書いてあった。

c　女の親は少将にごちそうをすることができなかったので、少将は小舎人童だけ残していたが、女の家のほうではその子に堅塩を肴にして酒を飲ませ、少将には広い庭に生えている菜を摘んで蒸し物にして、長椀に盛り、箸には梅の花盛りになっている枝を折った。その花びらにはたいそう美しい女の筆跡で、歌が書いてあった。

d　女の親は少将に取り入ることができなかったので、女の家のほうでは小舎人童を呼んで、その子に堅塩を肴にして酒を飲ませ、少将には広い庭に生えている菜を摘んで蒸し物にして、長椀に盛り、箸には梅の花盛りになっている枝を折った。その花びらにはたいそう美しい女の筆跡で、歌が書いてあった。

e　女の親は少将に取り入ることができなかったので、少将は小舎人童だけ残していたが、女の家のほうではその子に堅塩を肴にして酒を飲ませ、少将には広い庭に生えている菜を摘んで蒸し物にして、長椀に盛り、箸には梅の花盛りになっている枝を折った。その花びらにたいそう奇妙な女の趣向で、歌が書いてあった。

問7　女が歌を贈ったとき、少将はどのように反応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　女の歌には「あなたが来てくださったから、衣の裾をぬらしながらも、春の野に出て摘むことができた若菜ですよ」とあった。少将はこれを見ると、本当にわびしく気乗りしないように思いながら、蒸し物を食べた。少将は、小舎人童を走らせて、すぐに車で、出家のために必要なものをさまざまに持って来させた。

b　女の歌には「あなたをおもてなしするため、衣の裾をぬらしながらも、春の野に出て摘んだ若菜ですよ」とあった。少将はこれを見ると、本当にわびしく気乗りしないように思いながら、蒸し物を食べた。少将は、小舎人童を走らせて、数日後に車で、生活に直接必要なものをさまざまに持って来させた。

c　女の歌には「あなたが来てくださったから、衣の裾をぬらしながらも、春の野に出て摘むことができた若菜ですよ」とあった。少将はこれを見ると、本当にしみじみとかわいそうに思われて、蒸し物を食べた。少将は、小舎人童を走らせて、すぐに車で、出家のために必要なものをさまざまに持って来させた。

d　女の歌には「あなたをおもてなしするため、衣の裾をぬらしながらも、春の野に出て摘んだ若菜ですよ」とあった。少将はこれを見ると、本当にしみじみとかわいそうに思われて、蒸し物を食べた。少将は、小舎人童を走らせて、すぐに車で、生活に直接必要なものをさまざまに持って来させた。

e　女の歌には「あなたが来てくださったから、衣の裾をぬらしながらも、春の野に出て摘むことができた若菜ですよ」とあった。少将はこれを見ると、本当にしみじみとかわいそうに思われて、蒸し物を食べた。少将は、小舎人童を走らせて、数日後に車で、生活に直接必要なものをさまざまに持って来させた。

問8　年月が経って、少将の様子はどのようだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　少将はお仕えしていた帝（みかど）に先立たれ、変わっていくであろう世を見たくないと思って、法師になってしまった。少将は、もとの女のところに、袈裟を洗いに行かせるときに、「霜や雪の降る古いあばら屋に、ひとり寝をして修行している私の薄墨色の麻の袈裟です――ひとりではじめて寝た次の朝です」という歌を贈った。

b　少将はお仕えしていた帝に反発して、変わっていくであろう世を見たくないと思って、法師になってしまった。少将は、もとの女のところに、袈裟を洗いに行かせるときに、「霜や雪の降る古いあばら屋に、ひとり寝をして修行している私の薄墨色の麻の袈裟です――修行の生活も長くなりました」という歌を贈った。

c　少将はお仕えしていた帝に先立たれ、変わっていくであろう世を見たくないと思って、法師になってしまった。少将は、もとの女のところに、袈裟を洗いに行かせるときに、「霜や雪の降る古いあばら屋に、ひとり寝をして修行している私の薄墨色の麻の袈裟です――今朝は修行を休んでいます」という歌を贈った。

d　少将はお仕えしていた帝に反発して、変わらない世を見たくないと思って、法師になってしまった。少将は、もとの女のところに、袈裟を洗いに行かせるときに、「霜や雪の降る古いあばら屋に、ひとり寝をして修行している私の薄墨色の麻の袈裟です――修行の生活も長くなりました」という歌を贈った。

e　少将はお仕えしていた帝に先立たれ、変わらない世を見たくないと思って、法師になってしまった。少将は、もとの女のところに、袈裟を洗いに行かせるときに、「霜や雪の降る古いあばら屋に、ひとり寝をして修行している私の薄墨色の麻の袈裟です――ひとりではじめて寝た次の朝です」という歌を贈った。

問9　傍線部Ⓐについて、現代語訳せよ。

（以上）

2026年度入学試験問題

国　語

注　意　事　項

Ⅰ　試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。

Ⅱ　解答用紙はすべて黒鉛筆（HB）〈シャープペンシルは，HB 0.5 mm以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）

Ⅲ　解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し，切取線から切り離してください。

Ⅳ　試験時間は75分です。

Ⅴ　問題は24ページで大問2問です。

マーク記入上の注意

1．解答欄にマークするときは，HBの黒鉛筆で次の正しい例のように，濃く正確にぬりつぶしてください。

2．マークのしかた

(ア)　正しい例

a　解答が1つの場合，例えばイと解答するときは

(1) ⓐ ● ⓒ ⓓ ⓔ

のように，マークしてください。

b　解答が2つの場合，例えばイとウと解答するときは

(1) ⓐ ● ⓒ ⓓ ⓔ
(1) ⓐ ⓐ ● ⓓ ⓔ

または

(1) ⓐ ⓐ ● ⓓ ⓔ
(1) ⓐ ● ⓒ ⓓ ⓔ

のように各1つずつマークしてください。

(イ)　悪い例

(1) ⓐ ◯ ⓒ ⓓ ⓔ　◯印でかこむ。
(2) ⓐ ◔ ⓒ ⓓ ⓔ　全部をぬりつぶしていない。
(3) ⓐ ✓ ⓒ ⓓ ⓔ　レ印をつける。
(4) ⓐ ｜ ⓒ ⓓ ⓔ　｜印をつける。
(5) ⓐ ● ● ⓓ ⓔ　1欄に2つ以上マークする。

このような記入をしてはいけません。

3．一度記入したマークを訂正する場合は，消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。

(1) ⓐ ● ■ ⓓ ⓔ

のように×印をしても消したことにはなりません。

4．解答用紙を折り曲げたり，破ったり，また汚したりしないでください。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「ちくちくことば」「ふわふわことば」とはなにか

ここ数年、「ちくちくことば」と「ふわふわことば」というフレーズを含んだ児童向け書籍が少なくない数出版されている。「ちくちくことば」とは、針でちくちくと刺すような、人の心を傷つける表現で、「ふわふわことば」とは、綿のようにふわふわで、人の心があたたかくなる表現とされる。

たとえば、ケンバン(あ)ハーモニカをうまく吹けないクラスメートに対して、「あーあ、またまちがった！」『なんでできないの？』と、なじるようなことを言うのが「ちくちくことば」で、「よくがんばったね』『ゆっくり、いっしょにやってみようか」と、励ますようなことを言うのが「ふわふわことば」である。

これらの用語は、少なくとも、二〇〇〇年代半ばごろから、教育の現場において「グサグサことば』『あったかことば」といった類似の語句とともに広く使われ出したようである。

厳密な調査ではないが、二〇〇五年までの日本語文書を一億語以上収録した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』[*1]を調べてみると、確かにそのような表現は出現しないが、新聞社のデータベースをいくつか見ると、二〇〇六年や二〇〇七年ごろから「ちくちく言葉」や「あったか言葉」を含む記事が登場しはじめる。

二〇〇〇年代における小学校での取り組みを取材した佐藤拓『あったか言葉とチクチク言葉』によると、こうした用語は、生活指導や学級活動の一環として、子どもたちに自発的に自分の言語使用についての反省をうながす指導の中で使われていた。どのような手順でその指導が行われるかをまとめると、おおよそ次のようになる。

まず、「ちくちくことば』『あったかことば」といった表現が、「言われたら嫌な気持ちになる」といった感覚的観点から導入される（感覚についての論点は後ほどとりあげる）。そして、子どもたちは「ちくちくことば」の具体例を特定し、書き出したり共有したりするようながされる。そして、そうした表現は使用しないでおこう、という取り決めがなされる。ときには、実際に「ちくちくことば」を書き出した紙を封筒に入れ「封印する」といった儀式的行為も行われるようである（他にも、「ちくちくことば」を教室の壁に掲示するものの、紙を折りたたんで文字が見えないようにするといった「封印」がなされるそうだ）。

子どもたちは、単に「ちくちくことば」を「封印」するだけでなく、それと入れ替えるための「ふわふわことば」も特定するようにうながされる。クラスメートを「あったかい気持ち」にさせるような前向きな表現群のことであり、「ありがとう」『すごいね」などがその代表である。そうして特定された「ふわふわことば」や「にっこりことば」は大きく標語のように掲示される。

また、このような指導法が徐々に広まり、いくつかの道徳の教科書や副読本にも収録されるようになった。特に、小学校低学年向けの教材として使われているようである。また、教科書ではなく、広く一般書店で販売されている齋藤孝（監修）・川原瑞丸（絵）『ことばえらびえほん　ふわふわとちくちく』は、「四歳から」読める「ことばをえらぶチカラが身につくえほん」として、より低年齢層に向けて出版されている。

いじめ対策としての「ちくちくことば」制限

このような「ちくちくことば」と「ふわふわことば」の広がりや、先述の学級活動に居心地の悪さを感じる読者も多いかもしれない。現在の子どもたちは、ボール遊びが許される公園が少なくなってきているように、遊ぶ場所や遊び方すら制限され、縮小した可能性の中で暮らしている。それに輪をかけて、子どものことばづかいすら先回りして制限しようという試みに、反発を覚えるかもしれない。

ここには、[*2]マイクロアグレッション、教育の理想と実践、[*3]パターナリズム、表現の自主規制といった多数の検討に値する問題が重なり合っている。当然ながら、本稿でそれらをすべて解きほぐし考察することはできない。

本稿で(い)ショウテンを当てるのは、「ちくちくことば」と「ふわふわことば」、そして類似の用語そのものである。これらは「ちく

ちく』『ふわふわ』といったオノマトペ（擬態語・擬音語）を用いて、言語表現について語っている、言語にまつわる用語である（「メタ言語的語句」と呼んでもよい）。以下では、こうした用語の使用にまつわる二つの課題を指摘する。

その前に、「ちくちくことば」や「ふわふわことば」を導入する実践が、単なるおためごかし[*4]とは限らない、つまり、大人に迷惑をかけさせないように、子どもの行動範囲をとりあえず縛り上げておこう、といった短絡的な発想にもとづいているとは限らないことを述べておきたい。

興味深いことに、ここ数年で出版されているより低年齢向けの書籍では、「ちくちくことば」として示される事例そのものがかなりコントロールされており、比較的無害なものが選択されている。冒頭にあげたような、「なんでできないの」や、「じゃま」「うるさい」『ちゃんとやって』といった発言が、「ちくちくことば」としてあげられている。しかし、佐藤拓『あったか言葉とチクチク言葉』などを見ると、「ちくちくことば」としてかなり有毒性の高い表現が想定されている。こうした表現は深刻ないじめの現場で⑦ヒンパンに使用されるものであり、いじめ問題への対応策の一部として、「ちくちくことば」の取り締まりが行われてきたのである。

言語使用の悪質性は、話し手・聞き手の関係性を含む社会的要因にもとづいて文脈的に決定され、その使用すべてが悪質あるいは不適切となるような語句は存在しない。

しかしながら、生後四八ヶ月から九六ヶ月程度の子どもに、権力③コウバイや有徳さを示す範囲での怒りの妥当性といった、社会的要因を考慮させるのは不可能である。そのため、パターナリスティックに「とりあえず」、これら有毒性の高い表現の公共の場での使用を推奨しない、という選択は擁護可能である。公共の場面での使用が減ることにより、それがもたらす危害が減ると見込まれるからである。

可能な反論としては、「ちくちくことば」の取り締まりは、いじめ対策としてまったく効果がないと示すことや、「ちくちくことば」の使用を積極的に推奨すべきだと論証することなどが考えられるが、どちらもそれほど簡単ではないだろう。

触覚的オノマトペの有用さとその限界

「ちくちくことば」や「ふわふわことば」は、触覚的オノマトペをともなう疑似専門用語的なラベルである。手触りを表す他の擬態語オノマトペとして、「かちかちの氷」、「ざらざらの紙」、「つるつるの床」といった例があげられる。物体を触ったときの感覚を表した語彙だが、より抽象的な事物を修飾する際にも用いられる。たとえば、「かちかちの考え」などで、④ガンコさや⑤ユウズウが利かないことを表すことができる。

「ぶうぶう」や「わんわん」といった例から明らかなように、オノマトペは子どもの言語習得や概念獲得において非常に大きな役割を果たす。赤ん坊に向かって、自動車を指差しながら「ぶうぶうだよ」と言わず、「内燃機関ないし電動モーターを㉓クドウ源とする個人輸送および貨物輸送のための車両だよ」と繰り返すことを想像してもらいたい。

「ちくちくことば」として想定される有毒表現について、なぜそれらの使用の多くが人権侵害となるのか、なぜ何らかの意味での「尊厳」を損なうものであるのかといった点を順を追って説明することは可能である。

しかしながら、子どもたちを対象に、そのような抽象的議論を展開することは現実的ではない。そのため「とりあえず」触覚的オノマトペを使用して、おおまかに「使用が推奨されない語句」というメタ言語的概念を導入しているのである。そもそも、一定の範囲の言語表現を外延[*5]とするそうしたメタ言語的概念は、子どもにそれほどなじみのあるものではなく、触覚的メタファー[*6]を経由してはじめて獲得が可能になるかもしれない。

以上の議論が示すのは、「ちくちくことば」や「ふわふわことば」は有用であるが、あくまで暫定的な腰掛け、抽象的人権概念や尊厳概念を獲得するまでのつなぎに他ならないということである。会話参加者が偶然的に持つ快・不快といった感覚やその欠如が表現使用の悪質さを決定しない以上（例：差別主義者同士がマイノリティを標的とした差別的語彙を嬉々として使用している文脈には、快楽しか存在しないが、それらの使用は一定程度悪質であると言える）、触覚的メタファーはメタファーに過ぎない。ことばが「ちくちく」する／しない、「ふわふわ」する／しないは、あくまで副次的な要素である。

大人は、子どもが用いる触覚的直観に依拠せず、何らかの抽象的理念や基準を利用し、それを満たしている／ないから、適切である／ない、悪質である／ない、許容される／ない、といった判断を下すべきである。子どもも、子どもをやめ大人になる過程において、そのような抽象概念を獲得しなければならないのである。「ちくちくことば」も「ふわふわことば」も、いずれ投げ捨てられる梯子（はしご）でしかない。

言語を表すメタファーとしての問題

「ちくちくことば」『ふわふわことば』にまつわるもうひとつの重要な問題は、触覚的メタファーは、言語は手にとって扱う類の道具である、という常識的発想と相性が良い点である。

言語をねじ回しやナイフのような、個人が手で扱う道具になぞらえるのは、ミスリーディングである。個人の裁量により、ねじ回しを孫の手として使うことは可能だが、個人の裁量で、謙譲語を尊敬語として使うことはできない。使い手の意図とは無関係に、謙譲語の使用は謙譲語として解釈されるのである。言語を道具にたとえるならば、集団で管理・使用する地下鉄や上下水道といった、インフラとしての道具にたとえられなければならない。

「ちくちくことば」も「ふわふわことば」も、ことばが、手にとって確かめられる、質感を持った中くらいの大きさのモノとするメタファーである。実際、先述の児童書においては、子どもの頭の大きさほどの吹き出しや、擬人化された「ちくちく」や「ふわふわ」のキャラクターが、言語表現を表すイラストとなっている（さらに、典型的な音象徴を利用し、「ちくちくことば」の吹き出しとは鋭角や直線で構成され、「ふわふわことば」の吹き出しとは雲のような曲線で構成される）。

言語は、内在的な原理として理解されたとしても、外在化された発話などの総体として理解されたとしても、いずれにせよ、質感を持った中くらいの大きさのモノではない。

SNSなどにおける有毒な表現使用は、水質汚染といった、インフラ上の問題として理解され、集団的に対策が講じられるべきであり、手持ちの道具の使い方次第（「包丁を悪用する人が悪い」）、といった個人の問題に矮小（わいしょう）化されるべきではない。しかし、言語を手持ちの道具とする発想が通念である限り、集団的取り組みがおろそかになる可能性がある。

やはり、「ちくちくことば」『ふわふわことば』そしてそれに類するオノマトペを用いた知覚的メタファーは、いつか乗り越えられるべき踏み台に過ぎないのである。

（和泉悠「ちくちくことば」「ふわふわことば」を超えて　触覚的メタファーの功罪」による　※一部本文を改めた箇所がある）

注　＊1　コーパス＝言語研究のためにコンピューターを利用してデータベース化された大規模な言語資料。　＊2　マイクロアグレッション＝あからさまな差別とはみなされず多くは無自覚だが、日常生活の中で偏見や先入観に基づくちょっとした侮蔑やからかいといった形で表れ、受け手を傷つける言動や行為。　＊3　パターナリズム＝父親的温情主義。強い立場の者が、弱い立場の者のためになるよう、本人の意志に反して介入したり干渉すること。　＊4　おためごかし＝表面は人のためにするように見せかけて、実は自分の利益を図ること。　＊5　外延＝一つの概念が適用される事物の範囲。　＊6　メタファー＝ある名辞の元の概念から、よく似てはいるが別の概念に変えて、その名辞を使う比喩的表現。隠喩。

問1　太線部㋐「ヒンパン」、㋑「ガンコ」を漢字に改めよ。

問2　「ちくちくことば」と「ふわふわことば」についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「ちくちくことば」とは、針でちくちくと刺すような、人の心を傷つける表現で、「ふわふわことば」とは、綿のようにふわふわで、人の心があたたかくなる表現とされ、ここ数年、これらのフレーズを解説する書籍が少なくない数出版されている。

b　ケンバンハーモニカをうまく吹けないクラスメートに対して、「なんでできないの?」となじるようなことを言うのが「ちくちくことば」で、うまく吹けるようになったクラスメートに対して、「よくがんばったね」と励ますようなことを言うのが「ふわふわことば」である。

c　「あーあ、またまちがった!」「なんでできないの?」と、なじるようなことを言うのが「ちくちくことば」で、「よくがんばったね」「ゆっくり、いっしょにやってみようか」と、励ますようなことを言うのが「ふわふわことば」であり、ここ数年、こうした「ちくちくことば」と「ふわふわことば」というフレーズを含んだ児童向け書籍が少なくない数出版されている。

d　「ちくちくことば」と「ふわふわことば」は、児童向け書籍においては、少なくとも、二〇〇〇年代半ばごろから一般に使用されはじめ、その後、教育の現場において「グサグサことば」「あったかことば」といった類似の語句とともに広く使われ出したことばである。

e　「ちくちくことば」と「ふわふわことば」は、二〇〇五年までの日本語文書を一億語以上収録した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』には出現しないが、新聞社のデータベースをいくつか見ると、二〇〇五年以前にこれらを含む記事が登場しはじめる。

問3　教育の現場における「ちくちくことば」や「ふわふわことば」といった用語の運用について説明したものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「ちくちくことば」は「言われたら嫌な気持ちになる」といった感覚的観点から導入されるのに対し、クラスメートを「あったかい気持ち」にさせるような前向きな表現群である「ふわふわことば」は「ありがとう」「すごいね」などの具体例をあげて導入される。

b　「ちくちくことば」は「言われたら嫌な気持ちになる」、「ふわふわことば」はクラスメートを「あったかい気持ち」にさせるといった感覚的観点から導入され、子どもたちはそれぞれの具体例を特定し、それらを書き出した紙を封筒に入れ「封印する」といった儀式的行為が行われる。

c　「ちくちくことば」は「言われたら嫌な気持ちになる」、「ふわふわことば」はクラスメートを「あったかい気持ち」にさせるといった感覚的観点から導入され、子どもたちはそれぞれの具体例を特定し、そうして特定された「ちくちくことば」や「ふわふわことば」は大きく標語のように掲示される。

d　「ちくちくことば」は「言われたら嫌な気持ちになる」ことばであり、子どもたちはその具体例を特定し、そうした表現は使用しないでおこう、という取り決めがなされるのに対し、「ふわふわことば」はクラスメートを「あったかい気持ち」にさせるような前向きな表現群のことであり、特定された「ふわふわことば」は大きく標語のように掲示される。

e　「ちくちくことば」は「言われたら嫌な気持ちになる」ことばであり、子どもたちはその具体例を特定し、それらを書き出した紙を封筒に入れ共有するようながされるのに対し、「ふわふわことば」はクラスメートを「あったかい気持ち」にさせるような前向きな表現群のことであり、特定された「ふわふわことば」は大きく標語のように掲示される。

問4　「ちくちくことば」の取り締まりについて、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　低年齢向けの書籍では、「なんでできないの」や「じゃま」「うるさい」「ちゃんとやって」のようなかなり有毒性の高い表現が「ちくちくことば」としてあげられており、こうした表現はいじめ問題への対応策の一部として、取り締まりが行われてきたと述べている。

b　「ちくちくことば」の具体例としてあげられるもののなかには、かなり有毒性の高い表現もあるが、こうした表現は深刻ないじめの現場でヒンパンに使用されるものであり、いじめ問題への対応策の一部として、「ちくちくことば」の取り締まりが行われてきたと述べている。

c　言語使用の悪質性は、話し手・聞き手の関係性を含む社会的要因にもとづいて文脈的に決定され、その使用すべてが悪質あるいは不適切となるような語句は存在しないため、教育現場で「ちくちくことば」の取り締まりが行われてきたことは行き過ぎた対応であると述べている。

d　生後四八ヶ月から九六ヶ月程度の子どもに、権力コウバイや有徳さを示す範囲での怒りの妥当性といった、社会的要因を考慮させるのは不可能であるため、子どもたち自身に「ちくちくことば」の取り締まりを行わせることは簡単ではないと述べている。

e　「ちくちくことば」の取り締まりは、いじめ対策としてまったく効果がないと示すことや、「ちくちくことば」の使用を積極的に推奨すべきだと論証することが簡単ではないため、パターナリスティックに「とりあえず」、これら有毒性の高い表現の公共の場での使用を推奨しない、という選択は擁護可能であると述べている。

問5　触覚的オノマトペの有用さについて、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」は、触覚的オノマトペをともなう疑似専門用語的なラベルであるが、こうした触覚的オノマトペはより抽象的な事物を修飾する際にも用いられることから、触覚的オノマトペを使用することは、おおまかに「使用が推奨されない語句」というメタ言語的概念を導入するのに有用であると述べている。

b　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」は、触覚的オノマトペをともなう疑似専門用語的なラベルであるが、オノマトペは子どもの言語習得や概念獲得において非常に大きな役割を果たすことから、触覚的オノマトペを使用することは、おおまかに「使用が推奨されない語句」というメタ言語的概念を導入するのに有用であると述べている。

c　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」は、触覚的オノマトペをともなう疑似専門用語的なラベルであるが、有毒表現について、なぜそれらの使用の多くが人権侵害となるのか、なぜ何らかの意味での「尊厳」を損なうものであるのかといった点を順を追って説明する用語として有用であると述べている。

d　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」は、触覚的オノマトペをともなう疑似専門用語的なラベルであるが、子どもたちを対象に、そのような疑似専門用語を用いた抽象的議論を展開することは現実的ではないため、触覚的オノマトペを使用することは、具体的議論を展開する場合には有用であると述べている。

e　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」は、触覚的オノマトペをともなう疑似専門用語的なラベルであるが、一定の範囲の言語表現を外延とするそうしたメタ言語的概念は触覚的メタファーを経由してはじめて獲得が可能になることから、子どもに対して触覚的オノマトペを使用することは、メタ言語的概念を導入するのに有用であると述べている。

問6　触覚的オノマトペの限界について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」のような触覚的オノマトペをともなう用語は子どもにとっては有用であるが、大人にとってはあくまで暫定的な腰掛け、抽象的人権概念や尊厳概念を獲得するまでのつなぎに他ならないと述べている。

b　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」のような触覚的オノマトペをともなう用語は子どもにとっては有用であるが、会話参加者が偶然的に持つ快・不快といった感覚やその欠如が表現使用の悪質さを決定することはないと述べている。

c　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」のような触覚的オノマトペによるメタファーはメタファーに過ぎず、ことばが「ちくちく」する／しない、「ふわふわ」する／しないは、子どもにのみ感じ取られるものであると述べている。

d　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」のような触覚的オノマトペによるメタファーはメタファーに過ぎず、子どもそうした触覚的直観に依拠せず、何らかの抽象的理念や基準を利用した判断を下すべきであると述べている。

e　「ちくちくことば」や「ふわふわことば」のような触覚的オノマトペによるメタファーはメタファーに過ぎず、大人は、何らかの抽象的理念や基準を利用し、判断を下すべきであると述べている。

問7　二重傍線部(あ)(い)(う)(え)(お)のカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

(あ)　ケンバン

a　鍋料理は冬のテイバンメニューだ。
b　あの映画は公開前からヒョウバンが高い。
c　視覚障害のあるランナーのバンソウを務める。
d　古いカンバンが台風で倒れてしまった。
e　試合のジョバンでリードを奪った。

(い)　ショウテン

a　計画の遅延に対するショウソウが募る。
b　優勝にショウジュンを合わせて練習する。
c　文書の転載をショウダクする。
d　この施設では一般ごみをショウキャク処理している。
e　不必要な情報をシャショウして伝える。

(う)　コウバイ

a　業績不振の責任を問われて部長から課長にコウカクされた。
b　契約条件についてのコウショウを開始する。
c　この道路はタイコウ車とすれ違うには少し狭い。
d　証拠隠滅の恐れがあるため被疑者をコウリュウする。
e　年末調整で生命保険料のコウジョ申請を行う。

(え)　ユウズウ

a　キンユウ政策を見直して景気回復をはかる。
b　この飲料はカフェインをガンユウしていない。
c　長年勤めた社員は特別にユウグウされる。
d　ユウダイな自然に囲まれて育つ。
e　地方自治体が新しい企業のユウチを行う。

(お)　クドウ

a　新しい機材を買うために資金をクメンする。
b　驚きの事実を知ってゼックした。
c　パソコンをクシして資料をまとめる。
d　このクイキは関係者以外立ち入り禁止だ。
e　落ち着いたクチョウで説明する。

問8　「ちくちくことば」「ふわふわことば」という触覚的メタファーが、言語を手にとって扱う類の道具とする発想と相性が良い点の何が問題だと筆者は述べているか。五十字以内で記せ。なお、句読点・符号も字数に含めるものとする。

二　次の文章は、『今物語』の一節である。出家した二人の女の話が語られている。これを読んで、後の問いに答えよ。

＊1松殿の思はせ給ひける女房、かれがれになり給ひて後、はかなき御情けだにもまれなりければ、我ながらあらぬかとのみたどりわび、人の心の花にまかせて、月日をむなしくうつりゆくに、＊2宮の鶯、百囀りすれども、思ひあれば、聞く事をやめつ。うつばりのつばくらめ、ならび住めども、身を知れば、ねたまず。遅々たる春の日も、ひとり住めば、いとど暮れやらず。蕭々たる秋の夜は、むなしき床に、明かしがたくて過ぐしけるに、事のよすがやありけん、迎へに御車を遣はされたりける。夢うつつともわきかね、つらしうれしとも思ひ定めず。さればとて、今更、待ち喜び顔ならんもいたうつれなく、身ながらも、なかなかうとましかりぬべければ、「これにこそ、日ごろのつきせぬ嘆きもあらはさめ」と＊3思ひつよりて、丈に余りたりける髪を押し切りて、白き薄様に包みて、

　いまさらにふたたびものを思へとやいつもかはらぬ同じうき身に

と書き付けて、御車に入れてまゐらせたりける。この人は、後にはみその尼とて、ちかくまでも聞こえしとかや。

＊4東山の片隅に、あばれて人もかけらぬあばら屋に、いとやさしく、いまだ人なれぬ女ありけり。庭の荻原まねけども、風よりほかはとふ人もなく、軒端の蓬茂れども、＊5杉むらならねばかひなくて、月にながめ、嵐にかこちても、心をいたましむるよりは多く、花を見、郭公を聞きても、慰むべきかたはまれなる事にて明かし暮らすに、＊6清水詣のついでに、思はぬほかのさかしら出で来て、いたらぬくまなかりし御世に、ただ一夜の夢の契りを結びまゐらせてける。これもさきの世を思へば、かたじけなかりけれども、さしあたりて、嘆きに恨みをそへて、心のうち晴るるまもなし。かひなくあり経れど、今ひとたびの、言の葉ばかりの御情けだに待ちかねて、「よし、これゆゑそむくべき浮き世なりけり」と＊7思ひ立ちて、ありし御心知りのもとへ遣はしける。

　なかなかにとはぬ人のうれしきはうき世をいとふたよりなりけり

とばかり、心にくく、幼びれたる手にて、縹の薄様に書きたるを、折りをうかがひて奏しければ、「まことにさる事あり。たづねざりける心おくれこそ」と御気色ありければ、やがて走り向かひてたづぬるに、さらぬだに荒れたる宿の、人住む気色もなきを、やや久しくやすらひて、老いたる女一人尋ねえて、事のやうを詳しく問ひければ、「何といふ事は知り侍らず。あるじは＊8天王寺へ参り給ひぬ」と言へば、やがてそれより天王寺へ参り、寺々をたづぬるに、＊9亀井のあたりに、おとなしき尼一人、女房二三人ある中に、いと若き尼の、ことにたどたどしげなるがあり。この心知りを見つけて、あさましと思ひげにて、ただ、やがてうつぶして、泣くよりほかの事なし。かたへの者ども、声をたてぬばかりにて、おとる袖なく絞りければ、御使ひも見捨てて帰るべき心地もせず。おとなしき尼は、この人の母なりければ、事のやう細かに尋ねけれども、「もとよりこれは思ひつる事なり。何しにかは、君の御ゆゑにてさぶらふべき。かしこく」と、言ひもあへず泣きて、その後は答へざりければ、「よしなき御使ひをして、かはゆき事を見つるよ」とかなしくて、さりとても、ここにて世をつくすべきならねば、立ち帰りぬ。このよしを奏するに、「はしたなの心のたてざまや。心おくれがとがになりつるよ」とて、かひなかりけり。あはれにも、やさしくも、長き世の物語りにぞなりぬる。Aみその尼の心と、いづれか深からん。

（『今物語』による）

注　＊1　松殿＝藤原基房（一一四五～一二三〇）。　＊2　宮の鶯、百囀りすれども、思ひあれば、聞く事をやめつ。うつばりのつばくらめ、ならび住めども、身を知れば、ねたまず。遅々たる春の日も、ひとり住めば、いとど暮れやらず。蕭々たる秋の夜は、むなしき床に、明かしがたくて過ぐしける＝『白氏文集』巻第三諷喩三「上陽白髪人」を踏まえる。「上陽白髪人」は、女の嘆きを表現するために引用されることが多かった。　＊3　思ひつよりて＝揺れ動く気持ちを定めて、気力をしっかりとさせて、の意。　＊4　東山＝京都盆地の東の山峰の総称。　＊5　杉むら＝杉木立は恋人が訪ねて来るときに目印とされると考えられていた。　＊6　清水詣＝清水寺（現在の京都市東山区）の観世音菩薩に詣でた功徳として、良縁を得る話が数多く伝えられている。　＊7　御心知り＝帝のご事情を知る人。　＊8　天王寺＝四天王寺（現在の大阪市天王寺区）。極楽浄土への入り口とみなした西門信仰で参詣者を集めていた。　＊9　亀井のあたり＝地名か。天王寺の近くにあった井戸の周辺の地域。

問1　一人目に語られる女と基房とは、どのような状況であったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　一人目に語られる女は、基房が心を寄せておられた女であったが、基房への連絡が途絶えがちになった後、常のことではない便りさえ送らなくなったので、基房は自分のことながら不都合なことになったと思い悩み、人の心が花のように移ろうままに、日々をむなしく過ごしていた。

b　一人目に語られる女は、基房が心を寄せておられた女であったが、基房が女を訪ねることも途絶えがちになった後、ちょっとした経済的援助さえ稀になったので、女は自分のことながら不都合なことになったと思い悩み、人の心が花のように移ろうままに、日々をむなしく過ごしていた。

c　一人目に語られる女は、基房のことを恋しく思っておられたが、基房が女を訪ねることも途絶えがちになった後、女からも基房にちょっとした便りさえ送らなくなったので、基房は自分が原因であるものの思いがけないことになったと思い悩み、人の心が花のように移ろうままに、日々をむなしく過ごしていた。

d　一人目に語られる女は、基房のことを恋しく思っておられたが、基房への連絡が途絶えがちになった後、基房からもちょっとした経済的援助さえ稀になったので、女は自分が原因であるものの不都合なことになったと思い悩み、人の心というのは花のように移ろうものだからと、日々をむなしく過ごしていた。

e　一人目に語られる女は、基房が心を寄せておられた女であったが、基房が女を訪ねることも途絶えがちになった後、女からも基房に常のことではない便りさえ送らなくなったので、基房は自分が原因であるものの思いがけないことになったと思い悩み、人の心というのは花のように移ろうものだからと、日々をむなしく過ごしていた。

問2　基房が女に迎えをよこした際、女はどのように思っていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　女は、基房が迎えをよこしてくれたことに対して、夢に見たことがある出来事であったために現実に起こっていることとは判断できず、基房に対しても、今までの仕打ちを耐えがたくつらいと感じつつも、一方で迎えをありがたくうれしく思ってしまい、落ち着かない。そうはいっても、今更、待ち焦がれていたかのようにうれしそうな顔をしたとしても、あまりに恥知らずで、自分のことながら、むしろ嫌な感じがする、と思っていた。

b　女は、基房が迎えをよこしてくれたことに対して、夢の出来事であるのか現実に起こっていることであるのか判断できず、自らの気持ちについても、耐えがたくつらいと思っているのか、ありがたくうれしいと思っているのか、わからない。そうはいっても、今更、待ち焦がれていたかのようにうれしそうな顔をしたとしても、あまりに恥知らずで、自分のことながら、むしろ嫌な感じがする、と思っていた。

c　女は、基房が迎えをよこしてくれたことに対して、夢の出来事であるのか現実に起こっていることであるのか判断できず、自らの気持ちについても、耐えがたくつらいと思っているのか、ありがたくうれしいと思っているのか、わからない。そうはいっても、今更、待ち焦がれていたかのようにうれしそうな顔をしたとしても、基房はとても薄情で、女のことなど、かえって嫌だと感じるだろう、と思っていた。

d　女は、基房が迎えをよこしてくれたことに対して、夢に見たことがある出来事であったために現実に起こっていることとは判断できず、自らの気持ちについても、耐えがたくつらいと思っているのか、ありがたくうれしいと思っているのか、わからない。そうはいっても、今更、待ち焦がれていたかのようにうれしそうな顔をしたとしても、基房はとても薄情で、女のことなど、かえって嫌だと感じるだろう、と思っていた。

e　女は、基房が迎えをよこしてくれたことに対して、夢の出来事であるのか現実に起こっていることであるのか判断できず、基房に対しても、今までの仕打ちを耐えがたくつらいと感じつつも、一方で迎えをありがたくうれしく思ってしまい、落ち着かない。そうはいっても、今更、待ち焦がれていたかのようにうれしそうな顔をしたとしても、基房はとても薄情で、心を寄せる女であっても、かえって嫌だと感じるだろう、と思っていた。

問3　女が基房に和歌を送ったときの様子はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　女は、背丈よりも長い髪を切って、白い薄手の紙に包み、そこに「今更に再びあなたへの恋心に思い悩めとおっしゃるのですか」という和歌を書き付け、迎えの車に自らは乗らず、切った髪のみを乗せて帰した。

b　女は、背丈にはやや及ばないほどの長さの髪を切って、白い薄手の紙に包み、そこに「今更に再びあなたへの恋心に思い悩めとおっしゃるのですか」という和歌を書き付け、それを携えて、迎えの車に乗って基房のもとへ参上した。

c　女は、背丈よりも長い髪を切って、白い薄手の紙に包み、そこに「今更に再びあなたからの援助をあてにせよとおっしゃるのですか」という和歌を書き付け、迎えの車に自らは乗らず、切った髪のみを乗せて帰した。

d　女は、背丈にはやや及ばないほどの長さの髪を切って、白い薄手の紙に包み、そこに「今更に再びあなたからの援助をあてにせよとおっしゃるのですか」という和歌を書き付け、迎えの車に自らは乗らず、切った髪のみを乗せて帰した。

e　女は、背丈よりも長い髪を切って、白い薄手の紙に包み、そこに「今更に再びあなたへの恋心に思い悩めとおっしゃるのですか」という和歌を書き付け、それを携えて、迎えの車に乗って基房のもとへ参上した。

問4　東山の片隅の家について説明するものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　庭の荻が手招きするように揺れても、風のほかに訪ねてくる人もなく、軒に蓬が生い茂っても、杉木立ではないので恋人が訪ねてくることもできないような、そんな人が出入りしない不気味な家に、たいそう美しく、まだ男女のことに慣れていない女が住んでいた。

b　庭の荻が揺れているのを真似て手招きしても、風のほかに訪ねてくる人もなく、軒に蓬が生い茂っても、杉木立ではないので恋人が訪ねてくることもないような、そんな境遇に心すさんで人にも相手にされなくなった人たちが住む不気味な家に、たいそう肩身を狭くして、まだ男女のことに慣れていない女が住んでいた。

c　庭の荻が手招きするように揺れても、風のみを誘っているために人は訪ねてこず、軒に蓬が生い茂っても、杉木立ではないので恋人が訪ねてくることもないような、そんな人が出入りしない風変わりな家に、たいそう美しく、まだ男女のことに慣れていない女が住んでいた。

d　庭の荻が手招きするように揺れても、風のほかに訪ねてくる人もなく、軒に蓬が生い茂っても、杉木立ではないので恋人が訪ねてくることもないような、そんな人が出入りしない荒れ果てた家に、たいそうつつましく、まだ男女のことに慣れていない女が住んでいた。

e　庭の荻が揺れているのを真似で手招きしても、風のほかに訪ねてくる人もなく、軒に蓬が生い茂っても、杉木立ではないので恋人が訪ねてくることもできないような、そんな境遇に心すさんで人が出入りしないほどに荒れ果てた家に、たいそう美しく、まだ男女のことに慣れていない女が住んでいた。

問5　清水寺参詣のおりに帝と一夜を共にした女は、その後、帝とどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　女は、もう一度だけの、帝からの口先だけの好意でさえ待つことができなくて、帝がかえりみてくれないことを出家の機縁とさだめて、自らの決意を伝える和歌を子どもじみた筆跡で薄青色の薄手の紙に書き、帝との関係を取り持ってくれた人に送った。

b　女は、もう一度だけの、帝に恋情を伝えるわずかな機会ですら待つことができなくて、帝と関係を持つことは世間から非難されることではないと信じ込み、自らの好意を伝える和歌を子どもじみた筆跡で薄青色の薄手の紙に書き、帝との関係を取り持ってくれた人に送った。

c　女は、もう一度だけの、帝に恋情を伝えるわずかな機会ですら待つことができなくて、帝からのお召しにいつでも応じられるようにと決心して、自らの子どもじみた決意を伝える和歌を薄青色の薄手の紙に書き、帝との関係を取り持ってくれた人に送った。

d　女は、もう一度だけの、帝からの口先だけの好意でさえ待つことができなくて、帝と関係を持つことは世間から非難されることではないと信じ込み、自らの決意を伝える和歌を子どもじみた筆跡で薄青色の薄手の紙に書き、帝との関係を取り持ってくれた人に送った。

e　女は、もう一度だけの、帝からの口先だけの好意でさえ待つことができなくて、帝がかえりみてくれないことを出家の機縁とさだめて、自らの子どもじみた決意を伝える和歌を薄青色の薄手の紙に書き、帝との関係を取り持ってくれた人に送った。

問6　帝から女へ遣わされた使者は、どのようにして女を見つけたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　使者は女の住まいを訪ねたが、人が住んでいる気配もなく、しばらくとどまっていると、一人の老女に事の次第を尋ねることができた。老女は「どういう事情かはわからないが、主人は四天王寺参拝に出かけました」と言った。使者はそのまますぐに四天王寺に向かい、寺々を訪ねたところ、目立たない尼と二、三人の女房たちの中に、たいそう若い尼がいた。その若い尼が捜していた女であった。

b　使者は女の住まいを訪ねたが、人が住んでいる気配もなく、しばらくとどまっていると、一人の老女に事の次第を尋ねることができた。老女は「女の行方はわからないが、女の母である主人は四天王寺で修行しています」と言った。使者はそのまますぐに四天王寺に向かい、寺々を訪ねたところ、物静かな尼と二、三人の女房たちの中に、たいそう若い尼がいた。その若い尼が捜していた女であった。

c　使者は女の住まいを訪ねたが、人が住んでいる気配もなく、ほんの少しとどまっていると、一人の老女に事の次第を尋ねることができた。老女は「どういう事情かはわからないが、主人は四天王寺参拝に出かけました」と言った。使者はそのまますぐに四天王寺に向かい、寺々を訪ねたところ、きちんとした身なりの尼と二、三人の女房たちの中に、たいそう若い尼がいた。その若い尼が捜していた女であった。

d　使者は女の住まいを訪ねたが、人が住んでいる気配もなく、ほんの少しとどまっていると、一人の老女に事の次第を尋ねることができた。老女は「女の行方はわからないが、女の母である主人は四天王寺で修行しています」と言った。使者はそのまますぐに四天王寺に向かい、寺々を訪ねたところ、分別のある尼と二、三人の女房たちの中に、たいそう若い尼がいた。その若い尼が捜していた女であった。

e　使者は女の住まいを訪ねたが、人が住んでいる気配もなく、しばらくとどまっていると、一人の老女に事の次第を尋ねることができた。老女は「どういう事情かはわからないが、主人は四天王寺参拝に出かけました」と言った。使者はそのまますぐに四天王寺に向かい、寺々を訪ねたところ、年配の尼と二、三人の女房たちの中に、たいそう若い尼がいた。その若い尼が捜していた女であった。

問7　使者と尼のやりとりとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　使者は、女が出家した事情を詳細に尋ねるけれども、女の母は「もともと出家することは考えていたことです。どうして、帝にご報告できましょうか。おそれ多い」と言い終わらないうちに泣いて、その後は答えなかったので、使者は「つまらないお使いをして、きまりの悪い思いをしてしまったよ」と自らを恥じるものの、そうはいっても、この世を厭い出家するわけにはいかないので、帰京した。

b　使者は、女が東山の住まいを出た事情を詳細に尋ねるけれども、女の母は「もともと住まいを出ることは考えていたことです。どうして、帝が原因でございましょうか。おそれ多い」と言い終わらないうちに泣いて、その後は答えなかったので、使者は「つまらないお使いをして、きまりの悪い思いをしてしまったよ」と自らを恥じるものの、そうはいっても、この世を厭い出家するわけにもいかないので、帰京した。

c　使者は、女が出家した事情を詳細に尋ねるけれども、女の母は「もともと出家することは考えていたことです。どうして、帝が原因でございましょうか。おそれ多い」と言い終わらないうちに泣いて、その後は答えなかったので、使者は「無意味なお使いをして、かわいそうで見ていられないところを見てしまったよ」と不憫に思い、そうはいっても、四天王寺で一生を終わるわけにはいかないので、帰京した。

d　使者は、女が東山の住まいを出た事情を詳細に尋ねるけれども、女の母は「もともと住まいを出ることは考えていたことです。どうして、帝にご報告できましょうか。おそれ多い」と言い終わらないうちに泣いて、その後は答えなかったので、使者は「無意味なお使いをして、かわいそうで見ていられないところを見てしまったよ」と不憫に思い、そうはいっても、四天王寺で一生を終わるわけにはいかないので、帰京した。

e　使者は、女が出家した事情を詳細に尋ねるけれども、女の母は「もともと出家することは決心していたことです。どうして、帝が原因でございましょうか。おそれ多い」と言い終わらないうちに泣いて、その後は答えなかったので、使者は「私に関係のないお使いをして、きまりの悪い思いをしてしまったよ」と残念に思い、そうはいっても、この世を厭い出家するわけにはいかないので、帰京した。

問8　使者の報告を聞いた帝はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　帝は「とんでもない発心の仕方であるなあ。あの人の性格が、あだとなってしまったよ」と言うものの、後悔しても無駄だった。

b　帝は「抜け目のない発心の仕方であるなあ。あの人の性格が、あだとなってしまったよ」と言うものの、女と会おうと思っても意味がなかった。

c　帝は「とんでもない発心の仕方であるなあ。私の判断の甘さが、罪になってしまったよ」と言うものの、後悔しても無駄だった。

d　帝は「抜け目のない発心の仕方であるなあ。私の判断の甘さが、罪になってしまったよ」と言うものの、女と会おうと思っても意味がなかった。

e　帝は「とんでもない発心の仕方であるなあ。あの人の性格が、あだとなってしまったよ」と言うものの、女と会おうと思っても意味がなかった。

問9　傍線部Ⓐについて、主語をあきらかにして、現代語訳せよ。

（以上）

2026 年 度 入 学 試 験 問 題

国　　語

注　意　事　項

Ⅰ　試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
Ⅱ　解答用紙はすべて黒鉛筆（ＨＢ）〈シャープペンシルは，ＨＢ 0.5 mm 以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）
Ⅲ　解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し，切取線から切り離してください。
Ⅳ　試験時間は 75 分です。
Ⅴ　問題は 26 ページで大問２問です。

マーク記入上の注意

1．解答欄にマークするときは，ＨＢの黒鉛筆で次の正しい例のように，濃く正確にぬりつぶしてください。
2．マークのしかた
(ア)　正しい例
a　解答が１つの場合，例えばイと解答するときは
(1) ㋐ ● ㋒ ㋓ ㋔　のように，マークしてください。
b　解答が２つの場合，例えばイとウと解答するときは
(1) ㋐ ● ㋒ ㋓ ㋔ / ㋐ ㋑ ● ㋓ ㋔　または　(1) ㋐ ㋑ ● ㋓ ㋔ / ㋐ ● ㋒ ㋓ ㋔　のように各１つずつマークしてください。
(イ)　悪い例
(1) ㋐ ◎ ㋒ ㋓ ㋔　◎印でかこむ。
(2) ㋐ ◔ ㋒ ㋓ ㋔　全部をぬりつぶしていない。
(3) ㋐ ✓ ㋒ ㋓ ㋔　レ印をつける。
(4) ㋐ ｜ ㋒ ㋓ ㋔　｜印をつける。
(5) ㋐ ● ● ㋓ ㋔　１欄に２つ以上マークする。
　このような記入をしてはいけません。
3．一度記入したマークを訂正する場合は，消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。
(1) ㋐ ● ■ ㋓ ㋔　のように×印をしても消したことにはなりません。
4．解答用紙を折り曲げたり，破ったり，また汚したりしないでください。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一　カンズラの謎

一八世紀後半にフランスで出版された『百科全書』（*Encyclopédie*）には、日本に関する記述が数多く含まれている。項目キコウ(あ)者のなかに、日本を実際に訪れた人はいない。すべての記述は何らかの資料をふまえているはずだが、それを突き止めるのは容易ではない。そもそも、何について記しているのかハンゼン(い)としないものが少なくない。たとえば、次の項目がそうである。

カンズラ〔CANZULA〕（地理）　アジアの海辺の町で、ジャポン〔Japon〕のニフォン〔Niphon〕島にある。

たった二行の素っ気ない記述で、これでは何のことかさっぱり分からない。Japon と Niphon はそれぞれカタカナで音訳したが、前者は国の名前としての日本を、後者はその主要な島である本州を指す。一八世紀のフランス人読者にそのような区別がつくはずはなく、彼らの認識を訳文に反映させるなら、漢字を当てないほうがよいだろう。

問題は、見出し語の「カンズラ」である。日本の地名を指すらしいが、現在の地名にそのような響きを持つものはない。カンズラとは一体何だろうか。

二　桂がだめなら勝浦でどうか

CANZULA という綴り(う)を目にして、私が真っ先に思い浮かべた音は「カツラ」であった。三文字目の N をどう説明するかはヤッカイ(え)だが、日本語の子音の前に撥音[*1]があるように聞こえたとしても不思議ではない。実際、『百科全書』第二巻五九七ページには CANGOXUMA という項目があり、内容は不正確ながら「カゴシマ（鹿児島）」を指していることは明らかだ。この場合にはなお、「ガ行鼻濁音[*2]の前だからNが入ったのだ」という説明ができそうだ。それなら、第一巻五二〇ページの ANZUQUI と ANZUQUIAMA という項目が類例となるだろう。「アズチ（安土）」と「アズチヤマ（安土山）」に対応する。Z の前に N が添えられることはあるわけで、ヨーロッパ人の耳には鼻にかかったような音として認識されたのである。

したがって、CANZULA を「カズラ」と読むこと自体には問題はない。「ツ」をドイツ語風に綴れば ZU になるので、原語が「カツラ」であってもよさそうな気がする。しかし、カンジン(お)の内容がそぐわない。もしこれが京都の桂であれば、「海辺の町」という説明に合わない。海辺なら高知の桂浜という可能性もあるが、海岸を「町」とは言わないであろう。また、「ニフォン島」が表すのは本州であり、四国を指すときは XICOCO や SIKOKF といった表記が用いられるのが普通である。残念ながら、CANZULA を「桂」に同定することには無理があるようだ。

ならば、「カツウラ（勝浦）」ではどうだろうか。現在の地名で言えば、千葉県の勝浦市や和歌山県の那智勝浦町が「本州の海辺の町」という条件を満たす。記述内容の点では、少なくとも事実には反しない。これで一件落着のような気もするが、やはり何かが引っかかる。「ツ」と「ラ」の間に「ウ」という母音があるのに、それは「ツ」に含まれる母音に同化して聞こえていたのだろうか。さらに言えば、日本語の「ツ」をアルファベットの ZU で表すことも、この場合に関する限り、不自然なのだ。異なる系統の表記が混在していることになるからである。

三　ラテン系表記とゲルマン系表記

一六世紀半ばにポルトガル人が日本に到来して以降、ヨーロッパの言語に翻訳しにくいことばは、日本語の響きのままローマ・アルファベットで表記されるようになる。代表的なのは地名だが、日本にしか見られない植物や動物も音訳の対象となる。その際、日本語の音にどのような文字を当てるかは、何を母語とするかに左右される。分かりやすいのはカ行の音で、ラテン系

言語を母語とする人はCで、ゲルマン系言語を母語とする人はKを用いる傾向にある。[*3]イエズス会をはじめとする宣教師の多くはポルトガル人であり、イエズス会士によって書かれた文献およびそれらを参照した文献では、日本語のカ行はCで表される。一方、オランダ東インド会社[*4]の関係者の記録では、Cの代わりにKが用いられることになる。

文字が異なれば、別のことばとして認識される。その典型例を『百科全書』で確認してみよう。「カイ（甲斐）」に相当する項目が、CAIとKAIの二つ存在するのである。

カイ CAI（地理）　ジャポン帝国に属する小王国で、ニフォン島にある。

カイ KAI（地理）　ジャポンの州でラポン〔Japon〕大島にあり、ルルンガ〔Lurunga〕の北、イェド〔Jédo〕を首都とするムサシ〔Musasi〕の西にある。ジャポン人が最良の馬を手に入れるのはカイ州からである。

現在の日本人であれば、CAIとKAIがいずれも「甲斐」を指すと理解できる。しかし、一八世紀のフランス人には、そうした区別は立てられない。異なる地名と認識されたにちがいない。そもそも、二つの表記の情報源は異なっている。項目CAI[*5]はモレリの『歴史大辞典』の同名項目を写したものであり、さらにさかのぼればイエズス会系の文献に辿り着く。項目KAI[*6]はプリュザン・ド・ラ・マルティニエールの『地理大辞典』の同名項目を短縮したものであり、そのもとになったのはケンペル[*7]の『日本誌』である。ケンペルはドイツ人医師であり、オランダ東インド会社付きとして元禄年間に日本に滞在した。要するに、CAIはラテン系表記であり、KAIはゲルマン系表記である。

ここで、改めてCANZULAという文字をよく見てみよう。冒頭の文字はCであり、これはラテン系表記のしるしである。ケンペルならKを用いるはずだ。一方、ZUを「ツ」と発音するのは、ドイツ語の特徴である。KANZULAなら「カツウラ」と読むことが許されるかもしれないが、CANZULAは「カンズラ」か「カズラ」でなければならないのである。

ふりだしに戻ったように思われるが、あきらめてはならない。解決の糸口は最後の音節にある。LAは「ラ」ではないのだ。ヒントは項目KAIに潜んでいた。

四　長いｓのいたずら

『百科全書』の項目KAIには、妙な綴りの地名が登場した。LaponとLurungaである。このうち、Laponは Japon とよく似ているし、Kai が Lurunga の北にあるからには、Lurungaは「スルガ〔駿河〕」を指す可能性が高い。いずれにしても、Lは誤記であり、もとはJやSだったはずだ。そこまではよいとして、何でもかんでもLに化けるとは思えない。隠れた法則性を見つけ出さなければならない。

Laponへの転化のほうは、比較的簡単に仮説を立てられる。ローマ・アルファベットはもともと二三文字であり、IとJの区別はなかった。フランス語の世界でも、一七世紀までは Japon のことを Iapon と綴ることが多かった。異国の地名に馴染みのない人が見れば、大文字のアイ（I）と小文字のエル（l）を取り違えることはあるだろう。ひとたび小文字で lapon という表記がなされれば、冒頭を大文字にして Lapon となるまではほんのひとまたぎである。

では、「スルガ」はいかにして Lurunga になったのだろうか。まず、Surunga という表記があった。『百科全書』には、ケンペルに由来する SURUNGA という項目が存在する。この綴りが、誰かによってすべて小文字で表記される。このとき使われた文字の書体は、私たちにとってあたりまえのｓではなかった。当時のフランスでは、語末以外の場所で「長いｓ」が用いられていたのである。それはfという書体であり、SURUNGAの小文字表記は furunga なのである。このfはｆやlとよく似ており、混同されやすい。身近な単語、たとえば「塩」を意味する fel であれば、fel や lel と読む人はいない。しかし、未知の地名に含まれている場合、fは常にｆやlに置き換えられる危険にさらされている。

いまや Lurunga の謎は明らかであろう。すべて小文字の furunga は lurunga と誤写され、一文字目が大文字のLになったのである。

CANZULA にも同様の取り違えが起きた。これをすべて小文字で書くと、canzula となる。そして、後ろから二文字目のlは、エルではなくエスだったのだ。ただし、それはfである。つまり、最初の表記は canzula であり、大文字にすればCANZUSA である。ここまで来れば、正体が判明する。CANZUSA は「カズサ（上総）」にほかならない。カ行をCで表し、ZUを「ツ」ではなく「ズ」と読むことは、ラテン系表記の特徴にも合っている。

それでもなお、「アジアの海辺の町」という表現には引っかかる。上総は国であって町ではない。この点については、先にも触れたプリュザンの『地理大辞典』の同名項目を読むことによって、説明がつく。

カンズラ〔CANZULA〕　ジャポン〔Japon〕の海辺の町で、ニフォン〔Nipbon〕島にあり、イェド〔Iedo〕湾の東海岸、アワ〔Ava〕王国の北、シモサ〔Ximosa〕王国の南にある。

言うまでもなく、イェドは江戸、アワは安房、シモサは下総[しもうさ]である。位置関係から見ても、カンズラが上総であることに異論の余地はない。安房と下総は「王国」と表現されており、本来であれば上総も同等の扱いを受けてしかるべきである。ところが、何かの拍子にこれを町とする取り違えが生じたのであろう。

それがいつのことか、正確に特定することは難しい。しかし、一七世紀のイエズス会士[*8]フィリップ・ブリエ神父が作成した「ジャポン王国」の地図を見ると、房総半島には国名としての Canzula と都市名としての *Canzula*（こちらはイタリック体）という表記が併存しており、ここに「海辺の町」という誤解の源泉の一つを見ることができるだろう。

ちなみに、同じ地図では武蔵のことが Muiaxi と記されており、ここでも Muiaxi の長いｓがlに化けている。[33]ユダンがならない。

五　不自然な綴りを疑え

日本語の研究をするうえで、近世ヨーロッパの文献はさまざまな場面で役に立つ。アルファベットによる表記は、当時の日本語の音を知る手がかりになる。しかし、そこに誤記が含まれている可能性については、常に注意を払うべきである。二次文献の書き手は日本語を知らないので、転写の際に取り違えをすることもあるし、間違った綴りを見ても訂正しない。

とくに危険なのは、小文字である。大文字は字体の違いがはっきりしており、誤解されにくい。それに対して、小文字はちょっとした印刷のかすれで別の文字に見えることがある。たとえばｃとｅ、ｎとｒなどだが、二文字のｉｎが一文字のｍと紛れることもある。

そうしたなかにあって、長いｓすなわちfは盲点になりやすい。このような字体そのものがあまり認知されていないからである。fがｆやlに転化する事例は、決して珍しくない。また、当時の人々が正しく書写していても、現代の私たちが読み間違える場合もある。fは OCR との相性も悪く、古い文献を機械的に読み取らせるとｆやlとして出力されることがある。不自然な綴りに出くわしたら、ｆの可能性を疑ってみるとよいだろう。

（小関武史「長いｓにご用心」による　※一部本文を改めた箇所がある）

注　＊1　撥音＝日本語の音声の一つで「ん」「ン」と表記されるもの。　＊2　ガ行鼻濁音＝呼気を鼻に抜いて発音するガ行音。　＊3　イエズス会＝カトリック男子修道会の一つ。　＊4　東インド会社＝一七世紀初頭に、インド、東南アジアとの貿易および植民地経営を行うためにヨーロッパ各国が設立した会社。　＊5　モレリ＝フランスの神父。（一六四三～一六八〇）　＊6　プリュザン・ド・ラ・マルティニエール＝フランスの地理学者。（一六六二～一七四六：生没年には諸説あり）　＊7　ケンペル＝ドイツの博物学者、医師。（一六五一～一七一六）　＊8　フィリップ・ブリエ＝フランスの神父。（一六〇一～一六六八）

問1　一八世紀後半にフランスで出版された『百科全書』(*Encyclopédie*)について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　日本に関する記述が数多く含まれているが、その項目キコウ者のなかに日本を実際に訪れた人はおらず、すべての記述は日本人が関わった何らかの資料をふまえていると述べている。

b　日本に関する記述が数多く含まれているが、何について記しているのかハンゼンとしないものが少なくなく、その内容を突き止めるのは容易ではないと述べている。

c　日本に関する記述が数多く含まれているが、「カンズラ〔CANZULA〕」という項目の記述では、Japon が国の名前としての日本を、Niphon がその主要な島である本州を指す語として使用されていると述べている。

d　日本に関する記述が数多く含まれているが、「カンズラ〔CANZULA〕」という項目の記述からは、一八世紀のフランス人読者が Japon と Niphon の区別がついていなかったことがわかると述べている。

e　日本に関する記述が数多く含まれているが、「カンズラ〔CANZULA〕」という項目は日本の地名を指しており、当時の日本にはそうした響きを持つ地名があったことがわかると述べている。

問2　CANZULA という綴りから想定される地名について、筆者はどのように考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　『百科全書』には「カゴシマ(鹿児島)」を指す CANGOXUMA という項目があることから、CANZULA を「カズラ」と読むことには問題はなく、京都の桂を指すと考えている。

b　『百科全書』には「アズチ(安土)」と「アズチヤマ(安土山)」に対応する ANZUQUI と ANZUQUIAMA という項目があることから、CANZULA を「カズラ」と読むことには問題はなく、高知の桂浜を指すと考えている。

c　CANZULA を「カズラ」と読むことには問題はなく、「ツ」をドイツ語風に綴れば ZU になるので、「本州の海辺の町」という条件を満たす千葉県の勝浦市もしくは和歌山県の那智勝浦町を指すと考えている。

d　「ツ」をドイツ語風に綴れば ZU になるが、「ツ」と「ラ」の間の「ウ」という母音が「ツ」に含まれる母音に同化して聞こえたとは考えにくいため、CANZULA は「カツウラ」という地名を指すとは言えないと考えている。

e　「ツ」をドイツ語風に綴れば ZU になるが、CANZULA の場合は日本語の「ツ」をアルファベットの ZU で表すことは不自然であるため、「カツラ」や「カツウラ」という地名を指すとは言えないと考えている。

問3　ヨーロッパの言語で日本語の音にどのような文字を当てるかについて説明したものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　ヨーロッパの言語に翻訳しにくいことばは、日本語の響きのままローマ・アルファベットで表記されるが、日本語の音にどのような文字を当てるかは、ラテン系言語を母語とする人によって左右される。

b　ゲルマン系言語を母語とするポルトガル人のイエズス会士によって書かれた文献およびそれらを参照した文献では、日本語のカ行はCで表されている。

c　日本語のカ行の音を表記する場合、ラテン系言語を母語とするポルトガル人のイエズス会士によって書かれた文献およびそれらを参照した文献ではKが用いられている。

d　ラテン系言語を母語とするオランダ東インド会社の関係者によって書かれた文献およびそれらを参照した文献では、日本語のカ行はCで表されている。

e　日本語のカ行の音を表記する場合、ゲルマン系言語を母語とするオランダ東インド会社の関係者の記録ではKが用いられている。

問4　『百科全書』の「カイ(甲斐)」に相当する項目を取り上げることにより、筆者はどのようなことを説明しようとしているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　『百科全書』には「カイ(甲斐)」に相当する項目が CAI と KAI の二つ存在しており、現在の日本人であれば CAI と KAI がいずれも「甲斐」を指すと理解できるが、一八世紀のフランス人には異なる地名と認識されたにちがいないということを説明しようとしている。

b　『百科全書』には「カイ(甲斐)」に相当する項目が CAI と KAI の二つ存在するが、項目 CAI はモレリの『歴史大辞典』の同名項目を写したものであり、さらにさかのぼればイエズス会系の文献に辿り着くことから、日本語のカ行をCで表すことはゲルマン系言語の特徴であるということを説明しようとしている。

c　『百科全書』には「カイ(甲斐)」に相当する項目が CAI と KAI の二つ存在するが、項目 KAI はブリュザン・ド・ラ・マルティニエールの『地理大辞典』の同名項目を短縮したものであり、そのもとになったのはドイツ人医師のケンペルの『日本誌』であるということを説明しようとしている。

d　『百科全書』には「カイ(甲斐)」に相当する項目が CAI と KAI の二つ存在するが、二つの表記の情報源は異なっており、その情報源となる文献の著者の母語から、CAI はラテン系表記であり、KAI はゲルマン系表記ということを説明しようとしている。

e　『百科全書』には「カイ(甲斐)」に相当する項目が CAI と KAI の二つ存在するが、二つの表記の情報源は異なっており、その情報源となる文献の著者の日本滞在歴から、CANZULA は「カンズラ」か「カズラ」でなければならないということを説明しようとしている。

問5　『百科全書』の項目 KAI に登場する Lapon と Lurunga について、筆者はどのような説明をしているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　一七世紀までのフランス語では I と J の区別がなかったことから、大文字のアイ(I)と小文字のエル(l)を取り違え、さらに冒頭を大文字にして Lapon および Lurunga になったと説明している。

b　当時のフランスでは、語末以外の場所の小文字の s が「長い s」であったため、すべて小文字で表記された lapon と furunga という語の f が l と混同され、さらに冒頭を大文字にして Lapon および Lurunga になったと説明している。

c　Lapon の語頭の L は J、Lurunga の語頭の L は S にあたり、前者は大文字のアイ(I)と小文字のエル(l)の取り違えによって生じ、後者は当時のフランスで小文字の s が「長い s」であったことにより生じたと説明している。

d　Lapon の語頭の L は S、Lurunga の語頭の L は J にあたり、前者は当時のフランスで小文字の s が「長い s」であったことにより生じ、後者は大文字のアイ(I)と小文字のエル(l)の取り違えによって生じたと説明している。

e　Lapon の語頭の L は J、Lurunga の語頭の L は S にあたり、前者は一七世紀までのフランス語では I と J の区別がなかったことから生じ、後者は当時のフランスで大文字の S が「長い s」であったことにより生じたと説明している。

問6　CANZULA の正体について、筆者はどのような説明をしているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　CANZULA をすべて小文字で書くと canzula となるが、後ろから二文字目の l（エル）は f（エス）を取り違えたものであって、CANZULA は CANZUSA すなわち「カズサ（上総）」であると説明している。

b　「カズサ（上総）」を意味する CANZUSA の後ろから二文字目の大文字の S（エス）が大文字の L（エル）で誤写されたことにより、CANZULA になったと説明している。

c　CANZULA は「アジアの海辺の町」とされているが、CANZULA は CANZUSA であり、海辺の町である「カズサ（上総）」にほかならないと説明している。

d　CANZULA は CANZUSA すなわち「カズサ（上総）」であり、安房と下総が「王国」であるのと同様に、上総も「王国」であると説明している。

e　CANZULA は CANZUSA すなわち「カズサ（上総）」であるが、当時の房総半島には国名としての上総と都市名としての上総が併存していたと説明している。

問7　近世ヨーロッパの文献を扱う場合の注意点について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　近世ヨーロッパの文献は、日本語の研究をするうえでさまざまな場面で役に立つが、アルファベットによる表記は、当時の日本語の音を正確に表記していない可能性があるため、注意を払うべきであると述べている。

b　近世ヨーロッパの文献は、日本語の研究をするうえでさまざまな場面で役に立つが、二次文献の書き手は日本語を知らないので、誤記が含まれている可能性について注意を払うべきであると述べている。

c　近世ヨーロッパの文献は、日本語の研究をするうえでさまざまな場面で役に立つが、アルファベットによる表記は、大文字と小文字を取り違えるような誤記が含まれている可能性があるため、注意を払うべきであると述べている。

d　近世ヨーロッパの文献は、日本語の研究をするうえでさまざまな場面で役に立つが、たとえば小文字の c や s などは、ちょっとした印刷のかすれで大文字に見えることがあるため、注意を払うべきであると述べている。

e　近世ヨーロッパの文献は、日本語の研究をするうえでさまざまな場面で役に立つが、長い s すなわち f は、このような字体そのものがあまり認知されていないため、正しく書写するように注意を払うべきであると述べている。

問8　二重傍線部（あ）（い）（う）（え）（お）のカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

（あ）キコウ

a　入学式が体育館でキョコウされた。
b　外国からの要人をコウグウする。
c　雑誌の特集記事が昨晩コウリョウした。
d　会議資料のソウコウを作成する。
e　この絵画は細部にわたる精密なギコウが光っている。

（い）ハンゼン

a　彼の行動は社会的なキハンから外れている。
b　原告はハンケツを不服として控訴した。
c　ショハンの事情によりイベントは中止となった。
d　地図のハンレイを見て各記号の意味を確認する。
e　年末はどの部署もハンボウを極める時期だ。

（う）ヤッカイ

a　第三者がカイニュウして調停を行った。
b　台風の接近に備えて住民にケイカイを呼びかける。
c　深夜に聞いたカイダンが怖すぎて眠れなくなった。
d　敵軍の攻撃で部隊はカイメツ的な被害を受けた。
e　勉強を怠けたことをコウカイする。

（え）カンジン

a　予定通り計画をカンコウした。
b　不正行為をカンカすることは許されない。
c　どんな困難があっても自分の信念をカンテツする。
d　計画通りに任務をカンスイする。
e　健康管理には食生活の見直しがカンヨウだ。

（お）ユダン

a　この地域では地下からゲンユが採掘されている。
b　今日は実にユカイな一日だった。
c　先生が問題を起こした生徒を呼び出してセツユした。
d　政治家と企業のユチャクが問題視されている。
e　多くの命がユケツで救われている。

二　次の文章は、『うつほ物語』の一節である。この日、正頼（本文では「左大将」、「おとど」など）、兼雅（本文では「右大将」など）、仲忠（兼雅の子。本文では「宰相の中将」など）らは管弦の遊びを楽しんだ。本文はそれに続く場面で、仲忠が以前持っていた、女性からのものらしい手紙が話題になったところから始まる。これを読んで、後の問いに答えよ。

（正頼）「まこと、その日そこにやはかは*1に書きたる文の御懐より見えしを、せちに惜しまれしは誰がぞ。正頼そればかり見たまへまほしきものこそなかりしか。誰がぞ」とのたまへば、仲忠がいらへ、「あらず。里より要事のものしたまひしなり」。あるじのおとど、「いで、この空言なせられそ。なでふ里よりはさやうの御文は奉れたまはむ。心ばへあるべくこそ見えしか。いとしるかりきや」。仲忠うち笑ひて、「紙をこそはとりあへず侍りけめ。仲忠はさらにおひの世に空言をなむ知らずはべる」。おとど、「これを初めにて習ひたまふにこそはあめれ」などのたまへどいはず。

かく遊び暮らして、御前に馬槽*2立てて、御馬どもに秣飼はれなどするに、あるじのおとど、右大将の君に、馬の奉らまほしく思さるれば、張革*3立てさせたまひて、みな君だち御弓遊ばすほどに、中島なる五葉*4に雌鳩池より立ちて三寸ばかりの鮒*5を食ひて居りけるを、あるじのおとど、「かれ射たまへらむ人には、この西の馬槽の馬十匹ながら賭けむや」とのたまふ。右大将、「みな遊ばせ。兼雅も仕うまつらむや」とのたまふ。あるじのおとど、「待てしばし。見知らば当たらぬものゆゑ、鳥立ちなば興さめなむ。なほ労経*6し兵衛尉、まづ試みてむや」とて、あるじのおとど、右大将とまづ遊ばす。あるじのおとどは西の御厩にかしこくいたはり飼はせたまふ*7五尺の鹿毛、九寸の黒といひて名高き御馬二つ賭けたまひて、右大将殿は鷹屋に据ゑていと名高き御鷹二つ賭けたまひて、まづあるじのおとど遊ばす。これ御本意ありて、この馬奉らむの心にてのことなれば、殊に遊ばし当てむの心もなくて、ただ鳥立つまじばかりのほどに心して遊ばす。さらにも離れたり。右大将のおとど、おいらかに立ち走り遊ばすに、刺すがごとくに食ひたる魚ごめに射落として池に入りぬ。興ずること限りなし。駒迎へして御馬を賜はりたまふ。*8その御厩の別当、預かり二人、遊びて引かせて参る。

夜更けて、右大将のおとど、この賭物の九寸の黒を引きかさねて、遊びてまかでたまひて入りたまふ時に、仲忠、殿の御厩の別当、預かり、寄人*9、この馬を舞ひ遊びて、かの大将殿の御厩人の手より遊び取る。さてその御馬を引かせてぞ、参れる別当、預かりにになく饗したまひて、宰相の中将かはらけ取りて、になく強ひたまふ。

夜一夜その駒*10を遊び明かして、暁方に女の装束一領、白張一襲、袷の袴一具づつ賜ふ。被きて帰り参るに、この殿の御鷹二つ、殿の鷹飼に据ゑさせて、帰る御厩の人に添へて奉れたまふ。左大将殿は、「この御鷹は、今一度渡りたまひて、今一つの雌鳩落としてなむ賜はるべき」とて返したまふ。右大将、「兼雅は雌鳩を仕うまつり、そなたには中島のほどよりに遊ばししに、この御鷹は」とてなむ奉れたまふ。大将殿は、「情けなきやうなり。しひて奉れば」とて、殿の鷹飼*11、高麗の楽して、鷹ども遊び取りて、帰る鷹飼に、中将*12の君かはらけ取りて限りなく饗したまひて、細長*13添へたる女の装束一装賜ひて帰したまひつ。右大将、「情けはあくまでおはすかし」などのたまひて、北の方に左大将殿に参りてありつるやうなど、いとくはしく語り聞こえたまふ。

（『うつほ物語』内侍のかみ巻による）

注　＊1　まこと＝そういえば。　＊2　やはかは＝柔和なこと。　＊3　馬槽＝飼葉桶。　＊4　秣＝飼料。　＊5　張革＝ここでは弓の的のこと。　＊6　五葉＝松の一種。　＊7　雌鳩＝鳥の一種。　＊8　労経し兵衛尉＝兵衛は宿衛などの任務に当たる官。尉はその官位の一つ。ここは自らを卑下した言い方。　＊9　五尺の鹿毛、九寸の黒＝五尺は約一・五メートル。鹿毛は茶褐色の馬。九寸は四尺九寸の略。二頭ともに甲乙つけがたい名馬である。　＊10　その御厩の別当、預かり＝正頼の御厩の長官と次官。　＊11　寄人＝ここでは御厩の一般職員。　＊12　その駒＝神楽歌の曲名。　＊13　女の装束一領、白張一襲、袷の袴一具＝いずれも褒美として与えられた衣服。　＊14　高麗の楽＝朝鮮半島から伝わった雅楽。　＊15　中将の君＝正頼の三男。　＊16　細長＝貴族の衣服。これも褒美。

問1　正頼は仲忠の持っていた手紙について何と言ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　正頼は「そういえば、あの日の、懐から見えていた手紙、ひたすらに大事にしていたのは誰ですか。私はあれほど見たいと思ったものはありませんでした。一体どなたでしょうかね」と言った。

b　正頼は「そういえば、あの日の、懐から見えていた手紙、ひたすらに見せるのを渋っていたのは誰からのものですか。私はあれほど見たいと思ったものはありませんでした。一体誰からのものですか」と言った。

c　正頼は「そういえば、あの日の、懐から見えていた手紙、なくしたと悔しがっていたのは誰ですか。私はそれほど見たいとは思いませんでしたが。一体どなたでしょうかね」と言った。

d　正頼は「そういえば、あの日の、懐から見えていた手紙、ひたすらに見せるのを渋っていたのは誰ですか。私はそれほど見たいとは思いませんでしたが。一体どなたでしょうかね」と言った。

e　正頼は「そういえば、あの日の、懐から見えていた手紙、なくしたと悔しがっていたのは誰からのものですか。私はあれほど見たいと思ったものはありませんでした。一体誰からのものですか」と言った。

問2　手紙について問われた仲忠の答えとそれに対する正頼のやりとりとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　仲忠の答えは「いえいえ、そうではありません。実家へ大事なことを伝えるものでした」であった。これに対し正頼は「いやはや、そんな嘘をついてはいけません。どうしてご実家にあのような手紙を送るでしょうか。女性の心づかいがあるように見えましたよ。女性からの手紙だとはっきりしていましたよ」と言った。

b　仲忠の答えは「いえいえ、そうではありません。実家から大事なことを伝えてきたものです」であった。これに対し正頼は「いやはや、そんな嘘をついてはいけません。どうしてご実家からあのような手紙が来るでしょうか。あなたの心は見え見えです。女性からの手紙だとはっきりしていましたよ」と言った。

c　仲忠の答えは「いえいえ、そうではありません。実家へ大事なことを伝えるものでした」であった。これに対し正頼は「いやはや、そんな嘘をついてはいけません。どうしてご実家にあのような手紙を送るでしょうか。あなたの心は見え見えです。女性からの手紙だと知っているのですよ」と言った。

d　仲忠の答えは「いえいえ、そうではありません。実家から大事なことを伝えてきたものです」であった。これに対し正頼は「いやはや、そんな嘘をついてはいけません。どうしてご実家からあのような手紙が来るでしょうか。女性の心づかいがあるように見えましたよ。女性からの手紙だと知っているのですよ」と言った。

e　仲忠の答えは「いえいえ、そうではありません。実家から大事なことを伝えてきたものです」であった。これに対し正頼は「いやはや、そんな嘘をついてはいけません。どうしてご実家からあのような手紙が来るでしょうか。女性の心づかいがあるように見えましたよ。女性からの手紙だとはっきりしていましたよ」と言った。

問3　その後の二人のやりとりの様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　仲忠は笑いながら「紙は、何はさておき良いものでした。私は年老いるまで、嘘などつかずに生きていきます」と答えたところ、正頼は「このことを最初として、嘘を覚えなさってはどうですか」などとおっしゃるけれども、仲忠は何も言わずにいた。

b　仲忠は笑いながら「紙は、ありあわせのものを使ったのでしょう。私は生まれてこの方、嘘などまったくついたことはありません」と答えたところ、正頼は「このことを最初として、嘘を覚えなさるのでしょう」などとおっしゃるけれども、仲忠は何も言わずにいた。

c　仲忠は笑いながら「紙は、ありあわせのものを使ったのでしょう。私は年老いるまで、嘘などつかずに生きていきます」と答えたところ、正頼は「このことを最初として、嘘を覚えなさるのでしょう」などとおっしゃるけれども、仲忠は何も言わずにいた。

d　仲忠は笑いながら「紙は、ありあわせのものを使ったのでしょう。私は年老いるまで、嘘などつかずに生きていきます」と答えたところ、正頼は「このことを最初として、嘘を覚えなさってはどうですか」などとおっしゃるけれども、仲忠は何も言わずにいた。

e　仲忠は笑いながら「紙は、何はさておき良いものでした。私は生まれてこの方、嘘などまったくついたことはありません」と答えたところ、正頼は「このことを最初として、嘘を覚えなさるのでしょう」などとおっしゃるけれども、仲忠は何も言わずにいた。

問4　手紙に関するやりとりを終えた後の正頼たちの様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　こうして一日中遊んで過ごしていると、正頼は、兼雅に馬を献上したいとお思いになり、弓を競っているおりに、中島の松に池から飛び立った鳥が鮒をくわえているのをご覧になり、「鳥を射た方に馬を差し上げましょう」と賭けを提案した。そして兼雅は「さあ、みなさん、射ましょう。兼雅もやってみましょう」と言った。

b　こうして毎日遊んでいるうちに、正頼は、兼雅に馬を献上したいとお思いになり、弓を競っているおりに、中島の松に池から飛び立った鳥が鮒をくわえているのをご覧になり、「鳥を射た方に馬を差し上げましょう」と賭けを提案した。そして兼雅は「さあ、みなさん、当てられますか。兼雅もどうですか」と言った。

c　こうして毎日遊んでいるうちに、正頼は、兼雅に馬を献上したいとお思いになり、弓を競っているおりに、中島の松から池に飛び込んで捕まえた鮒を鳥がくわえているのをご覧になり、「鳥を射た方に馬を差し上げましょう」と賭けを提案した。そして兼雅は「さあ、みなさん、射ましょう。兼雅もやってみましょう」と言った。

d　こうして一日中遊んで過ごしていると、正頼は、兼雅に馬を献上したいとお思いになり、弓を競っているおりに、中島の松に池から飛び立った鳥が鮒をくわえているのをご覧になり、「鳥を射た方に馬を差し上げましょう」と賭けを提案した。そして兼雅に「さあ、みなさん、当てられますか。兼雅もどうですか」と言った。

e　こうして一日中遊んで過ごしていると、正頼は、兼雅に馬を献上したいとお思いになり、弓を競っているおりに、中島の松から池に飛び込んで捕まえた鮒を鳥がくわえているのをご覧になり、「鳥を射た方に馬を差し上げましょう」と賭けを提案した。そして兼雅は「さあ、みなさん、射ましょう。兼雅もやってみましょう」と言った。

問5　矢を射ようとした兼雅に正頼は何と言ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　正頼は「もう待ちきれません。鳥が気づいたら当たらないものです。鳥を射損ねてしまったら興ざめでしょう。年老いた私がまず試してみましょう」と言った。

b　正頼は「少しお待ちなさい。よくよく見てから射ないと当たらないものです。鳥が飛び立ってしまったら興ざめでしょう。年老いた私がまず試してみましょう」と言った。

c　正頼は「少しお待ちなさい。鳥が気づいたら当たらないものです。鳥が飛び立ってしまったら興ざめでしょう。年老いた私がまず試してみましょう」と言った。

d　正頼は「少しお待ちなさい。よくよく見てから射ないと当たらないものです。鳥を射損ねてしまったら興ざめでしょう。年老いた私がまず試してみましょう」と言った。

e　正頼は「もう待ちきれません。鳥が気づいたら当たらないものです。鳥が飛び立ってしまったら興ざめでしょう。年老いた私がまず試してみましょう」と言った。

問6　正頼と兼雅との勝負はどのような内容で、正頼はそれにどのように取り組んだか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　正頼は西の御厩で恐ろしい病から回復したばかりの有名な二頭の馬を賭け、兼雅は鷹屋で飼っている有名な二羽の鷹を賭けた。まず、正頼が矢を射られる。もうすぐ出家する予定があり、しかし、この馬を手離したくない心づもりなので、外そうとするお心もなく、それでも、鳥が飛び立たないよう心配りして射られる。矢は、あらぬ方に飛んでいった。

b　正頼は西の御厩で非常に大切に飼っていらっしゃる有名な二頭の馬を賭け、兼雅は鷹屋で飼っている有名な二羽の鷹を賭けた。まず、正頼が矢を射られる。もうすぐ出家する予定があり、また、この馬を差し上げようとの心づもりなので、特に当てようとするお心もなく、ただ、鳥が飛び立たないよう心配りして射られる。矢は、あらぬ方に飛んでいった。

c　正頼は西の御厩で非常に大切に飼っていらっしゃる有名な二頭の馬を賭け、兼雅は鷹屋で飼っている有名な二羽の鷹を賭けた。まず、正頼が矢を射られる。これにはお考えがあって、この馬を手離したくない心づもりなので、外そうとするお心もなく、それでも、鳥が飛び立たないよう心配りして射られる。矢は、あらぬ方に飛んでいった。

d　正頼は西の御厩で非常に大切に飼っていらっしゃる有名な二頭の馬を賭け、兼雅は鷹屋で飼っている有名な二羽の鷹を賭けた。まず、正頼が矢を射られる。これにはお考えがあって、この馬を差し上げようとの心づもりなので、特に当てようとするお心もなく、ただ、鳥が飛び立たないよう心配りして射られる。矢は、あらぬ方に飛んでいった。

e　正頼は西の御厩で恐ろしい病から回復したばかりの有名な二頭の馬を賭け、兼雅は鷹屋で飼っている有名な二羽の鷹を賭けた。まず、正頼が矢を射られる。これにはお考えがあって、この馬を差し上げようとの心づもりなので、特に当てようとするお心もなく、ただ、鳥が飛び立たないよう心配りして射られる。矢は、あらぬ方に飛んでいった。

問7　正頼との勝負に兼雅はどのように取り組んだか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　兼雅がゆったりと立ち上がり矢を射られると、突き刺すかのようにくわえた魚ごと射落として、鳥は池に落ちた。人々が面白がること限りがない。

b　兼雅が老練な様子で立ち上がり矢を射られると、突き刺すかのようにくわえた魚ごと射落として、鳥は池に落ちた。人々が面白がること限りがない。

c　兼雅が老練な様子で立ち上がり矢を射られると、突き刺すかのようにくわえた魚ごと射落として、鳥は池に落ちた。正頼がほめること限りがない。

d　兼雅がゆったりと立ち上がり矢を射られると、突き刺すかのようにくわえた魚ごと射落として、鳥は池に落ちた。正頼が驚くこと限りがない。

e　兼雅が貴族らしい様子で立ち上がり矢を射られると、突き刺すかのようにくわえた魚ごと射落として、鳥は池に落ちた。人々が驚くこと限りがない。

問8　夜が更けて兼雅や仲忠はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　兼雅は賭けて得た九寸の黒だけを引いて退出され、内裏に参上なさる時に、仲忠や兼雅の殿の御厩係の人々がこの馬を拝み、正頼の御厩係の人から受け取った。そして、その馬を連れて行かせてから、馬を連れてきた正頼の御厩係の人々を例がないほど丁重におもてなしになり、仲忠は酒器を取って何度も酒を振る舞われた。

b　兼雅は賭けて得た九寸の黒と五尺の鹿毛の両方を引いて退出され、自邸にお帰りになる時に、仲忠や兼雅の殿の御厩係の人々がこの馬を拝み、正頼の御厩係の人から受け取った。そして、その馬を連れて行かせてから、馬を連れてきた正頼の御厩係の人々をすばらしく丁重におもてなしになり、仲忠は酒器を取って少しだけ酒を振る舞われた。

c　兼雅は賭けて得た九寸の黒と五尺の鹿毛の両方を引いて退出され、自邸にお帰りになる時に、仲忠や兼雅の殿の御厩係の人々がこの馬を拝み、正頼の御厩係の人から受け取った。そして、その馬を連れて行かせてから、馬を連れてきた正頼の御厩係の人々をこの上なく丁重におもてなしになり、仲忠は酒器を取って何度も酒を振る舞われた。

d　兼雅は賭けて得た九寸の黒だけを引いて退出され、自邸にお帰りになる時に、仲忠や兼雅の殿の御厩係の人々がこの馬を拝み、正頼の御厩係の人から受け取った。そして、その馬を連れて行かせてから、馬を連れてきた正頼の御厩係の人々を似つかわしくないほど丁重におもてなしになり、仲忠は酒器を取って少しだけ酒を振る舞われた。

e　兼雅は賭けて得た九寸の黒だけを引いて退出され、内裏に参上なさる時に、仲忠や兼雅の殿の御厩係の人々がこの馬を拝み、正頼の御厩係の人から受け取った。そして、その馬を連れて行かせてから、馬を連れてきた正頼の御厩係の人々を比べるものもないほど丁重におもてなしになり、仲忠は酒器を取って少しだけ酒を振る舞われた。

問9　鷹を贈られた正頼と、贈った兼雅とのやりとりとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　正頼は「この鷹は、もう一度こちらにおいでになった時に、もう一羽の雌鳩を私が射落としてから頂きましょう」と言って兼雅に返された。兼雅は「私は雌鳩を射落としましたが、あなたは中島のあたりを狙ったのですから、この鷹は差し上げます」と言ってお贈りになる。正頼は「嘆かわしいことですね。無理に嘘をつくのは」と言って鷹を受け取り、兼雅の鷹飼をおもてなしになった。

b　正頼は「この鷹は、今度私がそちらにうかがった時に、もう一羽の雌鳩を私が射落としてから頂きましょう」と言って兼雅に返された。兼雅は「私は雌鳩を射落としましたが、あなたは中島のあたりを狙ったのですから、この鷹は差し上げます」と言ってお贈りになる。正頼は「してはいけないことですね。無理に嘘をつくのは」と言って鷹を受け取り、兼雅の鷹飼をおもてなしになった。

c　正頼は「この鷹は、一度そちらにお返しいたしまして、もう一羽の雌鳩を私が射落としてから頂きましょう」と言って兼雅に返された。兼雅は「私は雌鳩を射落としましたが、あなたは中島のあたりを狙ったのですから、この鷹は差し上げます」と言ってお贈りになる。正頼は「どうしようもありませんね。無理にお返ししては」と言って鷹を受け取り、兼雅の鷹飼をおもてなしになった。

d　正頼は「この鷹は、もう一度こちらにおいでになった時に、もう一羽の雌鳩を私が射落としてから頂きましょう」と言って兼雅に返された。兼雅は「私は雌鳩を射落としましたが、あなたは中島のあたりを狙ったのですから、この鷹は差し上げます」と言ってお贈りになる。正頼は「無粋なことですね。無理にお返ししては」と言って鷹を受け取り、兼雅の鷹飼をおもてなしになった。

e　正頼は「この鷹は、一度そちらにお返しいたしまして、もう一羽の雌鳩を私が射落としてから頂きましょう」と言って兼雅に返された。兼雅は「私は雌鳩を射落としましたが、あなたは中島のあたりを狙ったのですから、この鷹は差し上げます」と言ってお贈りになる。正頼は「迷惑なことですね。無理にお返ししては」と言って鷹を受け取り、兼雅の鷹飼をおもてなしになった。

問10　鷹飼をもてなされた兼雅はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　兼雅は「正頼さまはとても満足していらっしゃったようだ」などとおっしゃって、正頼邸に参上して起きた出来事などを、娘にとても詳しく語った。

b　兼雅は「正頼さまはどこまでも思いやりのあるお方だ」などとおっしゃって、正頼邸に参上して起きた出来事などを、娘にとても詳しく語った。

c　兼雅は「正頼さまはとても満足していらっしゃったようだ」などとおっしゃって、正頼邸に参上して起きた出来事などを、妻にとても詳しく語った。

d　兼雅は「正頼さまはどこまでも思いやりのあるお方だ」などとおっしゃって、正頼邸に参上して起きた出来事などを、妻にとても詳しく語った。

e　兼雅は「正頼さまはこちらが恥ずかしくなるほど思いやりのあるお方だ」などとおっしゃって、正頼邸に参上して起きた出来事などを、娘にとても詳しく語った。

（以上）

入学試験問題

国　語

注　意　事　項

Ⅰ　試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。
Ⅱ　解答用紙はすべて黒鉛筆(ＨＢ)〈シャープペンシルは，ＨＢ 0.5 mm 以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
Ⅲ　解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し，切取線から切り離してください。
Ⅳ　試験時間は75分です。
Ⅴ　問題は26ページで大問2問です。

マーク記入上の注意

1．解答欄にマークするときは，ＨＢの黒鉛筆で次の正しい例のように，濃く正確にぬりつぶしてください。
2．マークのしかた
(ア) 正しい例
a　解答が1つの場合，例えばイと解答するときは　(1) ア ● ウ エ オ　のように，マークしてください。
b　解答が2つの場合，例えばイとウと解答するときは　(1) ア ● ● エ オ / ア ● ● エ オ　または　(1) ア ● ● エ オ / ア ● ● エ オ　のように各1つずつマークしてください。
(イ) 悪い例
(1) ア ⓘ ● エ オ　○印でかこむ。
(2) ア ● エ オ　全部をぬりつぶしていない。
(3) ア ✓ ● エ オ　レ印をつける。
(4) ア | ● エ オ　｜印をつける。
(5) ア ● ● エ オ　1欄に2つ以上マークする。
　このような記入をしてはいけません。
3．一度記入したマークを訂正する場合は，消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。
(1) ア ● ■ エ オ　のように×印をしても消したことにはなりません。
4．解答用紙を折り曲げたり，破ったり，また汚したりしないでください。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

科学と科学者への失望

現代科学は、地震を予知できず、台風や豪雨を止められず、環境問題を引き起こした。科学は頼りにならないどころか、人類に災いさえ招いているではないか、科学はもうたくさん、と考える人が増えてきた。多くの人々が現代科学の粋を満喫し、科学のおかげで安楽な生活を送っているにもかかわらず、反科学の気分が強くなっているのである。科学がもたらした光の部分は当然としながら、影の部分には強く反撥(はんぱつ)するという一種のトウサク(あ)した気分に陥っているのは確かだろう。さらに、現代の科学で理解が可能な部分と不可能な部分があるのだが、それを区別せず、ひとしなみに否定する傾向もある。

実際、科学がもたらした影の部分は大きい。核兵器のような大量殺戮(さつりく)兵器は言うに及ばず、生活を便利で効率的にするはずの道具が人を殺す道具に転化し、薬害や化学物質汚染など科学に起因する事故が頻発しており、その被害規模も大きくなっている。さらに、放射性廃棄物のようなさまざまな負の遺産を子孫たちに残そうとしている。このまま科学をどんどん発達させれば、とんでもないことが起こるかもしれないと不安になっているのである。科学を否定するポーズをとる方がカッコ良く見えるという社会の雰囲気があるのは事実だろう。

これに対し、科学者は責任を感じているようには見えない。それどころか、いかにも全てを知っているかのように振る舞い、私たち一般人を見下している(ように感じてしまう)。良いところだけ宣伝してお墨付きを与えながら、何か都合が悪いところが出てくるととたんに黙ってしまう。御用学者になって政府の思いのままに操られていても責任を自覚していない。科学者なんて信用できない、というわけである。

実は、科学の成果は社会の選択を経て世の中に出ているのだから、それが何らかの災厄を引き起こしたとき、科学者以外の人々にも責任の一半があることが忘れられている。誰かを犯人に仕立て上げてしまうと、自分の関与についていっさい感じなくなっているのは現代人の特徴かもしれない。自分を安全な立場において一方的に科学批判だけをする態度は、社会と科学の関係を危ういものにする懸念があるのではないだろうか。

アメリカで*1永久機関を売っている話を前の章でしたが、彼らは「科学者の鼻をあかしたい」と異口同音に述べるそうだ。現場も見ずに尊大な態度で法則を持ち出して簡単に否定してしまう(事実否定せざるを得ないのだが)、そんな科学者の傲慢さに強く反撥しているのである。科学者は一般にナンセンスを見ると実に冷たい。事を分けてコンセツ(い)に対応し、根気よく間違いを正していく態度が科学者に欠けているのである。

科学や科学者への批判や反撥は真摯に受け止める必要がある。それが人々を*2疑似科学に走らせるきっかけとなっていることは否めないからだ。むろん、すべての批判が正しいわけでなく、反批判を加えなければならないこともある。そのような場合、対処の仕方を工夫することだ。また、科学者は専門を外れると一般人と何ら変わらないのだから、市民と一緒に対応しなければならない問題も多い。科学者も一般市民と同じ目線で生きるべきなのだ。科学主義への失望を放置しておくと重大な過誤を招きかねない。口当たりのよい疑似科学が科学の代用になってしまう恐れがあるからだ。

すべて「お任せ」の態度

世の中が便利になったということは、私たちが自らの手を汚す(手を煩わせる)ことなくさまざまな物が手に入るということを意味する。電気は地域の電力会社に、ガスはガス会社に、水道やゴミの処理は地方自治体に、というふうにライフラインはすべて企業や自治体に「お任せ」にしてしまった。その方が経済システムとして効率的であり、設備投資も安く上がるためである。消費者側としても楽になった。故障すればコールセンターに文句を言うだけで済むし、問題がなければもはや気に掛ける必要がないからだ。

クレジットカード、ＩＣカード、消費者金融のカード、銀行のマネーカードなど、金銭の授受をカードで済ませることも多くなった。ローンや公共料金の支払いも銀行振込になり、実に手軽である。これらも「お任せ」の一種で、電子取引が可能になったおかげで、現金を持ち歩かなくても決済ができる。銀行がごまかしているとか、ローンの支払い期限が過ぎたのに払い続けてい

る、なんてことは考えもしない。信用して「お任せ」すれば、細かなことには煩わされずに済むのが普通になっている。このように、私たちには「お任せ」の体質が染み込んでしまった。それは社会の信頼度が増したことを意味するのだが（銀行を信用せず、タンス預金をしたり金塊を地下に隠したりすることは少なくなった）、それが及ぼしている(3)ヘイガイも多くなっていることに注意すべきだろう。

情報を得るにしても「お任せ」の態度ではないだろうか。テレビや新聞、そして今やインターネットから情報を得ることが多くなっている。しかし、果たしてその情報が正しいと言えるのだろうか。むろん、私たちは独力ですべての情報を収集して真偽を確かめることができないから、それらのメディアに頼らざるを得ない。であるからこそ、いっそうメディアの言うことは眉に唾をつけて受け取らねばならないのだ。複数のメディアを比較したり、メディアでは報じられない事実を探ったりする努力が必要なのである。

ところが、テレビが言っていたことをそのまま信じ込んだり、誰もがそう言っているからという理由だけで信用してしまったりする。（納豆がダイエットに効くとテレビが報道したために、スーパーの納豆が売り切れてしまったという事件が典型的だろう。）そのためか、政治が劇場型になり、政治家はテレビを活用して人々の耳目を惹きつけることに長けるようになった。

人々も観客民主主義に陥り、自分は参加せず、他人のパフォーマンスを観覧して無責任な批判をすることのみに終始する。つまり「お任せ」し続けていると、自分で考えることを忘れ、見かけの姿だけで判断するようになってしまうのだ。その結果、科学の装いをした疑似科学に手もなく騙されてしまう。あるいは、一方的な情報を信じることが習い性になって、疑似宗教を疑うことなく盲信してしまう。そんな状況が生まれているのだ。

最近、親の小中学校への見方も変わりつつあると言われる。家庭ですべき躾や日常生活で獲得すべき知恵も、全て学校で教えることを要求する親が増えているようなのだ。教育の「お任せ」化である。果ては、親の勝手な都合を先生に押し付けて平然としているらしい。それでは先生の身体がいくつあっても足りないだろう。事実、家庭からの無理難題に耐えられず心身のバランスを崩す先生が続出している。普通、学校と地域と家庭が力を合わせて子どもを見守らないと教育効果が上がらないと言われる。

しかし、地域は都会化の進行で分断されて機能しなくなり、今や家庭も学校に「お任せ」してしまう体質になって、学校だけが教育の場になってしまった。それでは学校も悲鳴をあげるしかない。

つまり、「お任せ」がはびこると、自分の責任を棚にあげて他に転嫁することが当たり前になって、当事者意識が希薄になってしまうのだ。要求だけして自分は何もしないことになってしまう。「自己責任」の時代と言われながら、実際は逆の事態が進行しているのである。*3先の「水からの伝言」教育に異議を唱える親が数えるほどしかいなかったことも深刻に捉えなければならない。「お任せ」していると、知らぬうちに疑似科学に蚕食されていくのである。

技術による道徳の代行

道徳的な価値観を科学で表現されると簡単に受け入れるという傾向もある。その一例として、科学と道徳との親和性と安易な利用の問題点を指摘しておきたい。道徳というとなんとなく重い感じがするし、それを面と向かって言うのも憚られる。いかにも四角四面の人間と思われたくないからだ。だから、そのような道徳意識を科学が身代わりしてくれると飛びついてしまう。誰も否定できない科学が道徳の代行をしてくれると思い込むのである。典型的には「水からの伝言」のように、子どもに優しい気持を持たせたいと思う気持が利用される。昔なら、「ウソをつくと地獄で鬼に舌を抜かれるぞ」と脅されたが、もはやそんなことを子どもは信じなくなったので新しい手が考え出されたとも言えよう。

少し違った意味で、道徳への技術の適用が盛んになっていることにも注意しておきたい。心の問題として親子の対話や日常生活の中で道徳を自然に学ぶのではなく、技術の力によって見かけ上道徳を守っている状態とする（ときには強要する）ようになったことである。

例えば、電車に乗れば携帯電話をマナーモードにすることが推奨される。スイッチを切るのではなく、音が出ないだけで受信可能な状態にするのだ。マナーとして道徳心のハッキ(24)を求めており、乗客の多くもそれに従っている。それはそれで良いことのように見えるが、道徳を〈マナーモードという〉技術によって代行させる事態が進行しているとも言える。道徳を人間関係のなかで身につけていくのではなく、技術力によって遵守させようとするのだ。

心臓にペースメーカーを付けている人にとっては、携帯電話からの電波は命取り*4になりかねない。ならば、本来のマナーとしては、スイッチを切ることを要求しなければならない。さらに、発信している携帯電話が二二センチ以内に近づくとペースメーカーを狂わせる場合があることを周知する必要がある。それによって自主的にスイッチを切ることが本来の道徳である。ところが、携帯電話が持つ危険性を知らせないまま、小手先の技術で道徳を実践させようとしているのだ。

この類の、道徳を代行してくれる技術はこれからも数多く開発されていくだろう。すでに、トイレ使用後に流れる(25)センジョウ水、自動的に水の止まる蛇口、人を察知すれば点灯する照明、携帯電話を使えなくする音楽ホール、自動消火するガスコンロなど、実に多くの製品が出回っている。それらは、本来人間の手で操作していたのだが、汚したり、つけっぱなしにしたり、事故を起こしたりしたものだから、技術によって代行しようというわけだ。

便利にはなったのは事実だが、「お任せ」体質がはびこり人間はますます横着になっていくことも確実である。横着とは結果を考えなくなることを意味し、科学とも縁遠くなっていくことを意味するのだ。このことは疑似科学とは無縁のようだが、疑似科学が入り込む余地を大きくしていることは事実だろう。

（池内了『疑似科学入門』による　※一部本文を改めた箇所がある）

注　＊1　永久機関＝永久に運動を続ける機械や装置。古来、その実現が工夫されてきたが、現在では、その実現は不可能であることが証明されている。　＊2　疑似科学＝ここでは「非合理な事柄を科学的であると見せかけて人々を欺くような言説」のことをいう。　＊3　先の「水からの伝言」教育＝学校教育で、冷蔵庫で氷を作るのに、「ありがとう」と感謝の気持ちで水を冷蔵庫に入れると美しい形の結晶となり、「バカやろう」などの相手を罵倒する気持ちで氷を作ると不揃いのものしかできない、といって優しい気持ちをもつことを指導する方法。科学的根拠のないことを道徳に用いることに対して、前の章で、筆者は否定的な見解を示している。　＊4　命取りになりかねない＝携帯電話が、心臓ペースメーカーに影響を与えるという考え方によるもの。

問1　現代科学に対する社会の傾向について、筆者はどのように見ているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　社会の傾向として、現代科学は、災害を止めることができないだけでなく、災いさえもたらしているので、科学は信用できないと考える人が増えてきたと見ている。

b　社会の傾向として、多くの人々は現代科学のおかげで安楽な生活を送っているにもかかわらず、現代の科学で理解が不可能な部分については、科学を否定する傾向があると見ている。

c　社会の傾向として、科学のもたらした安楽な生活は当然のように受け止めながら、影の部分に対しては強く反撥するというトウサクした気分に陥っていると見ている。

d　社会の傾向として、現代科学で理解可能な部分は受け入れるにもかかわらず、不可能な部分があることによって科学を否定してしまうこともあると見ている。

e　社会の傾向として、科学を否定するポーズをとる方がカッコ良く見えるという理由だけで科学を否定する人々が増えてきていると見ている。

問2　科学者の責任感について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　科学者は、いかにも全てを知っているかのように振る舞い、一般人を見下しているように見え、科学がもたらした影の部分については責任を感じているようには見えないと述べている。

b　科学者は、ナンセンスなことに対して、現場も見ずに尊大な態度で法則を持ち出して簡単に否定してしまうが、そんな傲慢な態度は、根気よく間違いを正していく責任を放棄しているように見えると述べている。

c　科学者は専門を外れると一般人と何ら変わらないのだから、市民と一緒に対応しなければならない問題も多く、同じ目線で生きるべきであるにもかかわらず、その責任を無視しているように見えると述べている。

d　科学者は、ナンセンスなことに対して実に冷たく、根気よく間違いを正していく態度に欠けていることが、人々を疑似科学に走らせることにつながっており、そのことに対する責任を取ろうとしないように見えると述べている。

e　科学者は、良いところだけ宣伝しておいてお墨付きを与えながら、何か都合が悪いところが出てくるとたんに黙ってしまうことが、重大な過誤を招いているにもかかわらず、何の責任も自覚していないように見えると述べている。

問3　科学者以外の人の責任をめぐる問題について、筆者はどのように考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　科学の成果は社会の選択を経て世の中に出ているのだから、それが何らかの災厄を引き起こしたとき、科学者以外の人々にも責任の一半があることが忘れられている。自分の関与についていっさい感じなくなっているという、現代人の特徴を生むきっかけになっていると考えている。

b　科学の成果は社会の選択を経て世の中に出ているのだから、それが何らかの災厄を引き起こしたとき、科学者以外の人々にも責任の一半があることが忘れられている。科学を一方的に批判だけしていては、社会と科学の関係を危ういものにしかねないと考えている。

c　科学の成果は社会の選択を経て世の中に出ているのだから、それが何らかの災厄を引き起こしたとき、科学者以外の人々にも責任の一半があることが忘れられている。科学を否定するポーズをとることで、自分の責任を棚にあげて放棄していると考えている。

d　科学の成果は社会の選択を経て世の中に出ているのだから、それが何らかの災厄を引き起こしたとき、科学者以外の人々にも責任の一半があることが忘れられている。科学者が御用学者になることに対しても、その責任の一半は科学者以外の人々にもあるのに、そのことを自覚していないと考えている。

e　科学の成果は社会の選択を経て世の中に出ているのだから、それが何らかの災厄を引き起こしたとき、科学者以外の人々にも責任の一半があることが忘れられている。科学や科学者への批判や反撥には真摯に向き合うべきであるのに、その責任を自覚していないと考えている。

問4　世の中が便利になったことについて、筆者はどのように考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　電気は電力会社に、ガスはガス会社に、水道やゴミの処理は地方自治体に、というふうにライフラインはすべて企業や自治体に「お任せ」することは、経済システムとして効率的であり、問題がなければ気に掛ける必要もなくなった。これによって、私たちは自らの手を汚すことなく、何でも手に入れることができるようになったが、その反面、故障が起これば、文句を言うだけでは済まなくなったと考えている。

b　電気は電力会社に、ガスはガス会社に、水道やゴミの処理は地方自治体に、というふうにライフラインはすべて企業や自治体に「お任せ」することは、経済システムとして効率的であり、問題がなければ気に掛ける必要もなくなった。これによって、私たちは、消費者側として楽になったが、その反面、自らの手を煩わせることなくさまざまな物が手に入るようになったことで、それを実現する社会のコストが高くなったと考えている。

c　クレジットカード、ICカード、消費者金融のカード、銀行のマネーカードなど、金銭の授受をカードで済ませることも多くなり、銀行がごまかしているとか、ローンの支払い期限が過ぎたのに払い続けている、なんてことは考えもしなくなった。これによって、私たちは、現金を持ち歩かなくても決済ができるようになったが、細かなことには煩わされないためには「信用」が必要になったと考えている。

d　クレジットカード、ICカード、消費者金融のカード、銀行のマネーカードなど、金銭の授受をカードで済ませることも多くなり、銀行がごまかしているとか、ローンの支払い期限が過ぎたのに払い続けている、なんてことは考えもしなくなった。これによって、私たちは、信用して「お任せ」すれば、細かなことには煩わされずに済むようになった。これは社会の信頼度が増したことを意味するが、一方でそれが及ぼしているヘイガイも多くなっていると考えている。

e　情報を得るにしてもテレビや新聞、そして今やインターネットから情報を得ることが多くなった。しかし、私たちは、独力ですべての情報を収集して真偽を確かめることができないから、いっそうメディアの言うことには眉に唾をつけて受け取るようになり、複数のメディアを比較したり、メディアでは報じられない事実を探ったりする努力をするようになったと考えている。

問5　すべて「お任せ」の態度が、どのような結果につながると、筆者は述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　情報を得る場合、私たちが独力で収集した情報よりも、テレビが言っていたことをそのまま信じ込んだり、誰もがそう言っているからという理由だけで信用してしまったりするようになると述べている。

b　政治家はテレビを活用して人々の耳目を惹きつけることに長けるようになり、自分は参加せず、他人のパフォーマンスを観覧して無責任な批判をすることのみに終始するような劇場型の観客民主主義の政治家ばかりとなると述べている。

c　家庭ですべき躾や日常生活で獲得すべき知恵も、全て学校で教えることを要求し、親の勝手な都合を先生に押し付けて平然としている親が増えることで、学校における教育効果が上がらなくなると述べている。

d　自分で考えることを忘れ、見かけの姿だけで判断するようになり、科学の装いをした疑似科学に手もなく騙されたり、一方的な情報を信じることが習い性になったりして、疑似宗教を疑うことなく盲信してしまうようになると述べている。

e　自分の責任を棚に上げて他に転嫁することが当たり前になり、要求だけして自分は何もしないことになってしまい、「自己責任」の時代とは逆の事態が進行して、「水からの伝言」教育が批判の対象となると述べている。

問6　道徳と科学について、筆者はどのように指摘しているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　科学と道徳の親和性により、誰も否定できない科学が道徳を代行してくれると思い込み、科学を道徳と同一視する傾向があると指摘している。

b　親子の対話や日常生活の中で道徳を自然に学ぶのではなく、技術力によって見かけ上道徳を守っている状態を作り出すことで、道徳を科学に利用していると指摘している。

c　科学を利用して道徳的な価値を受け入れやすくしたり、技術力によって道徳を遵守させようとしたりするような、安易に科学や技術を利用しようとする傾向があると指摘している。

d　科学と道徳の親和性を利用することよりも、道徳への技術の適用が盛んになり、技術によって見かけ上道徳を守っている状態とする傾向があると指摘している。

e　道徳を代行してくれる技術が向上したため、科学によって道徳を日常生活の中で自然に学ぶことをしなくなってきたと指摘している。

問7　道徳を代行する技術の進化と「お任せ」の態度について、筆者はどのように考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　道徳を代行する技術によって、見かけ上道徳を守っている状態になると、「お任せ」の体質がはびこり、その結果、心の問題として親子の対話や日常生活の中で自然に学ぶ道徳も見かけ上だけのものとなり、疑似科学が入り込む余地が大きくなってくると考えている。

b　道徳を代行する技術によって、道徳を人間関係のなかで身につけていくのではなくなると、「お任せ」の体質がはびこり、技術力によってマナーとしての道徳心をハッキすることが求められるようになり、疑似科学が入り込む余地が大きくなってくると考えている。

c　道徳を代行する技術によって、小手先の技術で道徳を実践させるようになると、「お任せ」の体質がはびこり、誰も否定できない科学が道徳の代行をしてくれると思い込み、技術によって見かけ上道徳を守っているつもりになることで、疑似科学が入り込む余地が大きくなってくると考えている。

d　道徳を代行する技術によって、本来人間の手で操作していたものがなくなると、「お任せ」の体質がはびこり、道徳への技術の適用によって道徳的な価値を科学が代行しているという意識が薄れてきて、疑似科学が入り込む余地が大きくなってくると考えている。

e　道徳を代行する技術によって、世の中が便利になる一方、「お任せ」の体質がはびこり人間はますます横着になる。それは、人間が結果を考えなくなることであり、ひいては科学とも縁遠くなることによって、疑似科学が入り込む余地が大きくなってくると考えている。

問8　二重傍線部㋐㋑㋒㋓㋔㋕のカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

㋐　トウサク

a　つまらないサクリャクをめぐらして失敗する。
b　行き詰まりの打開方法をアンチュウモサクする。
c　光と影がコウサクする幻想的な水族館。
d　大豆をアッサクして大豆油をとる。
e　二酸化炭素の排出量をサクゲンする取り組み。

㋑　コンセツ

a　お金を貸してほしいと友人にコンガンする。
b　ショウコンたくましく積極的に売り込む。
c　世界情勢がますますコンメイを深めている。
d　将来にカコンをのこさないように万全を期す。
e　カイコンの念に駆られて警察に自首して出る。

㋒　ヘイガイ

a　大手のメーカーが中小の会社をヘイゴウする。
b　時代のヘイソクした状況を打破する。
c　二十年ぶりにシヘイが刷新される。
d　赤字続きで国の財政がヒヘイする。
e　仕事や給料へのフヘイをあれこれとならべる。

㋓　ハッキ

a　キハツユは火がつきやすいので取り扱いに注意が必要だ。
b　真理と平和をキキュウする人間を育成する。
c　株のトウキ的な取り引きはリスクが大きい。
d　おおいにフンキして試験勉強をはじめる。
e　所定の期間内にセイキの手続きを行う。

㋔　センジョウ

a　国土の一部を隣国にカツジョウする条約を結ぶ。
b　露天風呂の快適さはゴクラクジョウドにいるようだ。
c　水分は温められるとジョウハツする。
d　倉庫に残っているヨジョウな在庫を処分する。
e　隠していた事実をハクジョウする。

二　次の文章は、『落窪物語』の一節である。女君（本文では「女君」「君」）と少将とは、ともに一夜を明かし、少将はそのまま女君の部屋にいた。以下の文章を読んで、後の問いに答えよ。

かうて昼まで二所臥いたまへるほどに、例はさしものぞきたまはぬ北の方、*1中隔ての障子をあけたまふに、かたければ、「これあけよ」とのたまふに、*2あこぎも君も、「いかにせむ」とわびたまへば、「さはれ、あけたまへ。几帳あげて、のぞきたまへらば、物引きかづきて臥いたらむ」とのたまへば、さしもこそのぞきたまへと、わりなけれど、やるべきかたもなければ、几帳づらにおし寄せて、女君居たまへり。北の方、「などおそくはあけつるぞ」と問ひたまへば、*3あが君、「なほあけよ」とて、あけさすれば、荒らかにおしあけて、入りまして、ついゐて見れば、例ならず清げにしつらひて、几帳立て、君もいとをかしげにとりつくろひて、大方の香もいと香ばしければ、あやしくなりて、「などここのさまも見様も例ならぬ。もし我なかりつるほどに事やありつる」とのたまへば、面うち赤みて、「何事か侍らむ」といらへたまふ。少将、いかがあると、ゆかしうて、几帳のほころびより、臥しながら見たまへば、白き綾、*4掻練など、よからねど、かさね着て、面平らかにて、北の方と見えたり。口つき愛敬づきて、少しにほひたる気つきたり。清げなりけり。ただ眉のほどにぞ、*5およずけ、あしげさも少し出でゐたりと見る。

「参りたるやうは、今日ここに買ひたる鏡のをかしげなるに、この御箱入りぬべく見えし、「しばし賜へ」と聞こえむ、とてなむ」、「ようはべなり」とのたまへば、「かう心やすくものしたまへば、いとよくなむ。さは賜へ」とて、引き寄せたてまつりたまへり。うち移して、我持たまへる、入れたまへり。げに入りたれば、「かしこき物をも、買ひてけるかな。この箱のやうに今の世の蒔絵こそ、さらに、かくせね」とて、かきなでたまへば、あこぎ、いと憎しと見て、「この御鏡の箱もなくてや」と言へば、「今また求めて奉らむ」とて、立ちたまふ。いと心ゆきたるさまにて、「かの几帳はいづこのぞ。いと清げなり。例に似ぬ物もあり。なほけしきづいたり」とのたまへば、女君、いかに聞くらむと恥づかし。「なくてあしければ、取りにやりはべる」と聞こゆ。なほけしきを疑はしく思ひたまふ。

往ぬる後に、あこぎ、「まめやかにはをかしくこそはべれ。奉りたまはむとこそ、なからめ、持たせたまへる御調度、かくのみ取らせたまへるよ。さきざきの御婿どりには、「しかへて。ただしばし」と屏風よりはじめて取りたまひて、ただ我物の具のやうにて、立て散らしておはします。*7御盒器をだに聞こえ取りたまひてき。今、*8殿にも、率てまうで来なむ。この御方の物は、ただ見るままに、御方々の物にのみなり果てぬ。かく心ひろくおはしませども、人の御志やは見ゆる」と腹立ちゐたれば、女君をかしくて、「さはれ、いづれもいづれも、用果てなば賜びてむ」といらふれば、まことと聞きたまひ、几帳おしやりて出でて、女君引き入れて、「まだ若うものしたまひけるは。女どもはこれにや似たる」とのたまへば、「さもあらず。皆をかしげになむおはしあふめる。あやしう、見苦しうても見たまへるかな。聞きつけていかにのたまはむ」と言ふ。

（『落窪物語』による）

注　*1　北の方＝女君の継母。北の方には実の娘が四人いる。　*2　あこぎ＝女君の侍女。　*3　あが君＝ここでは女君のこと。　*4　掻練＝練って柔らかくした紅色の絹織物。　*5　およずけ＝年寄りじみて。　*6　蒔絵＝漆を塗った器の表面に金粉などで模様を施したもの。　*7　御盒器＝蓋付きの器。ここは食器のこと。　*8　殿＝女君の父。

問1　昼まで女君と少将が部屋にいた時、どのようなことが起きたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　いつもはそれほど様子を見に来ない北の方が部屋にやって来て、障子を開けようとしたが、なかなか開かないので、「障子を開けよ」とおっしゃる。あこぎも女君も「どうしよう」と当惑なさっていると、「かまいません、お開けなさい。几帳をあげてお覗きになったら、着物をかぶって横になっていよう」と、少将はおっしゃった。

b　いつもはそれほど様子を見に来ない北の方が部屋にやって来て、障子を開けようとしたが、なかなか開かないので、「障子を開けよ」とおっしゃる。あこぎも女君も「どうしよう」と当惑なさっていると、「さあさあ、お開けなさい。几帳をあげてどんな様子か見ましょう、着物をかぶって寝ていらっしゃるのでしょう」と、北の方はおっしゃった。

c　いつもは物陰から様子を見るだけだった北の方が部屋にやって来て、障子を開けようとしたが、なかなか開かないので、「障子を開けよ」とおっしゃる。あこぎも女君も「どうしよう」と当惑なさっていると、「せっかくなのだから、お開けなさい。几帳をあげてお覗きになったら、着物をかぶって横になっていよう」と、少将はおっしゃった。

d　いつもは物陰から様子を見るだけだった北の方が部屋にやって来て、障子を開けようとしたが、なかなか開かないので、「障子を開けよ」とおっしゃる。あこぎも女君も「どうしてもできません」とお謝りなさると、「さっさと、お開けなさい。几帳をあげてどんな様子か見ましょう、着物をかぶって寝ていらっしゃるのでしょう」と、北の方はおっしゃった。

e　いつもは少しも様子を見に来ない北の方が部屋にやって来て、障子を開けようとしたが、なかなか開かないので、「障子を開けよ」とおっしゃる。あこぎも女君も「どうしてもできません」とお謝りなさると、「とにかく、お開けなさい。几帳をあげてどんな様子か見ましょう、着物をかぶって寝ていらっしゃるのでしょう」と、北の方はおっしゃった。

問2　障子を開けるよう言われた女君とあこぎはどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「きっとお覗きになる」と、二人とも困惑するけれども、どうすることもできないので、少将を隠そうと女君は几帳のそばに体を寄せて座っていらっしゃった。北の方が「どうして昼まで開けないでいるのか」と問われるので、「今日と明日とは物忌みでございます」とあこぎが答えると、「まあ、おおげさな。どうして自分の家なんかで、物忌みがあるのですか」とおっしゃるので、「開けましょう」と、女君はあこぎに開けさせた。

b　「きっとお覗きになる」と、二人とも困惑するけれども、どうすることもできないので、少将を隠そうと女君は几帳のそばに体を寄せて座っていらっしゃった。北の方が「どうして昼まで開けないでいるのか」と問われるので、「今日と明日とは物忌みでございます」と女君が答えると、「まあ、おおげさな。どうして自分の家でもないところで、物忌みがあるのですか」とおっしゃるので、「開けなさい」と、女君はあこぎに開けさせた。

c　「まさか本当にお覗きになることはないだろう」と、二人とも動揺するけれども、どうすることもできないので、少将を隠そうと女君は几帳のそばに体を寄せて座っていらっしゃった。北の方が「どうして昼まで開けないでいるのか」と問われるので、「今日と明日とは物忌みでございます」と女君が答えると、「まあ、おおげさな。どうして自分の家でもないところで、物忌みがあるのですか」とおっしゃるので、「開けなさい」と、女君はあこぎに開けさせた。

d　「きっとお覗きになる」と、二人とも困惑するけれども、どうすることもできないので、少将を隠そうと女君は几帳のそばに体を寄せて座っていらっしゃった。北の方が「どうしてなかなか開けないのか」と問われるので、「今日と明日とは物忌みでございます」とあこぎが答えると、「まあ、おおげさな。どうして自分の家でもないところで、物忌みがあるのですか」とおっしゃるので、「開けなさい」と、女君はあこぎに開けさせた。

e　「まさか本当にお覗きになることはないだろう」と、二人とも動揺するけれども、どうすることもできないので、少将を隠そうと女君は几帳のそばに体を寄せて座っていらっしゃった。北の方が「どうしてなかなか開けないのか」と問われるので、「今日と明日とは物忌みでございます」とあこぎが答えると、「まあ、おおげさな。どうして自分の家なんかで、物忌みがあるのですか」とおっしゃるので、「開けなさい」と、女君はあこぎに開けさせた。

問3　部屋に入って来た北の方はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　北の方は膝をついて座り、部屋を見回してみると、いつになくきれいに片付けて、几帳も立ててあり、女君も何事もなかったかのように装っていて、部屋全体のお香もよくかおっているので、疑わしくなって、「どうしてここの様子もあなたの身なりもいつもと違うのです。もしも私がいなかったら、何かしようとしていたのですか」とおっしゃる。

b　北の方は膝をついて座り、部屋を見回してみると、見たこともない美しい着物を新調して、几帳も立ててあり、女君も何事もなかったかのように装っていて、部屋全体のお香もよくかおっているので、不審に思って、「どうしてここの様子もあなたの身なりもいつもと違うのです。もしも私がいなかったら、何かしようとしていたのですか」とおっしゃる。

c　北の方は膝をついて座り、部屋を見回してみると、いつになくきれいに片付けて、几帳も立ててあり、女君もとても美しく着飾っていて、部屋全体のお香もよくかおっているので、不思議に思って、「どうしてここの様子もあなたの身なりもいつもと違うのです。もしや私がいない間に、何かあったのですか」とおっしゃる。

d　北の方は膝をついて座り、部屋を見回してみると、見たこともない美しい着物を新調して、几帳も立ててあり、女君も何事もなかったかのように装っていて、部屋全体のお香もよくかおっているので、けしからんと思って、「どうしてここの様子もあなたの身なりもいつもと違うのです。もしや私がいない間に、何かあったのですか」とおっしゃる。

e　北の方は膝をついて座り、部屋を見回してみると、いつになくきれいに片付けて、几帳も立ててあり、女君もとても美しく着飾っていて、部屋全体のお香もよくかおっているので、不安になって、「どうしてここの様子もあなたの身なりもいつもと違うのです。もしも私がいなかったら、何かしようとしていたのですか」とおっしゃる。

問4　少将は北の方についてどう思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　少将は「北の方のご機嫌はどうなのだろう」と知りたくて、几帳の隙間からご覧になると、白地の綾織物や紅色の練った絹織物など、上等なものではないが、それらを重ね着して、顔は平凡で、これがあのうわさに聞く北の方かと思われた。話し方には愛想があり、気品のある様子もあった。ただどうも、眉のあたりに老いた感じがあるが、悪くはない雰囲気が出ていると思った。

b　少将は「北の方の雰囲気はどうなのだろう」と知りたくて、几帳の隙間からご覧になると、白地の綾織物や紅色の練った絹織物など、悪いものではないが、それらを重ね着して、顔は平たくて、これがあのうわさに聞く北の方かと思われた。口元には魅力があり、気品のある様子もあった。ただどうも、眉のあたりに老いた感じがあるが、悪くはない雰囲気が出ていると思った。

c　少将は「北の方はどのような感じなのだろう」と知りたくて、几帳の隙間からご覧になると、白地の綾織物や紅色の練った絹織物など、上等なものではないが、それらを重ね着して、顔は平たくて、これがあのうわさに聞く北の方かと思われた。口元には魅力があり、気品のある様子もあった。ただどうも、眉のあたりに老いた感じがあり、性格の悪さも少し出ていると思った。

d　少将は「北の方のご機嫌はどうなのだろう」と知りたくて、几帳の隙間からご覧になると、白地の綾織物や紅色の練った絹織物など、上等なものではないが、それらを重ね着して、顔は平凡で、これがあのうわさに聞く北の方かと思われた。口元には魅力があり、気品のある様子もあった。ただどうも、眉のあたりに老いた感じがあり、性格の悪さも少し出ていると思った。

e　少将は「北の方の雰囲気はどうなのだろう」と知りたくて、几帳の隙間からご覧になると、白地の綾織物や紅色の練った絹織物など、悪いものではないが、それらを重ね着して、これがあのうわさに聞く北の方かと思われた。話し方には愛想があり、気品のある様子もあった。ただどうも、眉のあたりに老いた感じがあり、性格の悪さも少し出ていると思った。

問5　北の方と女君は鏡箱についてどのようなやりとりをしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　北の方が「ここに来たのは、買った鏡が趣のあるもので、あなたの持っている鏡箱にちょうど入りそうなので、しばらくその箱を貸してほしいといおうと思って」というと、女君が「よろしゅうございます」とおっしゃるので、「こうして快く応じてくださるとはとてもよいことです。さあ渡してください」といって鏡箱を引き寄せた。

b　北の方が「ここに来たのは、買った鏡が趣のあるもので、あなたの持っている鏡箱に入るに違いないと思ったので、ちょっとその箱を見せてほしいといおうと思って」というと、女君が「上等ではありませんが」とおっしゃるので、「こうして快く見せてくださるのはとてもよいことです。さあ渡してください」といって鏡箱を引き寄せた。

c　北の方が「ここに来たのは、買った鏡が趣のあるもので、あなたの持っている鏡箱に入るかどうか試してみたいので、ちょっとその箱を貸してほしいといおうと思って」というと、女君が「いやなわけではありませんが」とおっしゃるので、「そうやって不安定な心でおいでなのはよくありませんよ。さあ渡してください」といって鏡箱を引き寄せた。

d　北の方が「ここに来たのは、買った鏡が趣のあるもので、あなたの持っている鏡箱にちょうどお似合いと思ったので、しばらくこの鏡を貸してあげようと思って」というと、女君が「それはありがとうございます」とおっしゃるので、「こうやって気軽にやりとりできるのはよいことです。さあそうしましょう」といって鏡箱を引き寄せた。

e　北の方が「ここに来たのは、買った鏡が趣のあるもので、あなたの持っている鏡箱に入るかもしれないと思ったので、しばらくこの鏡を貸してあげようと思って」というと、女君が「そうでございましたか」とおっしゃるので、「こうやって気楽なお付き合いができるのはよいことです。さあそうしましょう」といって鏡箱を引き寄せた。

問6　鏡箱を手に取った北の方はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　北の方の持っている鏡を女君の鏡箱に移し入れると、本当に入ったので、「ちょうど良い鏡を買ったことだよ。この箱のような蒔絵は、今の世ではなかなか手に入らないのです」といって、鏡箱をなで回しなさった。

b　北の方の持っている鏡を女君の鏡箱に移し入れると、かろうじて入ったので、「便利な鏡を買ったことだよ。この箱のような蒔絵は、今の世では決して作ることはできませんよ」といって、鏡箱をなで回しなさった。

c　北の方の持っている鏡を女君の鏡箱に移し入れると、かろうじて入ったので、「尊い鏡を買ったことだよ。この箱のような蒔絵は、今の世ではなかなか手に入らないのです」といって、鏡箱をなで回しなさった。

d　北の方の持っている鏡を女君の鏡箱に移し入れると、本当に入ったので、「神々しい鏡を買ったことだよ。この箱のような蒔絵は、今の世では決して作ることはできませんよ」といって、鏡箱をなで回しなさった。

e　北の方の持っている鏡を女君の鏡箱に移し入れると、本当に入ったので、「すばらしい鏡を買ったことだよ。この箱のような蒔絵は、今の世では決して作ることはできませんよ」といって、鏡箱をなで回しなさった。

問7　立ち去ろうとした北の方と女君のやりとりとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　北の方はまだ不満そうな様子で、「その几帳はどこのものですか。とても立派ですね。ふだんと違うものですね。やはり何かありそうな様子です」とおっしゃるので、女君は、少将さまはどのようにお聞きになるだろうと、とても気詰まりである。「几帳がないと具合が悪いので、身内のものに取りに行かせました」と申し上げる。北の方は、やはり様子がおかしいとお思いになる。

b　北の方は満足そうな様子で、「その几帳はどこのものですか。とても立派ですね。ふだんと違う調度品もありますね。やはり何かありそうな様子です」とおっしゃるので、女君は、少将さまはどのようにお聞きになるだろうと、とても決まりが悪い。「几帳がないと具合が悪いので、身内のものに取りに行かせました」と申し上げる。北の方は、やはり様子がおかしいとお思いになる。

c　北の方は満足そうな様子で、「その几帳はどこのものですか。とても立派ですね。ふだんと違うものですね。やはり何か由緒ありそうな様子です」とおっしゃるので、女君は、北の方さまはどうしてそんなことをお聞きになるのだろうと、とても嫌な気がする。「几帳がないと具合が悪いので、身内のものに取りに行かせました」と申し上げる。北の方は、やはり様子がおかしいとお思いになる。

d　北の方は満足そうな様子で、「その几帳はどこのものですか。とても立派ですね。ふだんと違う調度品もありますね。やはり何かありそうな様子です」とおっしゃるので、女君は、北の方さまはどうしてそんなことをお聞きになるのだろうと、とても気分が悪い。「几帳がないと具合が悪いので、身内のものに取りに行かせました」と申し上げる。北の方は、やはり様子がおかしいとお思いになる。

e　北の方はまだ不満そうな様子で、「その几帳はどこのものですか。とても立派ですね。ふだんと違う調度品もありますね。やはり何か由緒ありそうな様子です」とおっしゃるので、女君は、少将さまはどのようにお聞きになるだろうと、とても心配である。「几帳がないと具合が悪いので、身内のものに取りに行かせました」と申し上げる。北の方は、やはり様子がおかしいとお思いになる。

問8　北の方が帰った後のあこぎの様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「あの品は小さなものですがすばらしいものです。北の方が何かを差し上げましょうなどということはありません。北の方は持って来たものと姫の調度の品をこうして交換するばかりです。以前、北の方腹の姫たちの御婿取りの時には、「修理して差し上げます」といって屏風などを持って行って自分のもののようにしてしまっています」と怒っている。

b　「あの品は実際すばらしいものです。北の方が何かを差し上げましょうなどということはありません。北の方は姫がお持ちの調度の品をこうして取るばかりです。以前、北の方腹の姫たちの御婿取りの時には、「修理して差し上げます」といって屏風などを持って行って自分のもののようにしてしまっています」と怒っている。

c　「あの品は実際すばらしいものです。北の方に対して何かをいただけますかなどとお願いすることはありません。北の方は姫がお持ちの調度の品をこうして取るばかりです。今後、北の方腹の姫たちの御婿取りの時には、「修理して差し上げます」といって屏風などを持って行って自分のもののようにしてしまうでしょう」と怒っている。

d　「あの品は実際すばらしいものです。北の方に対して何かをいただけますかなどとお願いすることはありません。北の方は持って来たものと姫の調度の品をこうして交換するばかりです。以前、北の方腹の姫たちの御婿取りの時には、「修理して差し上げます」といって屏風などを持って行って自分のもののようにしてしまっています」と怒っている。

e　「あの品は小さなものですがすばらしいものです。北の方が何かを差し上げましょうなどということはありません。北の方は姫がお持ちの調度の品をこうして取るばかりです。今後、北の方腹の姫たちの御婿取りの時には、「修理して差し上げます」といって屏風などを持って行って自分のもののようにしてしまうでしょう」と怒っている。

問9　怒りの収まらないあこぎと、女君とのやりとりとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　あこぎが「このままでは、姫のものはただ見ているうちに北の方腹の姫君たちのものになってしまいます。姫は寛大な心でいらっしゃるのに、北の方の感謝の念が見えることがありますか、ありますまい」と腹を立てて座っているので、女君は「そうだとしても、どの品も用が済んだのだから、差し上げてしまいましょう」とお答えになる。

b　あこぎが「このままでは、姫のものはただ見ているうちに北の方腹の姫君たちのものになってしまいます。姫は寛大な心でいらっしゃるのですから、北の方の感謝の念を見せてもらいましょう、そうではありませんか」と腹を立てて座っているので、女君は「そうだとしても、どの品も用が済めば、返してくださるでしょう」とお答えになる。

c　あこぎが「このままでは、姫のものはただ見ているうちに北の方腹の姫君たちのものになってしまいます。姫は寛大な心でいらっしゃるのに、北の方の感謝の念でも見てみたいものです、そうではありませんか」と腹を立てて座っているので、女君は「そうだとしても、どの品も用が済めば、返してくださるでしょう」とお答えになる。

d　あこぎが「このままでは、姫のものはただ見ているうちに北の方腹の姫君たちのものになってしまいます。姫は寛大な心でいらっしゃるのに、北の方の感謝の念でも見てみたいものです、そうではありませんか」と腹を立てて座っているので、女君は「そうだとしても、どの品も用が済んだのだから、差し上げてしまいましょう」とお答えになる。

e　あこぎが「このままでは、姫のものはただ見ているうちに北の方腹の姫君たちのものになってしまいます。姫は寛大な心でいらっしゃるのに、北の方の感謝の念が見えることがありますか、ありますまい」と腹を立てて座っているので、女君は「そうだとしても、どの品も用が済めば、返してくださるでしょう」とお答えになる。

問10　几帳の陰にいた少将と女君のやりとりとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　少将は、「必ず返してくださるよ」とお思いになり、几帳を押しやり外に出て来て、女君を引き寄せて「北の方はあまりお若くはないのですね。娘たちは北の方に似ているのですか」とおっしゃると、女君は「そうでもありません。皆さん、かわいらしいようです。北の方腹の姫たちを変にみっともないとご覧になっていらっしゃるのですか。少将さまがそういったと聞いたらなんとおっしゃるでしょう」という。

b　少将は、「本当にお心の広い方だ」とお思いになり、几帳を押しやり外に出て来て、女君を引き寄せて「北の方はあまりお若くはないのですね。娘たちは北の方に似ているのですか」とおっしゃると、女君は「そうでもありません。皆さん、かわいらしいようです。北の方腹の姫たちを変にみっともないとご覧になっていらっしゃるのですか。少将さまがそういったと聞いたらなんとおっしゃるでしょう」という。

c　少将は、「本当にお心の広い方だ」とお思いになり、几帳を押しやり外に出て来て、女君を引き寄せて「北の方はお若くいらっしゃるのですね。娘たちも北の方に似ているに違いない」とおっしゃると、女君は「そうでもありません。皆さん、かわいらしいようです。北の方腹の姫たちを変にみっともないとご覧になっていらっしゃるのですか。少将さまがそういったと聞いたらなんとおっしゃるでしょう」という。

d　少将は、「必ず返してくださるよ」とお思いになり、几帳を押しやり外に出て来て、女君を引き寄せて「北の方はお若くいらっしゃるのですね。娘たちも北の方に似ているに違いない」とおっしゃると、女君は「そうでもありません。皆さん、かわいらしいようです。北の方さまを変にみっともないとご覧になっていらっしゃるのですか。少将さまがご覧になったと聞いたらなんとおっしゃるでしょう」という。

e　少将は、「本当にお心の広い方だ」とお思いになり、几帳を押しやり外に出て来て、女君を引き寄せて「北の方はお若くいらっしゃるのですね。娘たちは北の方に似ているのですか」とおっしゃると、女君は「そうでもありません。皆さん、かわいらしいようです。北の方さまを変にみっともないとご覧になっていらっしゃるのですか。少将さまがご覧になったと聞いたらなんとおっしゃるでしょう」という。

（以上）

2月7日実施　全学日程2　法・文・経済・商・社会・政策創造・外国語・人間健康・総合情報・社会安全・ビジネスデータサイエンス学部

2026年度入学試験問題

国　語

注　意　事　項

Ⅰ　試験開始の指示があるまで問題用紙を開いてはいけません。

Ⅱ　解答用紙はすべて黒鉛筆（HB）〈シャープペンシルは，HB 0.5 mm以上の芯であれば使用可〉で記入することになっています。
（万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。）

Ⅲ　解答用紙右端の出席票に印刷されている受験番号を確認してください。間違いがなければ氏名欄に署名し，切取線から切り離してください。

Ⅳ　試験時間は75分です。

Ⅴ　問題は28ページで大問2問です。

マーク記入上の注意

1．解答欄にマークするときは，HBの黒鉛筆で次の正しい例のように，濃く正確にぬりつぶしてください。

2．マークのしかた

(ア)　正しい例

a　解答が1つの場合，例えばイと解答するときは

(1) ⓐ ● ⓒ ⓓ ⓔ　のように，マークしてください。

b　解答が2つの場合，例えばイとウと解答するときは

(1) ⓐ ● ⓒ ⓓ ⓔ
(1) ⓐ ⓐ ● ⓓ ⓔ

または

(1) ⓐ ⓐ ● ⓓ ⓔ
(1) ⓐ ● ⓒ ⓓ ⓔ

のように各1つずつマークしてください。

(イ)　悪い例

(1) ⓐ ⓐ ⓒ ⓓ ⓔ　○印でかこむ。
(2) ⓐ ◑ ⓒ ⓓ ⓔ　全部をぬりつぶしていない。
(3) ⓐ ✓ ⓒ ⓓ ⓔ　レ印をつける。
(4) ⓐ | ⓒ ⓓ ⓔ　｜印をつける。
(5) ⓐ ● ● ⓓ ⓔ　1欄に2つ以上マークする。

このような記入をしてはいけません。

3．一度記入したマークを訂正する場合は，消しゴムで完全に消してから記入しなおしてください。

(1) ⓐ ● ⊠ ⓓ ⓔ　のように×印をしても消したことにはなりません。

4．解答用紙を折り曲げたり，破ったり，また汚したりしないでください。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

真実か否か

まず「フェイク（fake）」という言葉から考えてみよう。この言葉は多くの場合、「でっち上げ」や「ニセ物」などを意味する。それゆえ、「フェイクニュース」という言葉は単なる間違った情報だけを指しているわけではない。たとえば、記憶違いで誤って伝えたことや新聞の誤報などは、事実と違う内容を伝えているという意味で「偽なる情報」ではある（こちらは「誤情報（misinformation）」とも呼ばれる）。しかし、偽なる情報を故意に伝えているわけではない。それに対して「フェイクニュース」という言葉は、多くの場合相手を欺くことを意図して偽なる情報を拡散させている場合に使われる（こちらは「ニセ情報（disinformation）」とも呼ばれる）。

では「フェイクニュース」という言葉は、「伝えられた内容が偽であり、かつ、欺くことを意図している」情報として定義できるだろうか。いや、おそらくこの定義ではまだ狭すぎる。なぜだろうか。

まず情報内容の**真実性**という観点から、伝えられている情報が明確に偽であるとはいえないが、それでもフェイクニュースと言いたくなるケースが存在する。たとえば、あるニュースサイトが「ボウト（ぼう）一〇〇〇人がドイツ最古の教会に放火」という見出しの記事を載せた（この事例は二〇一七年にアメリカの*1「プライトバート・ニュース」に掲載された記事を元に再構成している）。そこでは、「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」と繰り返し唱える男たちが花火を打ち上げ、ユイショ（ふん）ある教会に放火したと書かれている。この記事を読んだ多くの人は、イスラム過激派が故意に火災を起こし、教会が燃えてしまったと思うであろう。しかし、実際にはその群衆の一人が放った花火が教会の周囲を覆っていた網に誤って着火してしまったのであり、火はすぐに消し止められるほど小さかった。この場合、すべての情報が虚偽ではないが、それでも全体として読者を意図的に間違った理解へと誘導することになり、この点でミスリードである。このように読者に間違った理解を与えるミスリードもフェイクニュースの一部とみなしてよいだろう。

正直か否か

フェイクニュースは情報の内容だけではなく、情報を発信する人の意図に着目して区分することもできる。それが情報発信の**正直さ**という観点である。欺くことを意図している場合は正直さが欠如していることになるが、正直さが欠けていると言いたくなるケースはほかにもある。それは、でたらめを言っている場合である。「でたらめ（bullshit）」という言葉を世に広めたのは、*2H・G・フランクファートの*On Bullshit*（邦題『ウンコな議論』）であった。そこで彼は、嘘（うそ）をつく人とでたらめなことを言う人を区別している。まず嘘をつく人は、自分が言っていることが真実ではない（偽である）とわかっていて、その内容を相手に真実だと思わせることを意図する。この点で情報の内容の真偽が重要だということがわかっている。それに対して、でたらめを言う人はその内容が真であるか偽であるかをそもそも気にかけていない。

このようなでたらめなフェイクニュースの典型（てんけい）例は、二〇一六年のアメリカ合衆国大統領選挙の前に*3マケドニアのティーンエイジャーたちが流した情報にみることができる。その情報のほとんどは虚偽であったが、のちのインタビューのなかで彼らは、自分たちの報道が真実であるか、虚偽であるかには何の関心も抱いていなかったことを明らかにした。彼らは結果として多くの偽なる情報を発信していたが、その目的は閲覧者や視聴者を欺くことではなかった。人々にできるだけそのサイトを多くクリックさせ、広告収入によって多くのお金を生み出すことであった。彼らにとっては、情報が正しいかどうか、それによって人々が何を信じることになるかは、どうでもよいことであった。

以上から、フェイクニュースは「情報内容の**真実性**が欠如しており（偽であるか、ミスリードである）、かつ、情報を**正直**に伝えようとする意図が欠如している（欺くことを意図しているか、でたらめである）」ものとしてひとまず定義することができる。

*4R・ジャスターらはこの二つの観点をそれぞれ分類し、以下のような四つのタイプにフェイクニュースを整理した。

①二〇一六年のアメリカ大統領選で対立するジン（じん）エイの評価を落とすために、虚偽の情報が意図的に発信され、銃撃事件にまで発展したピザゲート事件。

②「プライトバート・ニュース」の事例。

③マケドニアの若者の書き込みの事例（特定の意図をもたず、プログラムに基づいて自動的にネット上で投稿を行うボット（bot）などもここに入るかもしれない）。

④二〇一八年のドナルド・トランプ（第四五代アメリカ合衆国大統領）によるツイートには建設中のある壁の写真とともに、「今日の午後の偉大なる報告。われわれの南国境の壁の建設がスタート！（Great briefing this afternoon on the start of our Southern Border WALL!）」と書き込まれていた。しかしその壁は実はまったく関係ない別の壁の写真であり、すでに壁の建設に着手しているという誤解を招くものだった。そしてもしも彼自身がそのツイートの真偽には何の関心もなく、ただ自分の業績をソウショ[23]するためにその写真を示したのだとすれば、それはまさにでたらめの事例となっている。

（中略）

真理の価値って何だろう

ここまでの話は真偽に関心をもつことが重要だということを前提にしていた。しかしここで、「そもそもなぜ真偽に関心をもたなければならないのか」と反発したくなる人もいるだろう。そしてこの問いに答えるのは、なかなか難しい。それはこの問いが「そもそも本当に真理に価値があるのか」という、より根本的な問いを含んでいるからである。

この問いに対してまず考えられるのは、真なる信念の価値に訴えることである。ここでの「信念」とは宗教的な信念だけを意味するのではなく、日常的に「……と思っていること」全般を意味する。たとえば、「このきのこは食べられる」という信念が間違っていると、その信念に従って行為すれば死んでしまう可能性がある。つまり、偽なる信念はさまざまな被害をもたらす。それは偽なる信念が世界の実際のあり方に反するからであり、世界のあり方に合致した真なる信念をもっているほうが行為を成功に導きやすいからである。実際、科学が発見した自然についての多くの真理は、さまざまな発明品を通じてわれわれの生活を飛躍的に便利にし、かつ、豊かにしている。この点で、真なる信念は大きな実践的価値をもつ。

この説明は、真偽の重要性を真理の価値自体によってではなく、真なる信念がもたらす結果の価値（生活の豊かさや生命の安全など）によって説明するものである。たとえば、お金はそれを使った結果として、おいしいものを食べられたり、楽しい映画を観られたりする点で価値がある。これを「道具的な価値」という。同様に、真なる信念は何か別の価値あるものを獲得するための道具的な価値をもつ。しかし、このように説明してしまうと、真なる信念は常に追求されるべきものではなくなってしまう。というのも、真なる信念は、常に利益を与えてくれるとは限らないからである。

たとえば、私が崖を飛び越えなければならない状況にあったとしよう。私がその崖を飛び越えられる確率が著しく低いことを正しく認識している場合、その真なる信念は私の足をすくませ、跳躍を失敗に導くこともある。このとき、真実を知らない場合のほうが生存の確率は上がることになる。あるいは、自分の病気が深刻なものであると知ることは、大きな恐怖や不安をもたらす。したがって、この場合も知らないほうが結果的に幸せに過ごせるかもしれない。このように本当のことを知ることは、実際にはさまざまなデメリットをもたらしうる。そして、これはニュースに対してもあてはまる。真実を伝えるニュースを知ることは、ときに不快な思い、不安、悲しみ、怒り、等々さまざまなネガティブな感情を引き起こす。それゆえ、真実よりも自分にとってポジティブな感情をもたらしてくれる「ニュース」を求めたほうがいいと判断することには一定の合理性がある。つまり、真実は常に人に幸福や利益をもたらすとは限らないから、真実を気にかける必要などない、という議論は可能であろう。

では、このような反論に対してどのように応答できるだろうか。まず真理から遠ざかることはその場では幸福や利益をもたらすかもしれないが、長い目でみるとやはり結果として得られる幸福や利益は減少する、と答えることはできる。

さらに真理には道具的な価値だけでなく、それ自体に価値があると答えることもできるだろう。お金の例でいえば、他の価値あるものと交換できることは道具的価値であるが、観賞用の金のコインが人を惹きつけるのは、それ自体が美しさという内在的な価値をもっているからである。真理もこれと同じである。事件の真相がどうか、世界が本当のところどうなっているのかに人が惹きつけられるのは、真理がそれ自体内在的な価値をもつからである、と。

真理を気にかけることの価値

しかし、いま問いを投げかけてきている相手はそのような真理にそもそも惹きつけられない人なのかもしれない。したがって、ここまでの回答だけだと彼ら彼女らの心にはあまり響かない可能性がある。そこで、真理の価値や真理がもたらす結果の価値だけではなく、真理を気にかけること自体にも価値があると言ってみたい。

＊5 M・リンチは、真理を気にかけることはよい人生の一部を構成するという意味で「構成的なよさ」をもつと考える。その例として、愛のある態度を挙げることができる。もちろん、愛のある態度をとる人は他人から好かれやすいだろうから、その道具的価値を説明することはできる。しかし、仮にそのような結果がまったく伴わなかった場合、その人の人生は価値がなかったことになるのだろうか。そうはならないだろう。愛のある態度は人としてよく生きることの本質的な一部を成しており、その価値はその態度の結果にあるのではなく、愛のある態度をとる人の人生そのものにある。同様に、真理を気にかけるという態度は人としてよく生きることの本質的な一部を成しており、そのような態度をとる人生そのものに価値がある。

では、真理を気にかける態度とは具体的にどのような行動として現われるのだろうか。それはたとえば、対立する意見のどちらにも耳を傾けようとすることであったり、証拠に細心の注意を払ったりすることであったりする。これらの行為を、リンチは知的な真摯さ（intellectual integrity）の現われと捉える。このような行動を継続できる人は知的な徳を具えた人でもある。

ここで「知的な徳（intellectual virtue）」という言葉について補足しておきたい。「徳」と聞くと、多くの人は道徳（倫理的な徳）を思い浮かべるだろう。たとえば、その代表例である勇気や寛容さなどは倫理的に優れた人がもつべき特性である。それに対して、知的な徳は知的に優れた人がもつべき特性である。たとえば、命の危険にさらされている仲間を助けるためにのび太さんが強大な敵に立ち向かう行為は倫理的な徳としての勇気の現われであるのに対して、真実を明らかにするためにロシアのジャーナリストが強大な権力に立ち向かう行為は知的な徳としての知的勇気の現われである。その違いは、倫理的な徳が「仲間の命を助ける」という倫理的によいこと（善）の実現に動機づけられているのに対して、知的な徳は「真実を明らかにする」という認識的によいことと（真理）の獲得に動機づけられている点にある。

この観点に立てば、先にみた「正直さの欠如」は知的な徳の欠如であり、もっといえば知的な悪徳である。そしてこのような悪徳を、われわれはフェイクニュースに限らず、日常的にしばしば目にしている。そのテンケイ例は、政治家の答弁や釈明である。彼ら彼女らは、その場を逃れるために意図的に質問をはぐらかし、関係のないことを滔々（とうとう）と弁じ続け、真実から人々の目を背けさせようとする。それは、知的な正直さや真摯さが欠如した態度である。これらの知的な悪徳をもった人は、たとえその人がどれほど崇高な政治的理想を喧伝（けんでん）していたとしても、人として優れているとみなすのは難しいだろう。しかし、このような真理への無関心な態度に異を唱えないままでいると、それが社会のなかで許容されていき、政治家だけでなく多くの人たちのあいだで常態化していくことになりかねない。いや、私の認識ではむしろこの常態化はすでにかなりの程度進行してしまっている。この意味で、フェイクニュースとの戦いは、単にわれわれの利益を守り、実害を避けるための戦いであるだけでなく、われわれのよき生のあり方を問い直し、取り戻すための戦いでもある。

（山田圭一『フェイクニュースを哲学する―何を信じるべきか』による　※一部省略した箇所がある）

注　＊1 「プライトバート・ニュース」＝アメリカのニュースサイト。　＊2 H・G・フランクファート＝アメリカの哲学者。（一九二九～二〇二三）　＊3 マケドニア＝東ヨーロッパのバルカン半島にある内陸国。　＊4 R・ジャスター＝ドイツの哲学者。（一九八五～　）　＊5 M・リンチ＝アメリカの哲学者。（一九六六～　）

問1　情報内容の真実性という観点からみたフェイクニュースについて、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　「フェイクニュース」という言葉は、「伝えられた内容が偽であり、かつ、欺くことを意図している」情報として定義できる。ただし、情報内容の真実性という観点からは、より広く定義すべきであり、すべての情報が虚偽ではなく真実であっても、読者に間違った理解を与えるミスリードであれば、それもフェイクニュースに含まれる、と述べている。

b　「フェイクニュース」という言葉は、「伝えられた内容が偽であり、かつ、欺くことを意図している」情報として定義できる。ただし、情報内容の真実性という観点からは、単なる間違った情報を指すだけでなく、全体として読者を意図的に間違った理解へと誘導するミスリードのような場合、それもフェイクニュースに含まれる、と述べている。

c　相手を欺くことを意図して偽なる情報を拡散させている場合に「フェイクニュース」という言葉が使われることが多い。しかし、情報内容の真実性という観点からは、たとえ明確に偽なる情報とはいえなくとも、全体として読者を意図的に間違った理解へと誘導するミスリードのような場合、それもフェイクニュースに含まれる、と述べている。

d　相手を欺くことを意図して偽なる情報を拡散させている場合に「フェイクニュース」という言葉が使われることが多い。しかし、情報内容の真実性という観点からは、偽なる情報を故意に伝えているのか否かにかかわらず、すべての情報が虚偽ではないが、読者に間違った理解を与えるミスリードもフェイクニュースに含まれる、と述べている。

e　相手を欺くことを意図して偽なる情報を拡散させている場合に「フェイクニュース」という言葉が使われることが多い。しかし、情報内容の真実性という観点からは、「誤情報」や「ニセ情報」だけでなく、すべての情報が虚偽ではないが、読者に間違った理解を与えるミスリードもフェイクニュースに含まれる、と述べている。

問2　情報発信の正直さという観点からみたフェイクニュースについて、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　フェイクニュースは、情報の内容だけではなく、情報発信の正直さという観点から区分することもできる。嘘をつく人は、情報の内容の真偽が重要だということがわかっている点で正直さが欠けてはいないのに対して、でたらめを言う人は、その内容が真であるか偽であるかを気にかけていない点で正直さが欠如している、と述べている。

b　フェイクニュースは、情報の内容だけではなく、情報発信の正直さという観点から区分することもできる。嘘をつく人は、自分が言っていることが真実ではないとわかっているのに対して、でたらめを言う人は、自分たちの報道が真実か虚偽かには何の関心も抱かず、できるだけ多くの人々に情報を発信することそのものを目的としている、と述べている。

c　情報発信の正直さが欠如しているケースとしては、欺くことを意図した場合だけでなく、でたらめを言っている場合もある。嘘をつく人は、欺くことを意図しているわけではなく、情報の内容の真偽が重要だということがわかっているのに対して、でたらめを言う人は、自分たちの報道が真実か虚偽かには何の関心も抱いていない、と述べている。

d　情報発信の正直さが欠如しているケースとしては、欺くことを意図した場合だけでなく、でたらめを言っている場合もある。嘘をつく人は、偽なる情報だとわかっていて、その内容を相手に真実だと思わせることを意図するのに対して、でたらめを言う人は、情報の内容の真偽や、それがもたらす結果については無関心である、と述べている。

e　情報発信の正直さが欠如しているケースとしては、欺くことを意図した場合だけでなく、でたらめを言っている場合もある。嘘をつく人は、情報の内容の真偽が重要だということがわかっているのに対して、でたらめを言う人は、その内容が真であるか偽であるかにかかわらず相手を欺くための情報発信をしている、と述べている。

問3　二〇一六年のピザゲート事件と二〇一七年の「プライトバート・ニュース」の事例は、情報内容の真実性と情報発信の正直さにおいて、フェイクニュースのどのようなタイプに該当するのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　ピザゲート事件は、偽なる情報の発信で欺こうとしている場合に該当し、「プライトバート・ニュース」の事例は、ミスリードな内容で欺こうとしている場合に該当する。

b　ピザゲート事件は、ミスリードな内容で欺こうとしている場合に該当し、「プライトバート・ニュース」の事例は、偽なる発言で欺こうとしている場合に該当する。

c　ピザゲート事件は、ミスリードな内容で欺こうとしている場合に該当し、「プライトバート・ニュース」の事例は、偽であり、でたらめである場合に該当する。

d　ピザゲート事件は、偽であり、でたらめである場合に該当し、「プライトバート・ニュース」の事例は、ミスリードな内容で欺こうとしている場合に該当する。

e　ピザゲート事件は、偽であり、でたらめである場合に該当し、「プライトバート・ニュース」の事例は、ミスリードであり、でたらめである場合に該当する。

問4　二〇一六年のマケドニアの若者の書き込みと二〇一八年のトランプの「南国境の壁」ツイートは、情報内容の真実性と情報発信の正直さにおいて、フェイクニュースのどのようなタイプに該当するのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　マケドニアの若者の書き込みは、ミスリードな内容で欺こうとしている場合に該当し、トランプの「南国境の壁」ツイートは、ミスリードであり、でたらめである場合に該当する。

b　マケドニアの若者の書き込みは、ミスリードな内容で欺こうとしている場合に該当し、トランプの「南国境の壁」ツイートは、偽であり、でたらめである場合に該当する。

c　マケドニアの若者の書き込みは、偽なる発言で欺こうとしている場合に該当し、トランプの「南国境の壁」ツイートは、偽であり、でたらめである場合に該当する。

d　マケドニアの若者の書き込みは、偽であり、でたらめである場合に該当し、トランプの「南国境の壁」ツイートは、ミスリードな内容で欺こうとしている場合に該当する。

e　マケドニアの若者の書き込みは、偽であり、でたらめである場合に該当し、トランプの「南国境の壁」ツイートは、ミスリードであり、でたらめである場合に該当する。

問5　真なる信念と偽なる信念について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　真偽に関心をもつことよりも、本当に真理に価値があるのかという根本的な問いのほうが重要である。真理の価値は、真なる信念がもたらす結果の価値で説明すると、真なる信念は、何か別の価値のあるものを獲得するための道具的な価値をもつといえるが、偽なる信念にも道具的な価値があるので、その説明だけでは十分でない、と述べている。

b　真理の価値を問うためには、まず真なる信念の価値に訴えることが考えられる。世界の実際のあり方に反する偽なる信念が、さまざまな被害をもたらすのに対して、世界のあり方に合致した真なる信念は、行為を成功に導きやすく、偽なる信念よりも大きな実践的価値をもち、われわれの生活を飛躍的に便利で豊かにしている、と述べている。

c　真理の価値を問うためには、まず真なる信念の価値に訴えることが考えられる。世界の実際のあり方に反する偽なる信念が、さまざまな被害をもたらすのに対して、世界のあり方に合致した真なる信念は、行為を成功に導きやすく、何か別の価値のあるものを獲得するための道具的な価値という、偽なる信念にはない価値をもつ、と述べている。

d　世界の実際のあり方に反する偽なる信念が、さまざまな被害をもたらすのに対して、世界のあり方に合致した真なる信念は、行為を成功に導きやすい。しかし、真なる信念には、生活の豊かさや生命の安全などをもたらす道具的な価値があるとはいえ、それが常に利益を与えてくれるとは限らず、さまざまなデメリットをもたらしうる、と述べている。

e　世界の実際のあり方に反する偽なる信念が、さまざまな被害をもたらすのに対して、世界のあり方に合致した真なる信念は、行為を成功に導きやすい。しかし、真実を知らない場合の方が結果的に幸せに過ごせる場合もあり、真なる信念がもつ道具的な価値よりも、本当のことを知ることによるさまざまなデメリットを考える必要がある、と述べている。

問6　真理の価値と真理を気にかけることの価値について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　真理には、道具的な価値や内在的な価値があるだけでなく、真理を気にかけることにも価値がある。真理を気にかける必要などない、という議論は可能であり、真理から遠ざかることは幸福や利益をもたらすかもしれないが、真理それ自体の内在的な価値や真理を気にかけることの価値を減少させることにつながる、と述べている。

b　真理には、道具的な価値や内在的な価値があるだけでなく、真理を気にかけることにも価値がある。お金が他の価値あるものと交換できるという内在的な価値で人を惹きつけるように、真理はそれ自体内在的な価値をもち、さらに真理を気にかけることはよい人生の一部を構成しており、真理を気にかける態度をとる人生そのものに価値がある、と述べている。

c　真理には、道具的な価値や内在的な価値があるだけでなく、真理を気にかけることにも価値がある。真理を気にかけることの価値は、真理に関心のない人の心にはあまり響かないかもしれないが、愛のある態度をとる人の場合のように、真理を気にかけることはよい人生の一部を構成するという意味で「構成的なよさ」をもつと考えられる、と述べている。

d　真理には、道具的な価値や内在的な価値があるだけでなく、真理を気にかけることにも価値がある。愛のある態度をとる人の人生そのものがそうであるように、真理がもたらす結果の価値を気にかけるという態度は、人としてよく生きることの本質的な一部を成しており、そのような態度をとる人生そのものに価値がある、と述べている。

e　真理には、道具的な価値や内在的な価値があるだけでなく、真理を気にかけることにも価値がある。真理を気にかけることはよい人生の一部を構成しており、愛のある態度をとる人の人生そのものがそうであるように、たとえよい結果が得られなかったとしても、真理を気にかける態度をとる人生そのものに価値がある、と述べている。

問7　知的な徳について、筆者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　知的な徳は、倫理的によいことの実現に動機づけられた倫理的な徳とは異なり、対立する意見のどちらにも耳を傾けようとしたり、証拠に細心の注意を払ったり、真実を明らかにするために強大な権力に立ち向かう行為などのように、真理の獲得に動機づけられている。一方、フェイクニュースに限らず、日常的にしばしば目にする政治家の答弁や釈明のように、知的な正直さや真摯さが欠如した態度をとることは、知的な悪徳である、と述べている。

b　勇気や寛容さなど、倫理的に優れた人のもつべき特性が倫理的な徳であるのに対して、知的な徳は知的に優れた人がもつべき特性である。このような倫理的によいことに動機づけられている倫理的な徳と、認識的によいことの獲得に動機づけられている知的な徳という観点に立てば、真実から人々の目を背けさせようとする政治家の答弁や釈明は、倫理的な徳を欠いているわけではないが、知的な徳が欠如しており、もっといえば知的な悪徳である、と述べている。

c　勇気や寛容さなど、倫理的に優れた人のもつべき特性が倫理的な徳であるのに対して、知的な徳は知的に優れた人がもつべき特性である。一方、真実から人々の目を背けさせようとする政治家の答弁や釈明は、フェイクニュースのテンケイ例であり、そのような知的な正直さや真摯さが欠如した態度をとる知的な悪徳をもった人は、たとえその人がどれほど崇高な政治的理想を喧伝していたとしても、人として優れているとみなすのは難しい、と述べている。

d　知的な徳は、真実を明らかにするという認識的によいことの獲得に動機づけられている。その点で、倫理的によいことの実現に動機づけられた倫理的な徳とは対立する価値をもち、仲間の命を助けるために強大な敵に立ち向かう行為が、倫理的な徳としての勇気の現われであるのとは違い、真理を明らかにするために強大な権力に立ち向かう行為は、知的な徳としての知的勇気の現われであり、その知的な徳が欠如しているのは、知的な悪徳である、と述べている。

e　知的な徳は、真実を明らかにするという認識的によいことの獲得に動機づけられている。一方、倫理的に優れた人がもつべき特性としての知的な正直さや真摯さが欠如した態度をとることは、知的な悪徳であり、このような真理への無関心な態度に異を唱えないままでいると、それが社会のなかで許容されていき、多くの人たちのあいだで常態化していくことになるが、その常態化はすでにかなりの程度進行してしまっている、と述べている。

問8　二重傍線部あいうえおのカタカナと同じ漢字を用いる語を選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

あ　ボウト
a　せっかくの彼の努力が報われずトロウに終わった。
b　仕事でアメリカにトコウする予定だ。
c　彼は家族への思いをトロした。
d　彼女の夫はシット深い性格だ。
e　政府は発展トジョウコクへの支援策をまとめた。

い　ユイショ
a　駅前でショメイ活動を行う。
b　君とイッショに映画を見に行きたい。
c　これ以上の被害拡大を防ぐためになんらかのショチを講ずる必要がある。
d　会社のショムカにデータの入力を依頼した。
e　ヒショのために家族で軽井沢に行く。

う　テンケイ
a　この間まで健康だった彼の突然の死はセイテンのへきれきだった。
b　食品テンカブツを取り過ぎないように注意する。
c　学園祭でおでんのモギテンを開いた。
d　ボートレースでバランスを崩してテンプクしてしまった。
e　広島で平和記念シキテンが開催された。

a 君のジンソクな対応に大変感謝している。
b サービス向上を目指しスタッフ一同、一層仕事にジンリョクする。
c 社長自らジントウシキを執って現場で指示をする。
d 刑事裁判で証人ジンモンが行われた。
e 災害でジンダイな被害を受けた国に支援金を送る。

㋔ ジンエイ

a 現在でも国際社会を脅かすフンソウが起きている。
b 火災報知器が鳴り響き、校内はソウゼンとなった。
c 委員会で法律のソウアンを作成した。
d 本のソウテイの良し悪しが売れ行きを左右する。
e 空気がカンソウしているため肌の潤いがなくなってしまった。

㋕ ソウショク

二　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

＊1成信の中将は、＊2入道兵部卿宮の御子にて、かたちいとをかしげに、心ばへもをかしうおはす。＊3伊予守兼資がむすめ、忘れで、親の伊予へ率て下りしほど、いかにあはれなりけむとこそおぼえしか。暁に行くとて、今宵おはして、有明の月に帰りたまひけむ直衣姿などよ。その君、常にゐて物言ひ、人の上など、わるきはわるしなどのたまひしに。

物忌くすしう、＊4つつのかめなどにたててくふ物まつかいかけなどするものの名を、姓にて持たる人のあるが、こと人の子になりて、平などいへど、ただそのもとの姓を、若き人々言ぐさにて笑ふ。ありさまもことなる事もなし。をかしき方なども遠きが、さすがに人にさしまじり心などのあるを、御前わたりも、「見苦し」など仰せらるれど、腹ぎたなきにや、告ぐる人もなし。＊5一条の院に造らせたまひたる一間の所には、にくき人はさらに寄せず、東の御門につと向かひて、いとをかしき小廂に式部のおもととともろともに、夜も昼もあれば、上も常に物御覧じにいらせたまふ。「今宵は内に寝なむ」とて、南の廂に二人臥しぬる後に、いみじう呼ぶ人のあるを、「うるさし」など言ひ合はせて、寝たるやうにてあれば、なほいみじうかしかましう呼ぶを、「それ起こせ。空寝ならむ」と仰せられければ、＊8この兵部来て起こせど、いみじう寝入りたるさまなれば、「さらに起きたまはざめり」と言ひに行きたるに、やがてゐつきて、物言ふなり。しばしかと思ふに、夜いたうふけぬ。＊9「権中将にこそあなれ。こは何事をかくゐては言ふぞ」とて、みそかにただいみじう笑ふも、いかでかは知らむ。暁まで言ひ明かして帰る。また「この君、いとゆゆしかりけり。さらに、寄りおはせむに、物言はじ。何事をさは言ひ明かすぞ」など言ひ笑ふに、遣戸あけて、女は入り来ぬ。

つとめて、例の廂に、人の物言ふを聞けば、「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし」とは、などて言ふにかあらむ。さあらむを、昨夜も、昨日の夜も、＊10そがあなたの夜も、すべてこのごろ、うちしきり見ゆる人の、今宵いみじからむ雨にさはらで来たらむは、なほ一夜もへだてじと思ふなめりと、あはれなりなむ。さらで、日ごろも見えず、おぼつかなくて過ぐさむ人の、かかるをりにしも来むは、さらに、心ざしのあるにはせじとこそおぼゆれ。人の心々なるものなればにや。物見知り、思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどを語らひて、あまた行く所もあり、もとよりのよすがなどもあれば、しげくも見えぬを、なほさるいみじかりしをりに来たりし、など、人にも語りつがせ、ほめられむと思ふ人のしわざにや。それも、むげに心ざしなからむには、げに何しにかは、作り事にても見えむとも思はむ。されど、雨の降る時には、ただむつかしう、今朝まで晴れ晴れしかりつる空ともおぼえず、にくくて、いみじき細殿、めでたき所ともおぼえず。まいていとさらぬ家などは、「とく降りやみねかし」とこそおぼゆれ。をかしき事、あはれなる事もなきものを。

さて、月の明かきはしも、過ぎにし方、行末まで思ひ残さることなく、心もあくがれ、めでたく、あはれなる事、たぐひなくおぼゆ。それに来たらむ人は、十日、二十日、一月もしは一年も、まいて七、八年ありて思ひ出でたらむは、いみじうをかしとおぼえて、ええあるまじうわりなき所、人目つつむべきやうありとも、かならず立ちながらも物言ひて返し、またとまるべからむは、とどめなどもしつべし。

月の明かき見るばかり、ものの遠く思ひやられて、過ぎにし事の、憂かりしも、うれしかりしも、をかしとおぼえしも、ただ今のやうにおぼゆるをりやはある。＊11こまのの物語は、何ばかりをかしき事もなく、ことば古めき、見所おほからぬも、月に昔を思ひ出でて、＊12虫ばみたる蝙蝠取り出でて、＊13「もと見しこまに」と言ひてたづねたるが、あはれなるなり。

（『枕草子』による）

注
＊1 成信の中将＝源成信。
＊2 入道兵部卿宮＝村上帝の第三皇子である、致平親王のこと。この話の執筆時には出家していた。
＊3 伊予守兼資＝源兼資。
＊4 つつのかめなどにたててくふ物まつかいかけなどするものの名＝女房の旧姓を表現したもの。当時、より高位の姓に改めることがあった。
＊5 一条の院＝平安宮の北東に位置した邸宅。この時、一条の院が仮の皇居であった。
＊6 小廂＝寝殿造りにおいて母屋と簀子縁の間の小さな空間。
＊7 式部のおもと＝女房の名。作者の同僚。
＊8 この兵部＝前述の改姓した女房のこと。
＊9 権中将＝成信のこと。
＊10 そがあなた＝一昨々日。
＊11 こまのの物語＝物語名。現在は散逸して伝わらない。
＊12 蝙蝠＝紙を貼った扇。
＊13 もと見しこまに＝『夕闇は道も見えねど古里はもとこし駒にまかせてぞくる』を踏まえた表現。

問1　作者は、成信をどのような人物であると述べていたか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　成信は、伊予守である兼資の娘のことを忘れられず、その親が伊予に娘を引き連れて下向する際、夜が明ける前のまだ暗い頃に京を出発し伊予へ行くということで、その前の晩にいらっしゃって、有明の月が空に残っている中をお帰りになったという、その直衣姿は、どんなに素晴らしいものであったろう。この君は、いつもこちらの御所に座り込んで話をし、人の身の上などについて、劣っているものは劣っている、などとおっしゃっていた。

b　成信は、伊予守である兼資の娘のことを忘れられず、その親が伊予に娘を引き連れて下向する際、夜が明ける前のまだ暗い頃に京を出発し伊予へ行くということで、その前の晩にいらっしゃって、有明の月が沈まないようにゆっくりとお帰りになったという、その直衣姿は、どんなに素晴らしいものであったろう。この君は、いつもこちらの御所に座り込んで話をし、人の上に立つことなどを、悪く思ってはいけない、などとおっしゃっていた。

c　成信は、伊予守である兼資の娘のことを忘れられず、その親が伊予に娘を引き連れて下向する際、夜がすっかり明けるのとちょうど同じ頃に京を出発し伊予へ行くということで、その前の晩にいらっしゃって、有明の月が空に残っている中をお帰りになったという、その直衣姿は、どんなに素晴らしいものであったろう。この君は、いつもこちらの御所に座り込んで話をし、人の身の上などについて、劣っているものは劣っている、などとおっしゃっていた。

d　成信は、伊予守である兼資の娘のことを忘れられず、その親が伊予に娘を引き連れて下向する際、夜が明けて少し明るくなった頃に京を出発し伊予へ行くということで、その前の晩にいらっしゃって、有明の月が空に残っている中をお帰りになったという、その直衣姿は、どんなに素晴らしいものであったろう。この君は、いつもこちらの御所に座り込んで話をし、人の上に立つことなどを、悪く思ってはいけない、などとおっしゃっていた。

e　成信は、伊予守である兼資の娘のことを忘れられず、その親が伊予に娘を引き連れて下向する際、夜が明けて少し明るくなった頃に京を出発し伊予へ行くということで、その前の晩にいらっしゃって、有明の月が沈まないようにゆっくりとお帰りになったという、その直衣姿は、どんなに素晴らしいものであったろう。この君は、いつもこちらの御所に座り込んで話をし、人の身の上などについて、劣っているものは劣っている、などとおっしゃっていた。

問2　姓を変えた女房とその周辺の様子はどのようであったか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　この女房は、他の人の養子になり、姓を「平」とするが、もとの姓を若い女房たちは笑いものにする。この人は、容貌も優れているわけではない。風情を解することに疎いものの、他の人と仲間になりたい気持ちはある。主人の中宮も旧姓を笑う若い女房の態度をたしなめなさるが、彼女たちはきまりが悪いのであろうか、素直にあやまる人もいない。

b　この女房は、他の人の養子になり、姓を「平」とするが、もとの姓を若い女房たちは笑いものにする。この人は、容貌も劣っているわけではない。風情を解することに疎いものの、他の人と仲間になりたい気持ちはある。主人の中宮も旧姓を笑う若い女房の態度をたしなめなさるが、彼女たちは行儀が悪いのであろうか、本人にこのことを伝える人もいない。

c　この女房は、他の人の養子になり、姓を「平」とするが、もとの姓を若い女房たちは笑いものにする。この人は、容貌も優れているわけではない。風情を解することに疎いものの、他の人と仲間になりたい気持ちはある。主人の中宮も旧姓を笑う若い女房の態度をたしなめなさるが、彼女たちは意地が悪いのであろうか、本人にこのことを伝える人もいない。

d　この女房は、特別な人の養子になり、姓を「平」とするが、もとの姓を若い女房たちは笑いものにする。この人は、容貌も劣っているわけではない。風情を解することに疎いものの、他の人と仲間になりたい気持ちはある。主人の中宮も旧姓を笑う若い女房の態度をたしなめなさるが、彼女たちは性格が悪いのであろうか、素直にあやまる人もいない。

e　この女房は、特別な人の養子になり、姓を「平」とするが、もとの姓を若い女房たちは笑いものにする。この人は、容貌も優れているわけではない。風情を解することに疎いものの、他の人と仲間になりたい気持ちはある。主人の中宮も旧姓を笑う若い女房の態度をたしなめなさるが、彼女たちは育ちが悪いのであろうか、本人にこのことを伝える人もいない。

問3　作者は、女房の局の様子をどのようなものであったと述べているか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　一条の院にお作りになった女房の局には、気にくわない人は全く寄りつかせないようにした。東の門とちょうど目の前で向かい合っており、大変趣のある小廂に、式部のおもとと共に、夜も昼も伺候しているので、帝もいつも様子を見るためにお入りになる。

b　一条の院にお作りになった女房の局には、気が合わない人は全く寄りつかせないようにした。東の門とはっきり目の前で向かい合っており、大変趣のある小廂に、式部のおもととかわるがわる、夜も昼も休憩しているので、帝もいつも様子を見るためにお入りになる。

c　一条の院にお作りになった女房の局には、気にくわない人は全く寄りつかせないようにした。東の門とちょうど目の前で向かい合っており、大変趣のある小廂に、式部のおもととかわるがわる、夜も昼も休憩しているので、帝もいつも様子を見るためにお入りになる。

d　一条の院にお作りになった女房の局には、気が合わない人は全く寄りつかせないようにした。東の門とちょうど目の前で向かい合っており、大変趣のある小廂に、式部のおもとと共に、夜も昼も伺候しているので、帝もいつも様子を見るためにお入りになる。

e　一条の院にお作りになった女房の局には、気が合わない人は全く寄りつかせないようにした。東の門とはっきり目の前で向かい合っており、大変趣のある小廂に、式部のおもとと共に、夜も昼も伺候しているので、帝もいつも様子を見るためにお入りになる。

問4　作者と式部のおもとが内で寝ようとしたときは、どのような様子であったか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　ある晩、「今晩は内で寝たい」と南の廂の間に二人で横になった後に、やかましく呼ぶ人がいるのを、「面倒なことである」などと言い合わせて、寝てしまったふりをしていたところ、なおも大変やかましく呼ぶ。私たちのところに兵部が来て起こすのだが、しっかりと寝入っているふりをしているので、「どうしてお起きにならないのでしょう」と、呼ぶ人に言いに行ったところ、そのままその呼ぶ人のところに居座って話しているようである。

b　ある晩、「今晩は内で寝よう」と南の廂の間に二人で横になった後に、やかましく呼ぶ人がいるのを、「面倒なことである」などと言い合わせて、寝てしまったふりをしていたところ、なおも大変やかましく呼ぶ。私たちのところに兵部が来て起こすのだが、しっかりと寝入っているふりをしているので、「今夜はもうお起きにはならないでしょう」と、呼ぶ人に言いに行ったところ、そのままその呼ぶ人のところに居座って話しているようである。

c　ある晩、「今晩は内で寝たい」と南の廂の間に二人で横になった後に、やかましく呼ぶ人がいるのを、「面倒なことである」などと言い合わせて、寝てしまったふりをしていたところ、なおも大変忌々しく呼ぶ。私たちのところに兵部が来て起こすのだが、しっかりと寝入っているふりをしているので、「いっこうにお起きにならないようです」と、呼ぶ人に言いに行ったところ、そのままその呼ぶ人のところに居座って話しているようである。

d　ある晩、「今晩は内で寝よう」と南の廂の間に二人で横になった後に、やかましく呼ぶ人がいるのを、「面倒なことである」などと言い合わせて、寝てしまったふりをしていたところ、なおも大変やかましく呼ぶ。私たちのところに兵部が来て起こすのだが、しっかりと寝入っているふりをしているので、「いっこうにお起きにならないようです」と、呼ぶ人に言いに行ったところ、そのままその呼ぶ人のところに居座って話しているようである。

e　ある晩、「今晩は内で寝なければ」と南の廂の間に二人で横になった後に、やかましく呼ぶ人がいるのを、「面倒なことである」などと言い合わせて、寝てしまったふりをしていたところ、なおも大変やかましく呼ぶ。私たちのところに兵部が来て起こすのだが、しっかりと寝入っているふりをしているので、「今夜はもうお起きにはならないでしょう」と、呼ぶ人に言いに行ったところ、そのままその呼ぶ人のところに居座って話しているようである。

問5　夜がふけてしまった後の様子は、どのようであったか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　こちらで「兵部が居座って話していたのは、成信であろうか。何を話すのか」と、ひそひそと笑い者にしているのを、兵部たちはどうして知ろうか。そして「この成信は、大変魅力的な人だった。いらっしゃったとしても、しゃべらないでいることはできまい。何事があったとしても語り明かしたい」などと言って笑っていたところ、この兵部が入ってきた。

b　こちらで「兵部が居座って話していたのは、成信であろうか。何を話すのか」と、ひそひそと笑い者にしているのを、兵部たちはどうして知ろうか。そして「この成信は、大変ゆかいな人だった。いらっしゃったとしても、しゃべらないでいることはできまい。何事があったとしても語り明かしたい」などと言って笑っていたところ、この兵部が入ってきた。

c　こちらで「兵部が居座って話していたのは、成信であろう。何を話すのか」と、ひそひそと笑い者にしているのを、兵部たちはどうして知ろうか。そして「この成信は、大変恐ろしい人だった。いらっしゃったとしても、しゃべることはすまい。何事があったとしても語り明かすまい」などと言って笑っていたところ、この兵部が入ってきた。

d　こちらで「兵部が居座って話していたのは、成信であろう。何を話すのか」と、ひそひそと笑い者にしているのを、兵部たちはどうして知ろうか。そして「この成信は、大変色っぽい人だった。いらっしゃったとしても、しゃべらないでいることはできまい。何事かがあったら皆と語り明かそう」などと言って笑っていたところ、この兵部が入ってきた。

e　こちらで「兵部が居座って話していたのは、成信であろう。何を話すのか」と、ひそひそと笑い者にしているのを、兵部たちはどうして知ろうか。そして「この成信は、大変けしからぬ人だった。いらっしゃったとしても、しゃべることはすまい。何事をそのように語り明かすのか」などと言って笑っていたところ、この兵部が入ってきた。

問6　作者は、翌朝に人々の話すことを聞いて、どのように述べているか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　ある人が「雨がひどく降っている折に来てくれる人が、すばらしい。日頃は薄情で、ひどい仕打ちがあったとしても、雨に濡れながら来るのであれば、自分の情けないこともすべて忘れてしまう」と言うが、どうしてそのようなことを言うのであろう。それはそうだが、この頃頻繁に訪れてくる男が、今宵ひどい雨にずぶ濡れになってやって来るのは、やはり一晩も隔てたくないのだと思っているのだろうと、女も情緒深く感じるのだろう。

b　ある人が「雨がひどく降っている折に来てくれる人が、すばらしい。日頃は薄情で、ひどい仕打ちがあったとしても、雨に濡れながら来るのであれば、自分の情けないこともすべて忘れてしまう」と言うが、どうしてそのようなことを言うのであろう。それはそうだが、この頃頻繁に訪れてくる男が、今宵ひどい雨をものともせずにやって来るのは、やはり一晩も隔てないようにと思っているのだろうと、女も情緒深く感じるのだろう。

c　ある人が「雨がひどく降っている折に来てくれる人が、すばらしい。日頃は薄情で、ひどい仕打ちがあったとしても、雨に濡れながら来るのであれば、相手の嫌な行動のこともすべて忘れてしまう」と言うが、どうしてそのようなことを言うのであろう。そうではなく、この頃頻繁に訪れてくる男が、今宵ひどい雨に文句を言いながらやって来るのは、やはり一晩も隔てないようにと思っているのだろうと、女も情緒深く感じるのだろう。

d　ある人が「雨がひどく降っている折に来てくれる人が、すばらしい。日頃は薄情で、ひどい仕打ちがあったとしても、雨のような涙で袖を濡らして謝るのであれば、相手の嫌な行動のこともすべて忘れてしまう」と言うが、どうしてそのようなことを言うのであろう。そうではなく、この頃頻繁に訪れてくる男が、今宵ひどい雨にずぶ濡れになってやって来るのは、やはり一晩も隔てたくないのだと思っているのだろうと、女も情緒深く感じるのだろう。

e　ある人が「雨がひどく降っている折に来てくれる人が、すばらしい。日頃は薄情で、ひどい仕打ちがあったとしても、雨のような涙で袖を濡らして謝るのであれば、自分の情けないこともすべて忘れてしまう」と言うが、どうしてそのようなことを言うのであろう。そうではなく、この頃頻繁に訪れてくる男が、今宵ひどい雨をものともせずにやって来るのは、やはり一晩も隔てたくないのだと思っているのだろうと、女も情緒深く感じるのだろう。

問7　作者は、日頃訪れない男のことを、どのように述べているか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　そうではなくて、日頃も訪れず、女のことを大事にしないような男で、このような雨の折にきちんと来るのは、なおいっそう、こちらに対して愛情があるとは決して認められないと思われる。男女の関係は、お互いの相性によるからであろうか。

b　そうではなくて、日頃も訪れず、女が不安に思って過ごすような男で、このような雨の折にかぎって来るのは、なおいっそう、こちらに対して愛情があるとは決して認められないと思われる。物事の捉え方は、人それぞれであるからであろうか。

c　そうではなくて、日頃も訪れず、女のことを大事にしないような男で、このような雨の折にもやはり来ないのは、なおいっそう、こちらに対して愛情があるとは決して認められないと思われる。物事の捉え方は、人それぞれであるからであろうか。

d　そうではなくて、日頃も訪れず、女が不安に思って過ごすような男で、このような雨の折にですら来ないのは、なおいっそう、こちらに対して愛情があるとは決して認められないと思われる。物事の捉え方は、人それぞれであるからであろうか。

e　そうではなくて、日頃も訪れず、女が不安に思って過ごすような男で、このような雨の折にしか来ないのは、なおいっそう、こちらに対して愛情があるとは決して認められないと思われる。男女の関係は、お互いの相性によるからであろうか。

問8　作者は、雨の降る時のことを、どのように述べているか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　雨が降る時は、ただうっとうしく、今朝まで晴れ晴れとしていた空であるとも感じられず、うとましくて、御殿のすばらしい細殿も、立派なものとも思われない。まして人が去ってしまった家などについては、「早く降り止んでしまえよ」と思われる。趣のあることや、情緒のあることもないのだから。

b　雨が降る時は、どうしてよいかわからず、今朝まで晴れ晴れとしていた空であるとも感じられず、うとましくて、御殿のすばらしい細殿も、立派なものとも思われない。まして人が去ってしまった家などについては、「早く降り止んだらいいのに」と思われる。趣のあることや、情緒のあることもないのだから。

c　雨が降る時は、ただうっとうしく、今朝まで晴れ晴れとしていた空であるとも感じられず、うとましくて、御殿のすばらしい細殿も、立派なものとも思われない。ましてたいしたことのない家などについては、「早く降り止んでよかった」と思われる。趣のあることや、情緒のあることもないのだから。

d　雨が降る時は、どうしてよいかわからず、今朝まで晴れ晴れとしていた空であるとも感じられず、うとましくて、御殿のすばらしい細殿も、立派なものとも思われない。ましてたいしたことのない家などについては、「早く降り止んだらいいのに」と思われる。趣のあることや、情緒のあることもないのだから。

e　雨が降る時は、ただうっとうしく、今朝まで晴れ晴れとしていた空であるとも感じられず、うとましくて、御殿のすばらしい細殿も、立派なものとも思われない。ましてたいしたことのない家などについては、「早く降り止んでしまえよ」と思われる。趣のあることや、情緒のあることもないのだから。

問9　作者は、月の明るい折の男の来訪について、どのように述べているか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　月の夜に来訪する男は、年月が経ってから思い出して来た場合であっても、大変風情があると感じられ、緊張していつもの自分でいられない場所であっても、人目をはばからねばならない様子であっても、必ず立ったままでも語らってから帰すであろうし、また泊まってもいいような場所であれば、引き留めるに違いない。

b　月の夜に来訪する男は、年月が経ってから思い出して来た場合であっても、大変風情があると感じられ、緊張していつもの自分でいられない場所であっても、人目をはばからねばならない様子であっても、必ず立ったままでも語らってから帰すであろうし、また恋が終わってしまうような場合であれば、引き留めるに違いない。

c　月の夜に来訪する男は、年月が経ってから思い出して来た場合であっても、大変風情があると感じられ、到底男女が逢うことが許されない場所であっても、人目をはばからねばならない様子であっても、必ず立ったままでも語らってから帰すであろうし、また泊まってもいいような場所であれば、引き留めるに違いない。

d　月の夜に来訪する男は、年月が経ってから思い出して来た場合であっても、大変風情があると感じられ、到底男女が逢うことが許されない場所であっても、人から目をつけられかねない様子であっても、必ず立ったままでも語らってから帰すであろうし、また泊まってもいいような場所であれば、引き留めるに違いない。

e　月の夜に来訪する男は、年月が経ってから思い出して来た場合であっても、大変風情があると感じられ、滅多に男女が出会うことがない場所であっても、人から目をつけられかねない様子であっても、必ず立ったままでも語らってから帰すであろうし、また恋が終わってしまうような場合であれば、引き留めるに違いない。

問10　作者は、明るい月について、どのように述べているか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a　月の明るい姿を見ることぐらい、様々なことが遠く思いやられて、過ぎ去ったことの、いやだったことも、うれしかったことも、心がひかれると思ったことも、もう今となっては全く別のもののように思われてしまうのだ。『こまのの物語』は、少しも心がひかれることもなく、言葉も古めかしく、見所も多くないが、月が昔のままのように見えたため、虫が食っている蝙蝠扇を取り出して、「もと見しこまに」と口ずさんで男が女を訪ねた場面は、面白みがある。

b　月の明るい姿を見ることぐらい、様々なことが遠く思いやられて、過ぎ去ったことの、いやだったことも、うれしかったことも、心がひかれると思ったことも、もう今となっては全く別のもののように思われてしまうのだ。『こまのの物語』は、少しも心がひかれることもなく、言葉も古めかしく、見所も多くないが、月を見ることで昔を思い出して、虫が食っている蝙蝠扇を取り出して、「もと見しこまに」と口ずさんで男が女を訪ねた場面は、面白みがある。

c　月の明るい姿を見ることぐらい、様々なことが遠く思いやられて、過ぎ去ったことの、いやだったことも、うれしかったことも、心がひかれると思ったことも、たった今経験したかのように思われる機会は他にあるだろうか。『こまのの物語』は、少しも心がひかれることもなく、言葉も古めかしく、見所も多くないが、月が昔のままのように見えたため、虫の絵を描いた蝙蝠扇を取り出して、「もと見しこまに」と口ずさんで男が女を訪ねた場面は、面白みがある。

d　月の明るい姿を見ることぐらい、様々なことが遠く思いやられて、過ぎ去ったことの、いやだったことも、うれしかったことも、心がひかれると思ったことも、たった今経験したかのように思われる機会は他にあるだろうか。『こまのの物語』は、少しも心がひかれることもなく、言葉も古めかしく、見所も多くないが、月を見ることで昔を思い出して、虫が食っている蝙蝠扇を取り出して、「もと見しこまに」と口ずさんで男が女を訪ねた場面は、面白みがある。

e　月の明るい姿を見ることぐらい、様々なことが遠く思いやられて、過ぎ去ったことの、いやだったことも、うれしかったことも、心がひかれると思ったことも、たった今経験したかのように思われる機会は他にあるだろうか。『こまのの物語』は、少しも心がひかれることもなく、言葉も古めかしく、見所も多くないが、月を見ることで昔を思い出して、虫の絵を描いた蝙蝠扇を取り出して、「もと見しこまに」と口ずさんで男が女を訪ねた場面は、面白みがある。

（以上）